
神様はサイコロを知らない

ありすきゃろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様はサイコロを知らない

【Nコード】

N9790J

【作者名】

ありすきやるる

【あらすじ】

とある街のとある場所にその建物は建っていた。コンクリートの打ち放し。全面灰色。およそ三階建てくらいの大きさ。まるで巨大なサイコロのように見えるその建物には窓がなく、どこにでも繋がりそうな茶色のドアが一つあるだけだった。そんなどこか異様で奇妙な建物。ドアの上にあるプレートだけが、その建物の存在理由を示していた。

『悩み事、解決します』

この小説は、つまり、なんとというか、ほら、便利屋みたいなのが普通の悩み、奇妙な悩み、変な悩み、色んな悩みを解決するタイプの話。みたいなものになる予定である。

プロローグ・誘惑（前書き）

前置きというか注意事項というか言い訳

はいどうも。ありすきゃるるです。

あらすじに書いた通りです。

そういう小説になります。

たぶん

キーワードに書いた通りです。

お化けとか出てきます。

たぶん

更新スピードとか未定です。

絶対

どうぞよろしくお願いいたしますですはい。

プロローグ・誘惑

ねえ

ねえってば

そう。あなたよ。あ・な・た。

あたしの声。聞こえてるんでしょ？

そう。あたしがあなたに話しかけているの。

え？何か用かって？くすくす。当たり前でしょ？用がないのに話しかけるわけないじゃない。

といてもね。あたしがあなたに何かお願いがあるわけじゃないの。あ。今の嘘よ。本当は用があるんだけど。今はいいの。

どうしてって。別にいいじゃない。今はあたしの事よりあなたの事よ。あたしの用はその後でいいの。

そう。あなたの事。何か悩みでもあるんじゃないの？あるんでしょ？あるにきまつてるでしょ？だってあたしが話しかけているんだもの。ねえ？

くすくす。やっぱりあるんだ。ならその扉を叩きなさい。あ。叩くって言うのは比喻表現よ？扉の横のチャイムを鳴らしてね？

どうしてって。ほら。扉の上に書いてあるでしょ？

ええ。そうよ。悩みを解決してくれるわ。どんな悩みだって解決し
てくれるわ。

そう。あなたの悩みも解決してくれるわ。ええ。きつとね・・・

1 - 1 . まず舞台の説明と人物紹介

0 .
その部屋は広かった。広かったが開放的ではなく、閉鎖的な印象を受ける部屋であった。

その部屋には窓というものがない。天然の光を得ることが出来ない。この部屋は、蛍光灯が作り出す人工的な光が一日中照らす。その光が閉鎖的な印象を更に強くする。壁はコンクリートむき出しで、人工的な光を更に人工的なものにしていく。

その部屋には壁と同じ大きさの本棚があった。その本棚には辞書のように分厚い本から、同人誌のように薄い本まで、様々な種類の本が綺麗に整頓されている。

その部屋にはドアが2つあった。1つは外に繋がるドア。もう1つは2階に続くドア。

その部屋には流し台と空調設備があった。大きなのっぼの古時計があった。ソファが2つあった。ソファに挟まれるようにガラス製のテーブルが置いてあった。

そしてその部屋には男と女がいた。

男は校長室にあるような椅子に座り、職員室にあるような机に、暇そうに頬杖をついていた。茶髪交じりの髪で、スーツをよく言えば着崩して、悪く言えばだらしく着ていた。まるでホストのような風貌だった。机の上にはライトスタンドが1つと、ペン立てが置いてあるだけだった。

女は校長室にあるような椅子に座り、職員室にあるような机の上にノートパソコンを置いて何かをしていた。黒髪で、スーツをちゃんと着ていた。まるで有能な秘書のような風貌であった。しかし、メガネはかけてはいなかった。机の上には、電話や書類など様々な物が置かれていた。

男の名は茶柱誠。

女の名は鼎栞。

誠が上司であり栞が部下という位置づけではあるが、どちらが優秀なのかは机上を見れば一目瞭然かもしれない。しかし、机上と見かけで判断するのはよくないと明記しておく。

あと、上司の方が優秀でなければならぬ。というわけではないということも覚えておいて欲しい。

1 .

「暇だねー。栞ちゃん」

私がノートパソコンで作業をしていると、社長の野郎がそう言った。何度も何度も「ちゃん」付けするなど言っているのに……。あいつには学習能力がないのだろう。

「栞ちゃん言うな。私は暇ではありません」

それとも、私がちゃん付けするな、と言うのを楽しみにしているだろうか。私がそういった後の、社長の顔を見るとそんな気がしてきた。そんな無駄なことを考えるのをやめて、作業を続ける。今が正念場なのだ。

「忙しいって……。何してんの？」

不思議そうに社長が私に聞いてくる。どうやら自分が暇なのに私が忙しい理由がわからないらしい。

「見てわかりませんか？」

「ふむ……………」そう呟いて社長は、頬杖をやめて腕を組んだ。私は気にせず、マウスを動かす。念のために言うが、マウスとはパソコン周辺機器の一種である。動物ではない。

「さっきから栞君はマウスしか動かしてないね……………わかった！」指を鳴らして大げさに言う理由がわからない。

「ソリティアだろ！」

わざわざ私を指差して答えを宣言してもらって恐縮だが、ソリティアをやっているわけがない。私が何も言わずに作業を続行していると、「あれ、違うのか……………」と言い社長はまた、腕を組み考え始め

たよつだ。精々悩むがいい。そして私に感謝するがいい。忙しい私がお前の暇つぶしに付き合っていることを。そう、私は別に教えるのが面倒だから何をしているか社長に教えていないわけではない。暇つぶしに付き合っただけでやっているのだ。いい奴だな。私。
ピーピーピー

私が内心ほくそ笑んでいると、電子音が聞こえた。社長の方から聞こえてくる。「腹時計が鳴ってますよ」と、言っただけで思ったが、あまり面白くないと判断したので自重した。
「いけね。忘れてた」

社長は机の引き出しから、電子音の発信源を取り出した。卵型の育成ゲーム機だ。1番古いやつではないだろうか。しかも白色。私は作業を続けながら社長にきく。

「何ですか。それ」

「たまごつち。食事やるのを忘れてた」

腹時計なのは当たっていたのか。言っておけばよかったと後悔。すぐにその後悔を忘却の海に航海させた。別の後悔がやってきた。

「それ、1番古いやつですか？」

「そう。しかも白。手に入れるの苦労したんだぜ？」

社長はたまごの世話をしているようだ。暇人め。

「それ、結構高く売れるんじゃないですか？」

そんな話を昔聞いたことがある。今はどうか知らないけど。売って是非とも、金に換えて欲しい。そして私に金をくれ。ここ最近、仕事がない。今月の給料をくれるか不安なのだ。

「菜君。君は鬼だな。子どもを売って言うのか!？」

そこまで愛着持っているのかよ。と、ため息1つ。社長は続ける。

「これは本当によく出来ているよ。食事を上げるのをこつちが忘れていてもわざわざ教えてくれるし。可愛いし、可愛いし、可愛いし!しかも、俺の暇を潰してくれる。君とは違ってね」

「それはよかったですね」

私だってお前の暇を潰してやっただけですけどね!。

「しかしこの子」どうやら社長の中では物ではなく者扱いらしい。
「将来が心配になるよ。なんせ食料は全部配給制だろ？トイレの世話だって人任せだ。この子はこれから独り立ちできるんだらうか。仕事が出来るんだらうか。ああ、でも独り立ちするってことは俺の手を離れるわけか。それはそれで寂しいな……。 栞君はどう思う？」

「どうも思いません」

「そうか、なるほど。そういう考え方もあるのか……。」「何かを受信したらしい。どこかに受診して欲しいと心から願う。

「確かにこの子は俺の暇を潰すという仕事をしている。そうか。俺はその報酬として望むままに食事をあげて、トイレの世話をしていたのか。ふっ……。、需要と供給ってやつか」

あいつは何を言っているのだらう。まあいい。私は私の作業を行なう。あともう少しだ。あともう少しで終わる。

ピンポン

一般的な来客を告げる音が鳴った。いつも思うがこの部屋にこの音は不自然だ。アンバランスというか。

社長はたまごつちを机にしまった。私は地雷処理作業を諦めた。あともう少しでハイスコアだったのに。

「さあ栞君。需要と供給だ。俺たちは依頼人の悩みを解決する。そして代わりに、金をもらう」

私は扉を開けた。需要と供給ってそういう意味だっけ。と、思いながら。

1-1・まずは舞台の説明と人物紹介（後書き）

空調設備

ほ

流し台か

男

つくえ

ん

時ん

そふあー

計

つか

テーブル

く女

だ

え

そふあー

ん

扉

な

扉

まあ、こんなイメージです。

携帯で作ったからパソコンじゃあ変になるかも。その時は気合で補完して。

ちやちやちやちや

茶柱誠

かなえしおり

鼎菜

念のためにね。

そして重要なことは、この話がこの小説の（笑）のマックスですってことです。

1 - 2 . 次に依頼人の説明と依頼内容

2 .
ドアの向こうには女性が立っていた。

「どうぞ。そこにお座りください」

私がソファーに座るように促すと、「はい。ありがとうございます」と丁寧にお辞儀された。少々面食らったが気にせずお茶の準備をする。社長が女性の対面に座り、「よくいらっしやいました」と、笑顔で歓迎している。あの笑顔ができないので、私は接客に向かないのだ。どうも私が笑うと、何かを企んでいるように見えるらしい。私にはマイナスの笑顔しかできないのだろう。もう諦めている。お茶を女性と社長の前に置き、自分の席に着く。ワードを開き、文章を打つ準備をする。社長が依頼人から話を聞き、私が文章を打つ。そういう役割分担なのだ。

『依頼人：女性。30代前後。柔らかい表情、ゆったりとした物腰、ふわふわとした雰囲気、服装から、なんとなくいいところのお嬢様っぽい。世間知らずな気がする。外にでて働いているところが想像出来ないで、たぶん家事手伝い。もしくは主婦』

「あの、私」

「はいはい。わかってますよ。悩みごとがあるんですよね」

「まあ。どうしてわかるんですか？」

ここにくる奴はそういう奴だからだよ。と言ってやりたいが我慢。

今回の依頼人はそういう類のようだ。『あれのことを聞かない。厄介な依頼人の可能性有り』

「それはもう、そういう仕事ですからね」

「そうなんですか。すごいですね。それで、えっと、ここはどういう所なんですか？悩みを解決してくれると聞いたんですけど……」
女性が部屋を見渡す。見渡したところが悩みを解決してくれるかわからはずもない。しかし、聞いた……ねえ。『厄介な依頼人

の可能性大』

「まあ、便利屋みたいなものです」

「便利屋？」

「ええそうです。便利屋。なんでもやりますよ。家事手伝いからペットの世話。ペットの世話から人の世話。人の世話から物探し。物探しから家探し。家探しから人探し。人探しから人殺し。人殺しから家事手伝い。なんでもやります。なんでもやるから、あなたの悩みも絶対に解決できます」

社長が適当にこの場所を説明する。

「まあ。それはすごいわね」

女性はそう言った。純粹にそう思っているようだ。

「そうなんですよー」

社長が笑顔を維持しながらこつちを見た。私は無言で頷いた。『厄介な依頼人で決まり』

「じゃあ、私も頼もつかしら」

「はいはい。なんででしょうか？」

「子どもがいらないんです」

どつちの意味だよ。

「はあ……………その、どつちの意味で？」

「どつちの意味といますと？」

女性は首をかしげた。その仕草が妙に似合っていた。

「子どもが最初からいないのか、それともいなくなったのか？ということです」

前者だったら、良い産婦人科を紹介するしかない。それとも相手を探してくれということかもしれない。その時は社長に頑張ってもらおう。

「ああ、そういう意味ね。ふふふ。そうね。確かにどつちの意味かわからないわよね」

女性は口元に手を当てて笑っている。社長も一緒に笑っている。私も笑おうと思ったが、面倒なのでやめた。どこが面白いか全然わか

らなかつたし。

「ごめんなさいね。ええ、子どもがいなくなつたんです。」
女性は笑みをこぼしながらそう言った。

『依頼内容：子ども探し 警察に行け』

気になることは2つ。

笑いごとではないはずなのに、女性に危機感というものがなく、笑っていること。

そして、女性の名前。

3 .

日向つづめというらしい。もちろん依頼人女性の名前である。

自己紹介のときに日向さんは「つづめと呼んでください」と、言った。「わかりました。つづめつち」と、社長は答えた。「まあ」と、田中さんは口元に手を当て、くすくす笑っていた。私は親しみを込めて日向さんと呼ぶことにした。

名前を確認した後、日向さんは「ここではなんですから、私の家にご招待します」と言った。日向さんが言ったのである。まだ、子どもがいなくなつたとしか聞いていないのに。まだ金の話もししていない。そもそも家にご招待される理由がない。子どもが家でいなくなつたということだろうか。ありえない。

なんか変だなあと、私は思ったのだが、社長の野郎は「それもそうですね」と言い、「じゃあ栞君頼んだよ」と、言いやがった。私にこの件を一任してくれたわけだ。押し付けたともいえる。しかしまあ、相手が女性なのだから家に行くのは、私が適任と言えば適任かもしれない。日向さんの家庭環境がまだよくわかっていないので適任かどうかは、わからないが。「社長はその間何をしているんですか」と、尋ねたところ、「子どもの世話」という、お答えを頂いた。今頃頑張つて子どもの世話していることだろう。一瞬殺意がわいた

が木のせいにした。樹木が社長に向けている殺意が、私に一瞬乗り移ったという意味である。

日向さんはここまで徒歩で来たらしい（来たというか偶然だろうけど）ので、歩いていける距離なのかと思いきや、なんとここにたどり着くまでに30分以上かかったらしい（子どもを捜して彷徨っていた時間も含めてだろうけど）。徒歩30分以上。歩ける距離ではない。自慢じゃないが私は体力がないのだ。車で向かうことにした。そういうわけで、うずめっちもとい日向さんは、今現在、私の所有している車の助手席に座っている。五人乗れるという噂だが、五人は乗りたくないタイプの車である。色は赤。この車は二台目なのだが、一台目も赤色だった。赤色だと速い気がするのだ。社長にその話しをしたら、「角がないと速くはならないよ」と言われた。「消防車に角ってありましたっけ」と答えたら、社長が啞然としていた。未だに、啞然としていた理由が私にはわからない。

「そこを左折して下さい」
私がどうでもいいことを考えていると、隣から指示が飛んだ。当然指示に従う。左折しまーす。

先ほどから車の中では、日向さんの指示以外会話は無い。いや、その指示に私は無言で従うので会話は無いとも言える。どうも、隣にいる人と会話するのは苦手なのだ。隣というか、知り合っただけな人と会話するのが苦手なのだ。そもそもこんな走る密室でさっきあった人と一緒にいるというのがすでに苦手。私が1番尊敬する職業はタクシードライバーなのだ。もちろん嘘なのだ。尊敬していないわけではないけれど、さすがに1番ではない。

時刻を確認する。もうすぐ15時か……。今頃社長は子どもの世話と称しておやつを食べているに違いない。羨ましい。妬ましい。私の分のおやつを残しといてくれるだろうか。

「左利きですか？」

左に曲がりまーす。と、思ったが寸でのところで思いとどまった。隣を見ようとも思ったが、危険なのでやめておいた。

「はい？」

「腕時計。右手につけているから、そうかなあーって思ってた。違う？」

私の反応が面白かったのか、隣で日向さんが笑っている気配がする。いや、確かに私は左利きだけでも。今聞くことかな。それ。まあ、答えるけども。

「そうです。私は左利きがベースです」

「ベース？」

「箸は左、筆は右。マウスも右だし、カッターも右利き用ですから。スポーツは左でやりますけどね。ベースは左ですけど、まあ両利きみたいなものです」

「ああ、なるほどね。そういう意味ね。ベース…ふふふ。おもしろい表現をしますね」

そんなにおもしろい表現だったろうか。まあ笑ってくれたなら別にいいか。今の会話で日向さんに話しかけやすくなったし。日向さんの家についてから事情を聞くのも、まあ、別にいいんだけど。やっぱり事前知識ってやつは重要だと思う。

「少しお話を聞いてもいいですか？」

「ええ、少しなら」

日向さんはまだ笑っているようだ。悩みなんてないように見えるけど、子どもがいなくなってるんだよね。本当にいなくなっているのかは、まだわからないけど。

「えっと、子どもがいなくなっただんですよね？」

「ええ、そうなのよ。気づいたらいなくなっちゃって。どこ行っちゃったのかしら……」

ああ、やっと悩んでいるような気配を出してくれた。不謹慎だけど少し安心。

「お子さんのお名前は？」

「名前……？さあ、何だったかしら……？」

「え？」

私は隣を見た。日向さんは頬に片手を当て、悩んでいる。本当に思
い出せないように見える。つまり、冗談じゃない？

「前を向いて運転しないと、危ないわよ？」

「え、ああ、すみません」

確かに危ない。危なかった。交通事故で死ぬなんて冗談じゃない。

「えっと、日向さんのお子さんなんですよね？」

もしかしたら、自分の子どもじゃないのかもしれない。いや、可能
性薄いけどそれなら名前を思い出せないときもある、かな？

「ええ、もちろん。私は夫としかしたことがないのよ？」

それはそれは。なんとというか、ご馳走様です？

「……………あー、つまり自分の子ども名前が思い出せない？」

「ええ、そう見たい…………。ふふふ、不思議ね。」

不思議ね。じゃねえよ。ため息をつきたいが我慢。依頼人の前でた
め息をつくなんて失礼な真似をしません。

気を取り直して質問を続ける。

「お子さんの年齢は覚えていますか？」

「ええ、それは覚えてるわ。2人と、今年で1才になります」

「え？」

「前、前。もう、危ないわよ？」

「あ！すみません」

やっぱり車内での事情聴取は失敗だったかもしれない。落ち着いて
運転できない。

1才の子どもが気づいたらいなくなつた？てつきり小学生くらいの子
だと思っていた。しかも2人？1人じゃないのかよ。
ため息をつかずにはいられなかった。

1・3・さらに奇妙な事情を聴取

4・

その後車内では特に重要な会話はなかった。私が安全運転したかったからだ。交通事故には気をつけましょう。しかし、私がここで諦めずに日向さんの事情を聞いたところで果たして重要な会話になったかと言われれば、たぶんならなかった。私が子どもの年齢を聞いたあと日向さんが「はい。少し質問に答えただから、今度は私が質問するばんね」と仰ったからだ。私は一応、いや、そんなことする必要はないんですよーみたいなのを言ったんだけど、「私ばかり質問されるなんて嫌だわ。そもそも私、まだあなたの名前も聞いていないじゃない。それは不公平だわ」ということらしい。まあ言われてみればその通りだと思い、名を名乗ったら「じゃあ栞ちゃん」と言われた。我慢した。確かに日向さんより年下だし。この人依頼人だし。その後はなし崩し的に、根掘り葉掘り個人情報を聞かれてしまった。私の個人情報重要ではないのでスキップ。私の誕生日とか血液型とか身長とか体重とかスリーサイズとか好きな食べ物とか嫌いな食べ物とか趣味とか全然重要じゃない。日向さんには色々知られてしまった……もう私、お嫁にいけない！日向さん、雰囲気は子どもっぽいけど中身はおばさんなんだなあ。と、思いました、まる。

そんなこんなで、なんやかんやで、日向さん家に到着しました！。

家と言ってもまだ日向さん家に着いたわけではなく、日向さんが住んでいる団地に到着したという意味である。どうやら日向さんは団地妻らしい。

「姥捨て団地？」

団地の名前は姥捨て団地というらしい。いや、嘘じゃないよ。だ

つて看板にそう書いてあるもん。変な名前。

「ええ、そうなのよ。変な名前でしょ？近所の人とかとね、よく話すのよ。まるでこれじゃあ、私たち、お婆さんみたいよね。って。ふふふ、まだ私たちはお婆さんじゃないのね。ね？そう思うでしょ？」

おっけー。軽い脅迫みたいなもんですよ？この質問。まあ、確かに日向さんはお婆さんじゃないだろう。日向さんがお婆さんなら、私もあと数十年で、げふんげふん。考えてはいけないことが、世の中にはある。

「そうですね。何か由来でもあるんですか？」

日向さん部屋に向かう道すがら、暇なので対して興味ないけど聞いてみる。どうやら日向さんの部屋は五階にあるらしい。どうやら日向さんは健康のためにエレベーターを使わずに階段を使うらしい。ふふふ、私を殺す気らしい。本当に自慢じゃないけど、私体力ないんです。階段は私の健康を脅かす可能性があります。1日の階段使用量は、二階分が目安です。それ以上は体調に異常をきたす可能性があります。ええ、本当に……。

「そうねえ。この団地は、山を切り開いたところに作ったらしいのよね」

そりゃあ、まあ、そういうもの、らしいよね。

「それでね。どうやら、その山には姥捨て伝説があったらしいのよね？」

「え？はあ、そうなんですか？」

「栞ちゃん、大丈夫？」

「ええ、もちろん、大丈夫ですよ？」

痩せ我慢ってやつだよ。え、なに？あと三階？それは永遠という意味ですか？

「そう？まあ、つまりそれで姥捨て団地という名前になったという説が有力よね。他には、どんな噂があったかしら……」

あ。噂ね。そう。そうですね。ええええ。しばらく悩んでいてく

ださい。私、会話するの今無理だから。

そんな状態の私が半ば無意識で、階段を進んでいると、誰か（女性）が上から降りてきた。なんだ。ここの団地妻は健康に気をつかう人間しか集まっていけないのか。それとも健康強化月間か？

「あら、好美ちゃん。こんにちわ。」

好美さんというらしい。念のために言っておくが、好美さんはどう見ても30代くらいの女性である。日向さんは立ち止まった。私は立ち止まったというか休憩した。マジしんどい。

「あら、うずめちゃん。こんにちわ。……………そちらの方は、えっと、うずめちゃんのお友達？」

なんだこの人たち……………。ちゃん付けで呼び合う仲ってなんだろう。仲がいいということであいいか。

なんて答えようか。便利屋とか胡散臭いんだよなあ。というか、私今、答えられる状況じゃないんですけど。

「ええそうなのよ。栞ちゃんって言うのよ？可愛いでしょ？」

いやいや、可愛いとか私、生まれて初めて言われたかも。もちろん嘘。子どもときとかよく言われた。今は凜々しいってたまに言われる。社長に。褒め言葉として受けとっている。今のところは。

好美さんは私を訝しげに見る。それはつまり、好美さんは普通ということだ。たぶん。そりゃ、スーツ着た秘書っぽい人間が、今にも死にそうな顔していたら、訝しげに見ない方がおかしい。あー、そろそろ体力が回復してきたー。体力が少ないから体力回復も早いんです。もちろん気のせいです。奥様たちの井戸端会議のおかげで私は無事に日向さんの部屋に生きて行くことができる。危なく死んで逝くことになるどころだった。もちろん誇張表現です。

「じゃあ、好美ちゃん。またね」

「ええ、うずめちゃん、また。栞ちゃんも、また？」

「はあ、また？」

好美さん、普通じゃないかも。なんでみんな私をちゃん付けするんだろう。この団地に住むと、ちゃん付けしてしまう呪いでもかか

るんだらうか。

「好美ちゃんはお隣さんなの。すっごくいい人なのよ？よく夕食をご馳走になったりするのよ。私、あんまり料理が得意じゃないから、菜ちゃんは一人暮らしらしいけど、料理とかどうなの？」

「へ？ええ、まあ、普通です」

そんな会話をしていたら、やっと日向さんの部屋に到着した。よく頑張った。私。

「はい。どうぞお入りになって。ちょっと散らかってるけど。」

「お邪魔します」

「ふふふ、おかしなこと言うわね。別にお邪魔じゃないわよ？あ、そこに座って。今、お茶の用意するから」

日向さんの部屋は至って普通の団地の一室だった。いや、普通と言ってみたが団地というものに住んだことがない私にはここが普通なのかはわからない。いわゆる2DKというやつだろうか。今私がいるのはフローリングの部屋。襖ふすまがある。おそらくその向こうは畳の部屋だろう。私は襖を背にして座った。日向さんはキッチンでお茶の準備をしている。私は疲れを癒している。はて、私は何をしにここに来たんだっけ。

この部屋はどうやら居間として使われているようだ。日向さんの言うとおり散らかっている。子どものおもちゃが散乱していて、散らかっている。まるで今さっきまで、ここで子どもたちが遊んでいたかのような。おもちゃは同じものが2つずつあるようだ。なるほど。双子なのか。子どもがいるというのは確からしい。

しかし、今私が1番気になることはおもちゃが散乱しているけど、おもちゃ自体はまるで新品のように綺麗だということでもなく、さつきからキッチンの方から聞こえてくる「お茶っ葉はどこかしら……」。あら、急須もないわ……」という声でもなく、私の背後だ。

何だか襖な方から変な匂いがする。生ゴミが腐乱したような匂いと

いつか、排泄物の匂いというか。とりあえず異臭に分類される匂いだ。キッチンの方を見ると日向さんはこちらに背を向けている。……ちよつと覗いてみようかな。

5 .

私は襖を開けなかった。好奇心は猫を殺すらしいし。パンドラの箱は開けたら大変らしいし。中に希望があるらしいけど、99%災厄ってわかってるなら開ける人間はいないし。まあ、襖の向こうが災厄かどうかわからないけど。

「ごめんなさいね。お茶つ葉が見つからなくて。あと、ショートケーキもないわ」

「いえ、別にウーロン茶でもいいですよ。あと、ショートケーキが欲しいわけではありません」

日向さんはペットボトル入りのウーロン茶を持ってきてくれた。新品ではなくすでにだいぶ減っている。私の分を注いだらなくなっていました。日向さんは何も飲まないようだ。しかし遠慮なくいただく。普通に美味しい。和むー。

さて、和んだところで本題に入ることしよう。

「では、お話を聞いていいですか？」

「お話？何でしたっけ？」

「……………子どもがいなくなった、という話です」

「ああ、そうだったわね。ふふふ、忘れてたわ。私、忘れぼくつてよく怒られるのよ。あの時もね」

それから延々と惚気話を聞かされた。どうやら日向さんは忘れっばさのおかげで、旦那さんと出会えたらしい。すっごいどうでもいい。人の惚気話や自慢話を聞くとなんだか眠くなる。そういえば旦那さんがいない。まあ今日は平日だし、仕事にでも行っているのだから。しかしこれは、本当に子どもがいなくなったのか？というところから聞かなければいけないらしい。

「お話の途中申し訳ないですけど、聞いていいですか？」

「え？あらあら、ごめんなさいね。のろけちゃったわね」

「ええ、惚気られました。それでですね。失礼かもしれませんが、本当に子どもがいなくなっただんですか？」

「ええ本当よ。ほんと、何処に行っちゃったのかしら……………」

そう言う日向さんは、本当に子どもを心配しているように見える。どっちが本当の日向さんなんだろう。

「いつ頃いなくなっただんですか？」

「そうですね……………三日くらい前かしら？」

三日？

「お子さんは、おいくつでしたっけ？」

「まだ1才にもなっていないわ。そうですね……………たしか、あと三ヶ月くらいしたら初めての誕生日だったわ」

確かって……………。1才にもなっていない子どもが三日も前にいなくなっただけから見つからない？そのくらいの幼児って、一人歩き出来るんだっけ……………。生後半年くらいで出来なくもないのかな……………。三日前に1才の子どもがいなくなっただけで見つからない。これはもう死んでいるかも。

「警察には届けたんですか？」

「いいえ。届けてないわ。だって、警察だって忙しいでしょ？こんな個人的なことで呼ぶなんて、ねえ？」

「いや、こういう時こそ警察を頼るべきだと思いますよ？」

私が言うのもただけだ。

「そうかしら？だって、子どもがいなくなっただなんて私個人の悩みでしょ？子どもがいなくなっただけで困るのは私だけでしょ？それって、すごい個人的よね。自分の子どもを探してくれだなんて、これ、警察に結婚相手を探してくれて頼んでるのと同じことだと思うのよ。そんなの頼んじゃ、警察の人だって迷惑でしょ？警察には、もつと大勢の人たちが悩んでいることに対してほしいのよ。栞ちゃんも、そう思わない？」

日向さんは微笑みながらそういった。「そうかもしれないね」

私はそう答えた。もちろんそうは思わないけど。ただ、もう1つだけ聞いてみようか。

「旦那さんはなんと言ってるんですか？」

この人はこうだけど、旦那さんは普通かもしれない。もしかしたら今も探しているかもしれない。

「夫とは子どもが生まれる前に別れたから、あの人は子どもがいなくなったということも知らないわ」

「……………あー、それは失礼しました」

「やあねー。何も失礼なことをしてないじゃない。栞ちゃんは本当におもしろい子ね」

惚気ていたからてつきり、旦那さんがまだいると思っていた。離婚していたのか。いや、別れたと言っていたから籍は入れていなかったのかもしれないけど。

なんだか頭が痛くなってきた。えっと、つまり、1才くらいの子どもが三日前にいなくなった。それで、探しているのは日向さんだけということか。ああ、日向さんのご両親も探しているかもしれないけど、なんとなく探していない気がする。おそらく誰にも子どもがいなくなったということを言っていないのだろう。近所の人にも言っていないのかもしれない。好美さんが子どもについて聞かなかつたのもつまりそういうことだろう。

もう少し事情を聞いてさっさと会社に戻ろう。なんだかもう疲れた。眠いのもそのせいだろう。

「子どもがいなくなった時の状況を教えてください」

「状況？」

「はい。三日前のどこで、何をしていたとき、子どもがいなくなったのか？ということですよ」

状況によつては犯罪とかかもしれないし。まあ、1才の子がいなくなった時点で犯罪の可能性が高いけど。あとは事故。足を滑らして川に落ちたとか。そういう場合は日向さんが気づくだろうけど。

「ああそういうことね。えっとね、ちょっと待ってね、今思い出す

から……そうそう三日前のお昼頃だわ。私は台所でお昼の用意をしていてね。そう、その日は頑張って料理を作ろうとしたのよ。それがいけなかったのかしら、ちょっと目を離したら、いなくなっていたのよ」

は？

「……………つまり、ここでいなくなっただんですか？外じゃなく？ここです？」

「ええ、そうよ。ほんと、ちょっと目を離したすきになくなっちゃったのよ。困ったわー」

たぶんあなたが思っている以上に、これは困った状況ですよ？

「……………玄関の扉が開いていたということですか？」

「え？ふふふ、そんなことあるわけないじゃない。私はそんなに無用心な女じゃないわ。ふふふ、私、こう見えてもガードが固いのよ？私のガードを突破した男の人は今まで、一人だけなんだから。あの人は本当に素敵な人でね。私が」

日向さんの言葉を右から左に受け流しながら、私は部屋を見渡す。もちろんそれで子どもが見つかるわけがないが。この部屋の扉は1才の子どもが開けるようなものじゃない。1才で開けられるのは心の扉だけだ。落ち着け私。変なこと考えてるぞ。ああそうだ。ベランダくらいになら出れるかもしれない。窓の鍵が開いていなかったという限定条件で。それでベランダから落ちる。二人一緒に。その場合はもう死んでるし、死体くらい見つかったらどう。つまり有り得ない。えっと、ということとは、今もこの部屋にいるのか、それとも日向さんの目を盗んで（物理的でも可、その後戻せば無問題）第三者が連れ去った。もしくはこの部屋からまるで煙のように消えてしまった怪奇現象ということか。ありえない。

1番あり得る可能性はまだこの部屋にいるということだけど、それなら日向さんが三日も見つけられない理由がわからない。いや、もう1つ可能性があるけどそれなら私がここにいる理由がわからない。その場合は、子どもはもう亡くなってるわけだし。その場合は

日向さんの悩み事は探すことではなく隠すことになるはずだし。

襖の向こうが気になる。心なしに変な匂いが強くなっている気がする。そして、眠い。日向さんの惚気話がいい子守唄になりそう……。

「あら、栞ちゃん。眠いの？」

「へ？ええ、まあ、なんだか疲れたみたいで……。すいません」

「ふふふ、謝ることなんてないわ。眠いならちよつと眠る？そっちに、布団もあるのよ？」

日向さんは笑みを浮かべながら私の後ろを指差した。ああ、そうか。

この襖の向こうは、寝室なんだ。日向さんがいつも寝ている部屋。

そして、子どもたちも寝ている部屋か……。

1 - 4 . そして一気に解決

6 .

「いえ、遠慮します。仕事中ですし」

「あらそう？遠慮しなくてもいいのよ？」

いや、寝るはずないよ？このくらいの睡魔全然大丈夫だからね？
睡眠薬とか別に盛られてないよ？たぶん階段を上り過ぎたのが原因
だな。この睡魔は。

「いえ、本当にいいですから。それより、もう少しお話を聞いていいですか？」

「ええ、もちろん」

さて、あと二つ三つ聞いて帰ろう。襖の向こうは別に覗かなくても問題ない。覗く理由がない。依頼内容は子どもを探してくれ。つまり、

「この家に、まだ子どもがいる、つまり隠れているということはありませんね？」

「ええもちろん。ふふふ、おかしなこと聞くわね。それなら私だつてすぐに見つけられるわ。私、かくれんぼとか得意なのよ？」

はい、これでこの襖を開ける理由はない。私がこの家を探す理由がないからだ。日向さんが嘘をついている可能性もあるけれど、まあ有り得ないだろう。この状況で、子どもがこの家にいるのにないと嘘をつく理由がない。この状況を作ったのは日向さんなのだから、なおさらだ。私がこの状況を作った場合、つまり私からこの家に行きたいと言った場合なら、まだ可能性はあったのだが。そもそも子どもを殺した人間がわざわざ探してくれなんて言わないだろう。ということとは、この襖の奥に子どもの死体があるはずがない。この匂いは気になるけど、うん、私の気のせいだな、きっと。

「それでは、えっとですね、お子さんの写真とかありますか？あと、特長とか、いなくなった時の服装とかを教えてください」

「写真はあんまり好きじゃないから、ないのよねえ。ほら、写真に写ると寿命が縮まるって言うでしょ？」

「ああ、そんな話もありますね」

信じている人間がいたのか、この時代に。

「では、特徴と服装、あと名前は……覚えてないんですっけ？」

「ええ、そうなのよ……ごめんなさいね。思い出せなくて」

「いえ、結構ですよ。あ、そういうええ男の子ですか？それとも女の子？」

聞き忘れてた。うっかりうっかり。

「2人と女の子よ。とつても可愛い。服はそうね……よく覚えてないわ。2人と似たような服を着ていたことは確かなんだけど……。特徴って言われても、そうねえ……。双子ということくらいよねえ」

「そうですか……」

これはちよつと厳しいかもしれない。まあやるだけやってみようか。さて、あとは金の話だ。これが1番重要。そしてこれが1番難しい。どのくらい金を頂くのが難しいのだ。

「それでは、えつと、依頼料についてなんですけど……？」

下手に出てみる。

「依頼料……？ああ依頼料ね。そうよね。お金を払わないといけないわね。じゃあ、子どもを探してくれるの？」

「はい、出来る限りやってみます。それですね。前金というものがありません」

「前金？」

「はい。子どもを探す時にそれ対応のお金を使うわけです。それで依頼料というのは依頼を達成したとき、今回の場合は子どもを見つけたら頂くものなんですけど、でも、えつと、例えば依頼が達成できなかつたときもあるわけです。その場合はもちろん依頼料は貰えないわけなんですけど、それだと、こちらがお金を使っただけで赤字になってしまふわけなんです。なので、依頼を受けたときに依頼

料の半分を前金として頂いて、達成したら残りの半分を頂くというシステムになってるわけです」

「なんだかうまく説明できないけど、まあいつか。」

「うーん、よくわからないけど、とりあえず、今いくら渡せばいいの？」

日向さんが深く考えない人でよかった。

「今、おいくら持ってるんですか？」

「そうねえ……………財布の中には四万円あるわね。へそくりとかも入れると……………二十万はあるかしら」

「そうですか……………」

さて、どうしようか。いくら頂こうかな。有り金全部頂きたいのが本音なんだけど……………。今回は色々大変そうだからなあ。日向さんもシングルマザーだし……………。

「わかりました。依頼料は四万円ということで。前金として二万円頂きます」

「あら？それだけでいいの？」

え。もっと頂いてもいいんですか？

「はい。かまいません。ただ、今回の依頼は少々難しいかもしれませんが、あまり期待しないで下さい」

「はいはい。別にいいわ。はい二万円ね。あ、領収書とかは別にいらないからね？私、コンビニとかでもいつもレシートは要りませんよーって言うタイプなの」

「そうですか。はい、確かに頂きました」

よし。金を貰えばこっちのもんだ。あとは気合と根性と社長の力でなんとかしてくれるだろう。

「他には何か聞きたいことないの？ないなら私があなたの事聞いていい？」

え。それは遠慮したい。

「いえ、そろそろ戻らないといけませんので」

「あらそうなの？それは残念だね。ねえ、次はいつ来てくれるの？」

あれ。私、いつのまにまた来ることが決まっていたんだろう。まあ確かに途中経過とかを、報告とかしにこないといけないからなあ。「そうですね……………。一週間後くらいに、報告も兼ねて伺わせていただきます」

「一週間後？そんなに先なの？それは寂しいわ。三日後くらいじゃダメなの？」

別にダメじゃないけど。なんだかなあ。まあいいや。依頼人は神様です。

「日向さんがそう言うなら、三日後にしましょう」

「ふふふ、決まりね。その時はショートケーキも用意しておくわね？」

「はい。楽しみにしています」

そんなに私にショートケーキを食べさせたいのだろうか。やつぱり車でショートケーキが好きと言わなきゃよかった。まあ本当に好きだからいいけどね！。

7.

「では、失礼します」

「ええ、じゃあ三日後ね」

そう言つて日向さんは私に手を振った。私は手を振り返すことはせずに扉を閉めた。

「はあ……………」

疲れた。さあ帰ろう。会社に帰つて社長に話してこの後どうするか話し合わないと。私はそう思いながらエレベーターに向かった。階段なんて使うわけがない。エレベーターは一機あるしかないようだ。まああるだけいいだろう。聞いた話だと、エレベーターがない団地もあるらしいから。エレベーターは元気に稼働中だった。今現在も下から上に誰かを何処かに運んでいるようだ。ポチツと、ポタンを押して待つ。欠伸をしながら待つ。眠い…………。腕時計で時刻を確認すると16時30分くらいだった。社長はまだ子どもの世話を

をしているのだろうか。私の分のショートケーキは残してあるだろうか。とか思っていたらエレベーターが止まった。そして開いた。

「あら、あなたはさっきの……」

中には日向さんの隣人、好美さんがいた。買い物袋を持っているということは、夕食の買い物帰りだろう。荷物が重いから階段ではなくエレベーターを使ったのだろう。うん。正しい判断。私なら荷物がなくともエレベーター使っけど。

「どうも、先ほどは」

と、頭を下げて挨拶。先ほどなんだろうと自分で思いつつ、ボタンを押しながら好美さんが外に出るのを待つ。出る人優先だからね。エレベーターってやつは。しかし好美さんが出てこない。なんだか私の顔を見つめている。なんだろう。

「あなた、本当にうずめちゃんのお友達？もしかして、探偵さんかなんかじゃない？」

ああ、そういうことか。怪しいから見えていたのか。しかし探偵と来たか。まあ探偵みたいなこともするし、探偵と言えば探偵だ。便利屋と言えば便利屋だし、家庭教師と言えば家庭教師だ。当たり前なことだけだね。ちなみに私は勉強を教えるのが得意なので、そういう依頼の方が得意。

「ええまあ。そのようなものです」

ふむ。いい機会だし、お話を聞くのも悪くないかもしれない。ただもう疲れたからなあ。今日のところはもう帰りたいなあ。

「ああ、やつぱりね。そうだと思ったのよ」

やつぱり？それは、どういう意味だろう。私って、そんなに探偵ばいかな。それとも日向さんに探偵を頼るような事情があると知っているということだろうか。そして、なんでそんなに嬉しそうに言うんだらう。

好美さんはエレベーターから出てきた。私はエレベーターに乗らずに好美さんから話しを聞くことにした。

「少しお時間よろしいですか？ちょっと聞きたいことがあるんです

けど」

「ええいいわよ。月読ちゃんと命ちゃんのことでしょう？」

「は？」

つくよみちゃんのみことちゃん？誰だそれ。

「あら、違つもの？もう大分前にうずめちゃんが捨てた子どもの話だと思つただけど」

「……………もう一度言つてくれますか？」

「ああ、そうよね。ごめんなさい。うずめちゃんはそのことを説明できないものね。それじゃあーから話しましょう。立ち話もなんだから、私の部屋に來ませんか？」

私はもちろんそれに同意した。

8 .

「ウーロン茶でいいかしら？ごめんなさいね、お茶つ葉を切らしてて。それじゃあ、何から話しましょうか。そうね。私とうずめちゃんの出会いから話しましょうか。私はうずめちゃんがここに来る前から住んでいたんだけどね。うずめちゃんがここに越してきたときは旦那さんとまだ一緒だったのよ。子どもはまだいなかっただけど、とっても幸せそうだったわ。見てるこっちが恥ずかしくなるくらいラブラブだね。でもそんな2人を見てたら、私も夫といつても以上にラブラブになれたんだけどね。ふふふ。でも、それからしばらくして、そうね、越してきてから三ヶ月くらいだったかしら、隣から怒鳴り声が聞こえてね。そう。すごい喧嘩をしていたのよ。この壁はそんなに薄いわけじゃないんだけど、あんまり大きな声を出すと聞こえちゃうのよね。だから、夜とか気をつけないといけないわね。つてよく話すんだけどね。栞ちゃんも気をつけたほうがいいわよ？あらあら、余計なお世話よね、ふふふ、ごめんなさい。それでね、どうやら旦那さんが浮気していたみたいなの。それでうずめちゃんが怒っちゃって、もう大喧嘩。私が止めに行こうかと思うくらいの大喧嘩だね。それで、まあ、別れちゃったのよ。その次の日ここに

来て、一晩中うずめちゃんは泣いてたわ。もう死んじゃうんじやないかというくらい落ち込んでね。でもね、幸運なことというか不幸なことというか、ううん、不幸なんて言っちゃダメよね。幸運なことにね、その時うずめちゃんのお腹の中にはもう赤ちゃんがいたの。うずめちゃんもその時はもう妊娠していることに気づいていたのよ。だからこそ、旦那さんを許せなかったんでしょうね。うずめちゃんは言ってたわ。この子がいるから自分は死ねないんだーって。でも、こうも言ってたわ。この子がいるからこそ、自分はこれからも頑張って生きていけると思ってた。

でもね、一人で子どもを育てるのは大変でしょ？だから私も色々協力したのよ。妊娠中の家事とかをね。うずめちゃんは働いてないんだけど、生活には困ってなかったのよ。別れた相手にも慰謝料とか、あと実家からの仕送りっていうのかしら？何か毎月お金を貰ってるみたいね。だから、まあ、金銭面では全然問題なくてね。無事に出産できたのよ。双子の赤ちゃんでね。うずめちゃんすごい喜んでたわ。私も嬉しかったわ。名前はね、月読と命にしたのよ。ほら、日本の神様にツクヨミノミコトっているでしょ？自分も神様の名前が由来だから神様の名前にしたかったらしくてね。二人で一人二人がずっと一緒にいられますようにって言う意味でつけたらしいわ。あ、ウーロン茶。遠慮なく飲んでね。私も頂くわ。久しぶりにいっぱい喋ったからちよつとのが渴いちゃった。

それから退院して、子育てを頑張ってたんだけどね。なんていうのかしら、育児ノイローゼって言うのかしら。そういうのになっちゃうたらしくてね。子どもの泣き声がうるさい。子どもが言うことを聞かない。子どもがご飯を食べない。ってよく私に愚痴っていたわ。私も色々手伝ったんだけどね、ほら、あんまり私が手伝うのもよくないじゃない？そう思ってたね、まあ様子を見ていたのよ。そして、そうね、だいたい子どもが生まれてから6カ月くらいだった頃かしら、夜中にうずめちゃんが急に家を訪ねてきてね。ドアを開けたら、とっても晴れやかな表情でね、なんていうか、そう、腫れ

物が落ちたような表情で立ってたのよ。久しぶりに見たわ、あんな清しい顔したうずめちゃんは。その頃はほんと、いつもイライラしてて、全然楽しそうじゃなかったのよ。それでね、私がどうしたの？って聞いたらね、子どもを捨ててきた！って言うのよ、とても嬉しそうにね。聞いているこっちも嬉しくなるような声だったわ。

それで家の中でね、お酒を飲みながら、そう、まるで宴会みたいになってね、うずめちゃんが嬉しそうに話すのよ。これで子どもがいなくなっただって。これで自分は自由なんだーって。これで自分はこれから毎日楽しく生きられるんだーって。でも、やっぱり子どもを捨てるなんてよくないじゃない？だからね、言ったのよ私、子どもを捨てるなんてよくないわよーって。でも、そしたらね、うずめちゃんが怒ってね、子どもがいない奴に言われたくなーいって言うのよ。子どもがいないやつに子育てのつらさはわからないんだーって。そう言われちゃったら、私何も言えなくてね。私、まだ一度も子どもを産んだことないのよ。私も子どもが欲しいんだけど、こればかりはねえ……、ほら、神様次第っていうか、ふふふ、夫に頑張ってもらわないといけないでしょ？菜ちゃんはどうなの？子どもとか、欲しくないの？ふふふ、そうよね。今は、うずめちゃんの話よね。

それでその日は随分遅くまで飲んでね、うずめちゃんも最後はフラフラで自分の家に戻って行ったわ。そう、それで次の日。そうね、お昼頃だったかしら。また、うずめちゃんが尋ねてきたのよ。ドアを開けるとね、昨日とは違ってね、顔を真っ青にしたうずめちゃんが入っててね、月読と命がいなくなった！って言うのよ。びっくりしたわ。だって昨日、あんなに嬉しそうに子どもがいなくなったことを喋っていたのよ？私はね、言ったのよ。あなたが昨日捨ててきたんじゃないの？って、そしたらうずめちゃんはね、私がそんなことするはずがないでしょ！って怒るのよ。私がどれだけ昨日のうずめちゃんが話したことを言ってもね、そんなことない、そんなことないって言うの。だからね、うずめちゃんが子どもを捨てたところ

に行くことにしたの。昨日、うずめちゃんが自分で言ってたのよ。

教会に捨ててきたーって。そうなの。日本の神様の名前を持っている子どもを教会に捨てたのよ。皮肉よね。でね、私それを覚えてたの。どうやらね、捨ててきたって言っても、教会の前にね、ほいって捨ててきたわけじゃないみたいなの。そりゃそうよね。うずめちゃんはそんなことする人じゃないもの。なんでもね、その教会のシスターさんに直接渡してきたらしいの。どうやらその教会にはね、孤児院っていうの？養護施設みたいなのがあるらしくてね。よくわからないけど、直接子どもを受け取ってもらったらいいのよ。来るものは拒まずーっていう信条なのかしらね？でね、教会に着いてシスターさんに私が事情を説明したの、うずめちゃんは事情を説明できるような状態じゃなかったらね。そしたら、やっぱりまだ昨日のことだったから覚えてたらしくてね、連れてきてくれたの。結構簡単に連れてきてくれたわ。去るものも拒まずーっていう信条だったのかもね。二人の子どもがね、シスターさんに抱かれて来てね、まるで天使のように眠っていたわ。ああ、これで一件落着なんだなって思ったんだけど、うずめちゃんがその子を見てね、この子は私の子じゃない！って言うのよ。もう、私びっくりしちゃってシスターさんの方を見たらね、いえ、この子たちが昨日あなたが連れてきた子どもたちですよ。月読ちゃんと命ちゃんですよ。って困った表情で言うのよ。でもね、うずめちゃんは、違う違う、この子じゃないこの子じゃない、この子たちは月読と命じゃないって、言い続けるの。

それが、そうね、かれこれ三年くらい前の話かしら。ええ、そうなのよ。それからずっとうずめちゃんは子どもを探しているの。ええでもね、探しているっていうか、最近だと、話し相手を探しているっていう感じになってるわね。昔はね、本当に子どもを探してたんだけど、最近は話し相手を探すついでに子どもを探すみたいになってるわね。私もよくお喋りするのよ。うずめちゃんと。私も働いていないから、日中は暇だからね。最近はもう、子どもの話しか

一切しなかったから、子どもを探すのは諦めたのになって思ったけど、違ってみたいね。

はい。これでうずめちゃんの話はお終い。栞ちゃんは、うずめちゃんに子どもを探してくれて頼まれたんでしょ？どうするの？私は、やめておいたほうがいいと思うわ。似たような人たちが、これまでもうずめちゃんに頼まれて探したけど、結局子どもは見つからなかったのよ？

そうね。その代わりって言ったらなんだけど、私の依頼を受けてくれないかしら？実は私も困っているのよ。あのね、夫がね、いなくなっちゃったのよ。そう。急にいなくなっちゃった。三日くらい前かしら。私がお昼ご飯を作っていて、ふと目を離れたすきにね。

どこを探しても見つからなくて、困ってるの。ねえ栞ちゃん、一緒に夫を探してくれない？」

1・5・でもって今回のオチ

9・

「というわけです。社長」

「というわけか。栞ちゃん」

「栞ちゃん言うな」

ということで、私は会社に戻って社長にかくかくしかじか説明した。社長は椅子に座り楽しそうに笑みを浮かべている。私は疲れきった表情を浮かべながら、ソファアに座っている。疲れているということを、アピールしているのだ。

社長の机の上にはたまご型育成ゲーム機が置かれている。私が戻ってきたとき、既にそこに置いてあった。私が「子どもの世話は大変でしたか？」と聞いたら「それほどでもなかったよ」という答えを頂いた。

「で、その、好美さん？だっけ。その依頼は受けてきたわけ？」

「丁重にお断りさせて頂きました」

断ったあと、結構長い時間好美さんの暇つぶしにつき合わされた。これだからおばさんは……。

「ふーん。まあ栞君がそう判断したならいいけどさー。しかし、姥捨て団地の人だったんだねえ。うずめっちは」

「何かご存知なんですか？」

「栞君は、姥捨て団地の由来知ってる？」

「由来ですか？日向さんは、姥捨て伝説があったからと言ってましたけど」

でも、噂って言ってたっけ。

「俺が聞いた話だと、あの団地は親から捨てられた人たちが住んでいるから、姥捨て団地っていう名前らしいよ」

「……いや、それ、絶対嘘ですよね」

名前が先か入居者が先かといえは、名前が先につけられるでしょ。

「まあね。ただまあ、そういう噂が流れるような団地ってことさ。で、うずめつちの依頼はどうするわけ？聞いた話だと、結構難しいよ。うずめつちが気に入る子どもを探すなんてさ」

「そうですね……。社長が日向さんを口説くというのはどうでしょうか」

「俺が？……………ああ。あなたの子どもはまだあなたの胎内にいたのです。みたいな？」

「どうですか？」

「アフターケアが大変だから却下」

ちっ。ダメか。帰りの車内で居眠りしないように真剣に考えたアイデアだったのに。

「じゃあ、この子どもを譲るといふのは？」

「栞君……………。君って奴は本当に鬼だね。そんなこと出来るわけないじゃないか！」

ちっ。ダメか。今勢いで考えたアイデアだったのに。

「じゃあ諦めましょう。前金で二万も頂きましたし。三日探したフリして、見つかりませんでした。と言っておけば、たぶん大丈夫でしょう。三日後に会ったときにも話し相手をすれば、たぶん満足するんじゃないでしょうか」

「そうだねえ。日向さんは暇を潰せて、俺たちは二万円貰える。需要と供給も成り立ってるかなあ。じゃあ、それで」

「わかりました。ところで社長。私のショートケーキ、食べてませんよね」

「もちろん。冷蔵庫に入れてあるよ」

それはよかった。疲れた体には糖分が1番だから。私はソファーから立ち上がり、パソコンを開く。糖分補給の前に仕事を終わらせておこう。

テキストファイルを開く。『依頼内容：子ども探し 警察に行け』という文章を消して新しく『依頼内容：話し相手』と打ち込む。

『備考：依頼料金二万円。日給一万円くらい。楽な仕事。階段は重

労働だったが。おやつまで出してくれるらしいので、至れり尽くせりというやつだろう。』

「そういえば、栞君」

「なんですか」

私はパソコン画面を見ながら、答える。ショートケーキ食べたら今日はもう帰ろうーっと。

「襖の向こうには何があったんだろうね」

「ああ、それですか。好美さんに聞いてみました。どうも、日向さんはゴミの置き場所を変えるらしいんですよ。自分がキッチンにいるときは居間に、居間にいるときは寝室に、寝室にいるときはキッチンに。つまりあの時は寝室にゴミがあったわけです」

「へえー。変なことをする人だねえ」

「ゴミが嫌いらしいですよ。同じ空間に居たくないらしいです」

「ならすぐに捨てればいいのに……ああ、収集日が決まってるから捨てられないのか。子どもはいつでも捨てられるのにねえ」

「そうですね」

よし。仕事終わり。ショートケーキを食べよう。私がそう思ったとき、ピーピーと電子音が鳴った。私の腹時計ではない。たまごの腹時計だ。

「お。やっと思まれた」

「生まれた？リセットしたんですか？」

腹時計ではなく産声だったらしい。至極どうでもいい。私は冷蔵庫を開ける。おお、ショートケーキ。このために私は生きている。

「そうなんだよ。栞君が戻ってくるちよっと前にさ、こいつおやじになりやがった。レアだかなんだか知らないけど、俺はまめっちがよかったわけだ。だから、リセット。次は絶対まめっちにしてみせるぜ！」

「そうですね。頑張ってください」

私は社長のどうでもいい話を聞き流しながら、ショートケーキのイチゴを半分に割り、その半分を口に入れる。うーん、すっぱい。

もう半分は最後にとっておく。ショートケーキを口に入れる。うん、
美味しい。仕事の後だとさらに格別だ。これがあるから仕事はやめ
られない。明日も頑張ろう。

1・5・でもって今回のオチ（後書き）

はい、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。だいたいこんな感じで進んでいきます。

これからもうござよろしく。

エピローグ・提案

あら。

ねえねえ。あなた。この前来た人でしょ？

ああやっぱりね。悩みごとは解決した？

え。解決しなかったの？そう。

ねえ。あたしにその悩みごとってやつ。教えてくれる？

ふーん。子どもがいなくなったんだ。それで子どもを探してくれて頼んだけどみつからなかった。

くすくす。あいつらもまだまだまね。それで。どうしてまたこんなところを歩いているの？

ああ。子どもを探しているのね。それはお疲れ様。

あ。でもね。子どもを探すのもいいけど。人形もいいわよ。

どういう意味って。だからね。見つかるかわからない子どもを探すより。子どもの変わりに人形を買ったほうがいいんじゃない？ってこと。人形とか。持つてる？

ああダメダメ。そんなぬいぐるみはダメよ。あいつらはね。あなたがいないときに動き回って。あなたがいないときだけ喋るのよ？あなたただけ仲間はずれにするの。性格が捻じ曲がってるのよ。

日本人形もダメよ。あいつらはね。あなたを怖がらせることしかないんだもん。あなたが寝ている間に髪を伸ばしてね。あなたが起きたときにビククりする顔を見て笑ってるのよ？夜中にあなたを起こしてね。ゆっくり近寄って脅かすの。それで笑ってるのよ？陰湿でしょ？

たしかに一部の奴らは。あなたの為に頑張るけどね。そんなの極稀よ。ほとんどのぬいぐるみと日本人形はね。陰湿なの。

だからね。あたしの一押しはやっぱり西洋人形。

そうよ。西洋人形はいいわよ。あなたに話しかけてくれるわ。あなたとお喋りしてくれるわ。あなたの悩みだつて一緒に考えてあげる。たまには夢の中でもお喋りしてあげる。髪なんか伸ばさないわよ？自分たちだけでお喋りするなんてこともしない。あなたを怖がらせることなんか絶対にしないし。あなたを仲間外れにすることも絶対にしない。

どう？素敵でしょ？

くすくす。ええ。もちろんよ。あたしが言うんだから間違いないわ。西洋人形はあなたとお喋りしてくれるわ。西洋人形のあたしが言うんだからね？絶対に間違いないじゃない。くすくすくすくす。あはははははははははは！

ああごめんなさい。ちょっと嬉しくなっちゃって。どう？西洋人形も悪くないでしょ？

そう。でも考えといてね。できるならあたしがあなたの家に行きた

いんだけど。ほら。あたしは今。籠の鳥だから。ここから出られないのよ。

ええ。それじゃあまたね。あたしはずっとここにいるから。通りかかったら声かけてね？あたしの声が聞こえる人って。あんまりないから。

じゃあ。またね？

2・1・今回の前置き（前書き）

この更新スピードは期待してはいけなくて、誰かが言ってた。内容も期待してはいけなくて、いや、これはさすがに言っただけはないって言った。

あと、今回から番号の横に名前が出ててるけど、その人視点ってことだよって、誰かが言った。

ないときは、自由だー。ってありますが言った。

2 - 1 . 今回の前置き

0 .

その建物は灰色だった。その建物には窓がなかった。その建物には扉が1つあった。その建物は三階建てだった。その建物のある敷地では春には桜が咲いていた。夏には向日葵が咲いていた。秋にはイチヨウが咲いていた。冬には福寿草が咲いていた。その建物はレンガの塀で囲まれていた。そのレンガには鉄の鳥籠が1つ設置されていた。その鳥籠の中には鳥はおらず、西洋人形が一体閉じ込められていた。

その西洋人形は真っ赤なドレスを着ていた。薄い金色の髪、青色の眼、透き通るような白い肌だった。喜んでいるようにも怒っているようにも哀しんでいるようにも楽しそうにも見える無表情をしていた。

その西洋人形に、名前はまだない。

茶柱誠曰く、「桜やイチヨウは言うまでもなく自然を表して、この建物が人を表して、そしてこいつが、その中間を表すのさ」

鼎菜曰く、「桜とイチヨウは別にいいんですけど、向日葵と福寿草が面倒です」

西洋人形曰く、早く人間になりたい。

とということらしい。

1 . 鼎菜

今日も今日とで暇だった。私はパソコンで地雷処理に励んでいる。初級は楽勝、中級は普通。しかし上級がどうしても最後の最後までうまく出来ない。成功確立は今のところファイフティファイフティ。こ

れ、最後は勘の要素もあるんじゃないだろうか。

社長はソファーに座り本を読んでいる。さつき、何を読んでいるんですかーって聞いたら、青髭だ馬鹿野郎ーって言われた。この部屋に娯楽はパソコンか本しかない。本は腐るほどあるが、パソコンは私しか持っていないので社長は暇を潰すためには本を読むしかないのだろう。と、思ったがよくよく考えたら社長の机の中には色々娯楽が入っているから、そんなわけがない。つまり今日は本を読みたい気分だけのようだ。

ここの本棚にはなんでもある。絵本もたくさんあるし、私も結構気に入っている。しかし今は地雷処理に夢中。

「ねえ栞ちゃん」

「栞ちゃんじゃねえ。なんですか」

「ここが4でこの横が3だから……………」。

「青髭って知ってるかい？」

「名前と軽い内容くらいなら」

「ここは地雷……………。だからここは、セーフ！

「ちっ」

「え、どうしたの？栞君」

「なんでもありません。勝手に話しを続けてください」

ミスった。ああもう。即やり直す。

「ああそうかい？なら続けるけどさ。青髭っていうのはまあ有名だよね。娶った妻を殺して財産を手に入れる夫。そんな夫に嫁ぐ綺麗な女性。そして開けてはいけないと言われていた扉を開けてしまうということから、この女性は好奇心が強いよね。俺はそういう女性は好きじゃない。っていうのはまあどうでもいいとしてさ。それで危機一髪のところ、兄貴たちに救われる。それで財産をゲット！おいおいこの女、何もしてねえのに大金持ちだぜ？どう思うよ栞君」

「どうも思いません」

「だからね。ここが4。ここが3。でもって、ここが……………」。

「まあね。所詮は童話。昔話ってやつだしねー。これは西洋の話だ

よね。なんか実話を基にとか、これとそっくりの実話があるとか聞いたことがあるけど、まあ今はどうでもいい。つまり俺が言いたいのは、開けてはいけない物を開ける。という話っていうのは古今東西どこにでもあるんだなあってことだよ」

「はあ、そうなんですか？」

「うう……… たぶんここは、大丈夫！はい来た。セーフ。」

「ああうん。そうだよ。鶴の恩返し。わかってるじゃないか」

「褒め言葉として受け取っておきます」

そして受け流します。社長が誰と喋っているのかということをもしかして社長、私が相槌打たなくても勝手に話しをすすめるんじゃないだろうか。

「鶴の恩返しも開けるなって言われてるよね。扉をさ。まあ事情や背景は全然青髭とは違うけどさ。他にも、浦島太郎とかね？………ちよつと栞君聞いてる？」

「へ？ああはい聞いてますよ」

ちっ。反応を要求してきやがった。この寂しがり屋め。

「ならいいけどね。反応してくれないと寂しいよ？で、浦島太郎は玉手箱を開けるなって言われてるわけだ。他にも雪女も、このことを話してはいけない。みたいなことを言ってるね。しかしまあ、あれだ。西洋と東洋じゃ話しの終わり方が違つと、俺は思うんだよ」

「はあ、そうですか」

「もちろん浦島太郎や鶴の恩返しや雪女の話が東洋が発祥かは知らないし、どうでもいい。日本に馴染んだ形つてのが重要なわけだ。」

つまり、バットエンド」

「バットエンドですか？」

今この瞬間、私の地雷処理がバットエンドを向かえたとしての発言か？もしかして私、下手なのかな。地雷処理。

「青髭や、そうだなパンドラの話も似たようなものか、西洋の話はタブーを犯しても、救いみたいなのを示す。でも、鶴の恩返しに救いはあつたか？浦島太郎に救いはあつたか？雪女伝説に救いはあつ

「たか？」

「あつたんじやないですか？」

浦島太郎と鶴の恩返しは知ってるけど、雪女の話ってなんだっけ。うろ覚えだ。若人が雪女に出会って、自分だけのうのうと生き残って、美人の女性と結婚して、子どもも出来て、幸せの絶頂で妻に雪女の話をしたら、裏切り者！って言われて逃げられたんだっけ。そんな話だっけ。何か違う気がしないでもない。

「まあだいたいそんな話だね。」おっと心を読まれた。勘弁して欲しい。「他にも色んな伝説があるけどさ。このことは誰にも言つてはいけないって雪女に言われていたのに、若人はそれを裏切った。その結果、雪女は山に帰らなくちゃいけなくなつたし、若人は美しい妻を失い、子どもを男手一人で育てなきゃいけなくなつた。浦島太郎は、玉手箱を開けたらお爺さん。乙姫様は竜宮城で約束を破りやがってこの野郎と思つたとき。鶴は姿を見られてここにはいられない。若人は立派な着物をもう売れない。そう。つまり双方にとつてのバットエンドさ。誰も得をしない。乙姫は微妙だけどね。神話で言うとイザナギとイザナミも両方バットエンドさ。日本は昔からタブーを犯せば双方に不利益がある。という考え方があつたのかもね。その点、青髭然りパンドラ然り、西洋は片方がタブーを犯しても救いがある。青髭の奥さんはどう考えてもハッピーエンドだよね」

「何が言いたいんですか？」

「うん。つまりね」

ピンポーン

社長がそう言った時、まるで計つたかのようにチャイムの音が響いた。

「タブーに厳格なのさ、日本人つてやつはさ。それに触れるなら相應の覚悟を持つてということ。しかしまあ、そんなことはもうどうでもいい。さあ栞君お仕事の時間だ。さつさとその扉を開けてくれ。知ってるだろ？その扉を開けるのはタブーじゃない。タブーなんか存在しない。この場所にはね」

社長の長つたらしい口上を聞き流しながら私は扉を開ける。私は既にタブーを犯した人間だ。そう思いながら。

2・2・今回の依頼

2・鼎菜

扉の向こうには中年の男性がいた。

「どうぞお入りください」

「あ、はい、えー、どうもすみません」

私の言葉に対して過剰なまでに低姿勢でへこへこしながら、ソファに座る男性。その向かいでは社長が営業スマイルでスタンバイ中である。

「ようこそいらっしやいました」

「あ、はい、ありがとうございます」

「いやあー、最近はあれですね。あれ」

「え？あー、そうですね。あれですよー」

社長が雑談で話しを繋いでいる間に、私はお茶の準備をする。あれって何だと思いつつながら。あれってなんだ？

「どうぞ」

「あ、どうも。すみません」

「彼女が入れるお茶は美味しいんですよ。どうぞどうぞ。遠慮なさずお飲みください」

「あ、はい。これはどうも。ええ、美味しいですね」

「ありがとうございます」と、私は一礼してから席に戻りワードを開く。

『依頼人：男性。おそらく40代くらい。服装、物腰、髪の薄さ、メタボ体形から、おそらくサラリーマン。上司に頭を下げ、部下には強いえない。妻にも逆らえず、子どもにも尊敬されない。そんな人間に見える。先ほだからキョロキョロと部屋を見渡している。まるで知らない土地にいきなり放り込まれた子犬のようだ。気が弱い人間なのだろう』

「さて、何かお聞きしたいことはありますか？」

「聞きたいこと……はい、えっと、ありますけど、その、あー、あの人形は……？」

恐る恐る男性は社長に質問をする。『警戒している。普通の反応だと思われる。』

「あああれね。可愛いでしょ？このマスコットキャラみたいなものなんですよ。招き猫の代わりにもなつて、結構人気なんですよ？」

「あ、そ、そうなんですか……」

半端な作り笑いを浮かべる男性。あいつが可愛いとは思えなかったのだろう。それともあんな人形がマスコットキャラとか言うような場所に来たのを後悔し始めたのかもしれない。『普通』

「他に聞きたいことはありますか？」

そんな男性の気持ちを知ってか知らずか（おそらく知った上でスルー）社長はフォローを入れずに話しを進める。

「はい、その、あー、ここは、その、悩みを解決してくれると、ええ、聞いたんですけど……？」

社長の顔を伺いながら喋る男性。自分より年下の人間の顔を伺うのに慣れていているようだ。聞いた？またか……。まあ今回はあいつから聞いたわけじゃないだろう。

「はいはい。そうですね。どんな悩みも必ず解決します。例えば友人に頼まれて、借金の連帯保証人になったら友人が行方不明になってしまった。友人が見つからなくて困っている。お任せください。

友人を必ず探します。例えば火の中の水の中、草葉を掻き分け、地の果てまで。死んでも探します。徹底的に。例えば殺したい人間がいる。でも自分じゃ殺せない。お任せください。殺します。火の中の水の中、草葉に埋めて、地の果てに。死ぬまで殺します。徹底的に」

「は、はははは、そ、それはすごいですねー？」

男性は笑った。その笑いは見事なまでに乾いていたが。どうやら社長の説明を冗談と受け取ったようだ。

「そうなんですよ。まあ、このくらい必死に頑張りますということ

です」

社長は男性とは対照的に健康的に笑いながら、こつちを見た。とりあえず頷いた『普通の依頼人』

「それで、あー、ははは、すいません。まだお名前を聞いていませんでしたね」

「え、ああ、そうでしたね。すいません、小林と申します。名刺を……」

「ああ構いませんよ、小林さん。名刺を要りません。私は茶柱と言います。よろしくお願いします」

社長が名刺を断った。そりゃそうだ。名刺なんてものを社長は所持していない。どうやら必要ないと思っっているらしい。

「はい、こちらこそ、ええ、よろしくお願いします」

「いえいえ。それで、ご依頼内容は？」

「ええ、その、本当に、あの、恥ずかしいといいますが、こんな個人的なというか、家族の問題を、その、家族で解決できないのがその、ええ、なんといいですか」

さつさと言えよ。社長もそう思っているようで、笑顔が崩れそうになっている。耐えろ、社長。

「ええその、恥ずかしながら、息子が引きこもりでして、その、それを、ええ、どうにかしていただけませんか……」

「ははあ。それは大変ですね。お任せください。あなたのお悩み解決します」

「ええ、はい、こちらこそよろしく願います」

どうやら今回は社長が働いてくれるようだ。まあ相手が男だから、妥当だろう。

『依頼内容：引きこもりをどうにかする 熱血先生を呼べ』

3・鼎菜

その後、簡単に事情を聞いたあと小林宅に向かうことになった。

私は留守番だ。

「では、行きましょうか」

「ええはい。よろしくお願いします」

「じゃあ栞君、お留守番よろしく。あと、子どもの世話もね」

社長が最後にそう言っつて、社長と小林さんは出て行った。はあ、疲れた。

小林さんの話によると、どうやらこの場所は近所の橘さんから聞いたらしい。「橘さん……?」社長は覚えてなかったらしい。仕方ないので私がフォローしてやった。「下着泥棒の相談に来た人だと思います」「あああの可愛い女子高生」「可愛いは余計な気がするが、まあいいだろう。どうやらその可愛い女子高生のご両親と小林さんは仲が良いらしく、この話を聞き、恥ずかしながら相談しに来たらしい。奥さんに内緒で。

恥ずかしながら、小林さんは奥さんに頭が上がらないらしく、いつも息子（小林拓也というらしい）をどうにかしろとうるさく言われているらしい。しかし自分では恥ずかしながら、どうしようもないらしい。どうやら会話すら、恥ずかしながらこの一年したことがないらしい。それで、恥ずかしながら、奥さんがいないうちに（共働きのようだ。小林さんは今日会社をずる休みしたらしい）どこにかしてもらいたいらしい。小林さんは恥ずかしながら、口癖のようだ。

さて、社長がいない間どうしようか。地雷処理でもしてようか、読書でもしてようか。私これからどう時間を潰そうか考えていると。

ボーン・ボーン・ボーン

古時計が時を告げた。もう三時か。まずはおやつにしよう。私は今後の予定を考えながら、二階に向かった。

「小林さんはここまで、車で来たんですか？」

「ええ、はい。近くにパーキングがあったので、ええ、そこに止めてあります」

「そうですか。ここ、わかりにくかったですよ？」

「え？はい、そうですね、結構探し回りましたね、ええ、私、恥ずかしながら、探し物とか見つけるの、苦手なもんで、ええ、すいません」

それは別に恥じることではないと思いつつ、小林さんの車に向かう。俺も探し物は苦手だからな。引き出しの中に入れてたはずの物は、引き出しから引き出すことが出来ないタイプの人間なのだよ。ははっはっはっ。って榎ちゃんに言ったら冷めた目で見られたな。そんな目で見られてちよっとゾクゾクしてしまったのは内緒だ。そんなことを考えていたら小林車にたどり着いた。セダンだ。たぶん。

「汚い車ですけど、ええ、どうぞ」

「ああ、どうもわざわざすみません」

わざわざ助手席を開けてくれた。なんだか自分が偉くなった気がする。中は汚くはなかった。ああなるほど。外観が汚いという意味なんだなと納得した。あながち間違っではないだろう。

そして対して会話もせず、小林宅に到着した。車に乗ると眠くなるからね。会話しねえの。なんだかチラチラ小林がこっちを見ていたけど、無視ってことで。事情は家で聞けばいいし。まあテキストに頑張ろうが俺のポリシーだからね。

2 - 3 ・ 今回の舞台

5 ・ 茶柱誠

小林家はいたって普通の一軒家だった。二階建てで車庫が一つ。そう。クレヨンなんかの家に似ている。

「いい家ですね」

社交辞令ってやつだ。

「はあ、ええ、借金の塊ってやつです。ええ」

恥ずかしいそうに小林はそういった。自分で言っただけで情けなくなるとは、こいつはまさかそういう性癖の人間なのか。俺の仲間なのか。とかどうでもいいこと思いつつ、居間に案内させられる俺。

家の中もいたって普通。まさかこれほど普通とは、普通としか言えない。別に俺が小林家の内装やらに興味がないというわけではない。まあ家族写真が置いてあったというのは特筆すべきことということで、描写しておこう。その写真には3人写っている。背景は、学校のような。真ん中には痩せ気味の、小林様に似ていない学生服をきた少年が立っている。あだ名は骸骨だな。まあたぶん小林しゃんのご子息だろう。その両脇に、小林つちと背筋を伸ばしてシヤンとしている女性。厳しそうな家庭教師みたいな人だ。順当に考えてこれが奥様だ。これが奥様じゃなくて母様だったら、マザコンって呼んでやるぜ。

「息子さんのお部屋は？」

対面に座っている小林殿にお話を伺う。茶ぐらいだぜよとは言わない。

「ええ、はい。二階です」

だろうねー。えーっと、あとは何を聞かないといけないんだ？それとも、もうパツパツと次に進んでいいのか？ダメか。もう少し話し聞いてから行動パターンだ。

「息子さんは、あー、どうして引きこもりに？」

これね。これが大事。

「ええ、その、恥ずかしい話しが、ええ、その、全くわからないんです。ええ、ほんとに」

ああそれは恥ずかしい。息子がどうして引きこもっているかわからないなんて、親としては恥ずかしいだろうねー。はっ、恥を知れ。あ、知ってるのか。

「じゃあ、いつから引きこもってるんですか？」

そうや、名前聞いたっけ。忘れた。年齢も聞いたか？まあどうでもいい。たぶん高校生だろう。引きこもりに年齢は関係ねえし。

「ええ、その、一年くらい前からですかね、はい。高校二年からずっと、ええ」

ああということは、いまはピカピカじゃない三年生か。いや、高校は中退してるのかな。いや、してないのかな。まあどうでもいいのかな。

「なるほど、なるほど。食事とかは？」

「ええ、朝と夜、ええ、ドアの前においておくんです。ええ、そしてたら食器が、ええ」

なんかこの人説明下手だなあ。というか緊張してるのか？まあいいけどさー。

「ということは、あれですか？一年間ずっと、部屋から出ていないということですか？」

もしそうなら、部屋の中は魔境じゃないか。ゴミとか溢れてるんじゃないね？排泄物は？というか本人がゴミじゃね？垢まみれ太郎じゃね？

「ええ、私が知る限りは、ええ、でも、あの、日中は家には家内も私もいませんので、ええ」

ああつまり、日中は歩いてるかもしれないと？じゃあ日中隠れて出てきたところを捕まえればいいんじゃないかね？とは、いいませんけどね。

「ああなるほどなるほど。それじゃあ、二階に行きますか」
「え？ああはい、そうですね」
もうこの人と話すのも疲れたしね。はい、場面変更。

6・茶柱誠

場所は変わって二階。の、ドアの前。茶色で、洋風の扉。ちなみに和風な扉は襖のことですよ。なんともなしに、ノブを掴んでガチャガチャしてみる。鍵がかかっている。鍵穴はない。どうやら内側からしか鍵をどうにかできねえみたいだぜー。

ドアに耳をつけてみる。しかし何も聞こえない。実は中には誰もいないとかありえないかなあと思う。そうなると鍵は誰がかけたんだ？という話しになるが、ドアが歪んでるじゃね？という答えを用意してあります。

ドアを叩いてみる。ドンドン。………シーン。返事もなければ反応もない。俺が無視されるのが嫌いとしての行動だったら許さねえけど、まあそんなことありえないから許す。

「いつもこんな感じですか？」

「ええ、はい、私と家内がいくら声をかけても、一切反応がなくて、ええ、恥ずかしい話、もう、どうすればいいか」

ふーん、へえー、なるほどなー。

「ちょっと外見てきていいですか？」

「え？ええ、はい、かまいませんけど………」

小林がどうしてだろう、という顔でこっちを見るが俺はそんなのには気づかぬフリして、「小林さんは居間で待っていてください」と声をかけ、階段を下りた。

あ

っというまに俺は小林家の外周をぐるっと回った。その結果わかっ

た事といえば、ご子息の部屋には窓がある（当たり前かと思うけど
たまにそれから外れる法則ってやつがあるわけよ）。その窓の近く
近くといってもそれなりに離れているが、木がある。気合と根性、
そして溢れる勇気があれば、そこから窓に飛びつくことは出来そう
だ。まあ、窓が閉まってればそのまま落ちるけど。そして今は窓は
閉められ、カーテンも閉められている。つまり何が言いたいかとい
うと、窓からの侵入は厳しいな。ということである。しかし、カ
ーテンを閉め切って生活しているとは、さすが引きこもり。やっぱ
り引きこもりはそうじゃないとね！

おつと無駄にテンション上げてしまった。まあそれも仕方ない。
だって、車庫でいいもの見つけたんだもん。

居間に戻ると小林家の大黒柱的ポジションの人がそわそわしてい
た。トイレでも我慢しているんだろうか、まあそんなわけないか。時
計を確認しているところを見ると、妻が帰ってくる前にどうにかで
きるのか不安でしょうがないだろう。

「あ、あの、どうですか？なんとかできそうでしょうか？」

戻ってきた俺に急かすようにそう聞いてくる。まあ落ち着けよ旦那。
なんかの乞食はなんとかつていうだろ？

「ええまあ、なんとかありますよ。その前にもう一度色々確認しま
すけど、いいですか？」

「ええ、はい、確認？」

「そうです。小林さんのご依頼は息子さんを部屋から引きずり出し
て欲しいということですかまいませんね？」

「引きずりだすというのは、あれですけど、ええ、はい、そうです」

「やり方はこちらに任せていただけますね」

「ええ、はい、かまいません」

「はい言質とつたー」

「では、十万円頂きます」

「お金頂戴。お命頂戴ではないから安心してね。」

「じゅ、十万円！？」

「ええそうです。良心的な価格ですよね」

ニコニコしながらさっさと金出せやと、強要する男。それがこの俺茶柱誠のいいところって誰か言ってくれないかな。栞ちゃんなら言ってくれると信じてる。しかし小林は何をそんなに驚いているんだ。このくらい取るのは当然じゃないか。一人の人生を変えるお値段十万円。安いくらいだぜ。

「あ、あの、今は、手持ちが……………」
「だろうね」

「今はいくらあるんですか？」

「ええ、あの、五万円ほど……………」

「好都合だね」

「ああなら大丈夫です。前金で五万円。その後五万円。計十万円というわけですから。ああ安心してください。解決したら即代金を頂くわけではありません。一年くらいは待ちますよ？」

「ああ、なるほど、そういうことなら……………」

意気消沈という感じで財布から五万円を取り出す。案外簡単に金払ってくれたな。そこまで息子を外に出したいのか。それとも、奥様に怒られるのが怖いのかなあ？

「では、あなたのお悩み解決します」

俺は満面の作り笑いを依頼人に向けた。

7・茶柱誠

ギャ

という人の叫び声に聞こえるような気がしなくてもないな。と、俺は思いながら扉破壊に勤いそしむ。

「……………」

後ろで何か小林の野郎が騒いでる気がするが聞こえないので破壊活動に勤しむ。しかし俺は優しいので、小林ちゃんの叫んでいる内容を推察して答えてあげる。破壊活動に勤しみながら。

「え！？このチェーンソーですか！？だからこれはあなたの車庫に置いてあったやつをお借りしたんですよ！！え！？どうして扉を破壊しているかって！？何を言ってるんですか！！！！息子さんを部屋から引きずり出すためですよ！！！！扉が開かないなら壊せばいいじゃない！！！！あはははははは！！！！しかしこれは結構大変ですね！！！！！！え！？ああ大丈夫ですよ！！！！扉を直すつてはありますから！！！！奥様が帰ってくるまでには直りますよ！！！！あいつは速さだけが取り柄ですからね！！！！ええ安心してください！！！！ついでに新しくした扉に鍵なんざつけなければ引きこもることはできません！！！！鍵なんてね！！！！心にあればいいんですよ！！！！なーんてね！！！！あはははははは！！！！あ、扉の代金は頂いた前金でちゃんと払いますよから金銭面もご安心！！！！！！」

やべ、テンションあがるわー！最高だ！何かを壊すつて最高にハイになるよね！？まあ俺は怒られてもハイになるけどさ！！！！しかし扉を破壊されているというのの中から一切反応がない。もしかしてマジで中には誰もいない可能性があるかもね！！！！でもまあ、気にしねえ！！！！今はこの扉を壊すことだけを考える！！！！

「よし！！！！完璧パーできパーフェクト！！！！」
ハイテンションチェーンソーで破壊したら案外すぐに破壊できた！扉に大きな四角い穴が出来たのだ！もはやこれは扉ではなく、通り抜けフープ的な何かになってしまっている！

「あ、あなた何してるんですか！」
小林殿はまだなにか騒いでるが気にしない。

「まあまあやってしまったものは仕方ありませんね。あ、木屑に気をつけてください。あとバリに引っかからないように」

俺はそう言いながら、閉ざされた部屋の中に侵入した。
部屋の中は思った以上に綺麗だった。ゴミも日中に捨てているの

かもしれない。カーテンが閉められている部屋を蛍光灯的な光が爛々と照らしている。自然な明かりよりこういう明かりが好きな俺にとっては文句はない。本棚もあるし、タンスもある。そういえば服とかどうしてるんだろう。まあいい。

「なんだよあんた。まったく騒がしいたらありやしねえよ」

そして椅子に一人の少年が座っていた。ジャージ姿。動きやすそうだ。こちらを向いて軽薄な笑みを浮かべている。正直嫌いなタイプだ。机の上にあるパソコンの電源が入っているので、おそらく年中無休でパソコン三昧だったんだろうなと推測できる。

「た、拓也なのか？」

小林さんが息子に声をかけた。感動の対面なのだろうか。一年間ぶりって、感動かなあ？そのくらい普通かも。

しかし、なぜ疑問文なのだろうか。とは思わない。そりやそうだ。今日の前にいる少年は写真に写っていた少年とは比べ物にならないくらい太っていた。面影なんかどこにもない。だから、小林父は疑問文になったんだろう。まあ部外者たる俺にいわしてもらえば、写真の少年より、今いる少年の方が小林さんに似ていると思うけどね。典型的に。

2 - 4 ・ 今回の結末

8 ・ 茶柱誠

「ああ、そうだよ親父。俺だよ、拓也だよ」

小林さんの、てめえ拓也なのか！？発言に対して、拓也（仮）はニヤニヤ笑いながらそう答えた。そのニヤニヤ笑いが俺を不愉快にさせるとしてっの行いなら、許さねえ。

息子（仮）の発言を聞いてもまだ信じられないのか、小林殿は驚愕と恐怖と畏怖とあとなんだろう、とりあえず震えている。

「お、お前、本当に、拓也なのか？」

ついでに声も震えていた。俺もう帰っていいかな。駄目だよなあ。

「だから、そうだって言っつてんじゃん、あんた息子の言葉を信じらんねえのかよ」

小林とは違い、ガキは久しぶりにあった父親にたいして気まずい気持ちは一切ないらしい。感謝の気持ちもねえらしい。逆に楽しんでいるようだ。この状況を。

拓也（笑）の言葉を受けて、小林さんは何か口の中でぶつぶつ咳いている。いろいろあるんだろうなあ。

「い、いや、お前は、拓也じゃない！た、拓也は何処だ！」

はい、衝撃の発言が小林さんの口から飛び出した。小林さんは偽息子を震える指で指差し断言したのだ。お前は息子じゃないと。しかし、またこういう展開かよ。俺はひそかにため息をついた。

「何を言ってるんだよ、俺が拓也だよ」

拓也（仮）は、おどけるように手を大きく広げた。まるで、オーブンユアマインドー！。私の全てを見て！。という感じだった。

「ち、違う、拓也はそんなに、太ってない！」

いや、小林s。それはないわ。

「太ったんだよ。運動してなきゃ太るのも仕方ないだろ？」

「た、拓也は、わ、私のことを親父だなんて、呼ばない！」

いや、小林c。それはないわ。

「呼ぶようになったんだよ」

「た、拓也は、わ、私にそんな話し方をしない！」

いや、小林。それはないわ。

「話すようになったんだよ。フレンドリーだろ？」

フレンドリー過ぎるんだよ。

「た、拓也は、そんなに声は低くない！」

「声変わりだよ、声変わり」

いや、その答えはどうだろうね？

「た、拓也は、拓也は………」

小林は、拓也は拓也は、と言うばかりでそれ以上目の前にいる少年が自分の息子ではないと証明する問い、つまり息子の存在証明的な質問を思いつかなかつたらしい。他にももつとあるだろ。誕生日とか、血液型とか、えーっと、昔の思い出とか？結構自分が自分である。と証明するのって大変なんだよなあ。

「おいおい、親父」

どうやら偽拓也（仮）は、今にも崩れ落ちそうな親父（仮）に追いつきかけようという算段らしい。えげつねえな。

「久しぶりにあった息子が別人なんていうなんてまったくひでえじやねえか。太ってるから？呼び方が違うから？口調が違うから？声が違うから？つまり親父は理想どおりの息子じゃないから、俺を息子じゃないって言うんだろ？酷い話だなー。なあ、そのあんたもそう思うだろう？」

「あん？ああ、そうだな」

急に話しかけてくんじゃねえよ。俺はてめえの友達でもなんでもねえぞ。部外者だぞ。そしててめえは客でもなんでもねえから敬語なんざ使ってやらねえ。でも、同意してやる。優しい俺に乾杯。

「ち、違う！そうじゃない！お前は拓也じゃないから、私は！」

「おいおい俺以外に拓也がどこにいるってんだよ。俺は悲しいな！
こんなに親父思いの息子を息子じゃないっていうなんてな！。ほら、
親父。覚えてるだろ？親父が離婚の相談を俺に、息子の俺に、した
ときのこと。あの時だって、俺はちゃんと親父の話を聞いてやった
のに。そんな俺を、一年間会ってなかったけど、たったそれだけ
で！息子じゃないって言うなんてなー！」

おいおいと、わかりやすく泣きまねをする少年A。ノリノリだな
こいつ。何が楽しいのか全然俺にはわからない。まあ、部外者から
言わせれば、なかなか笑える状況ではあるな。

今の発言がとどめだったのかもしれない。小林さんは、その場に
崩れ落ちた。うわ言のように「拓也じゃないんだ、拓也じゃないん
だ、だけど、拓也という、だけど、拓也の部屋にいる、だけど、私
を父と呼ぶ、だけど、拓也との思い出を語る、拓也じゃないのに……」
ぶつぶつ呟いてる。この程度でこんな状態になるなんて、打
たれ弱いな、情けない。それともすでに結構切羽詰っていたのかな
？奥様との関係に悩んでたみたいだし。そして、ここにきてのこの
仕打ち。ご愁傷様ってやつだな。

俺は、崩れ落ちた小林さんの顔の前で手を振ってみた。反応無し。
拓也（仮）はそんな親父（仮）の様子をニタニタ笑いを浮かべなが
ら眺めている。面倒だが、俺が運ぶしかないようだ。この後のこと
を考えると、俺は小林さんを、気合と根性で背負う。お、重い。そ
して耳元でぶつぶつ言われて不快。階段で落とす気がする。

まあ、そんなこともなく。なんとか居間のソファーに小林さんを
放棄して、拓也君の部屋に戻る。

拓也もどきは、俺が出て行ったときと同じようにニタニタ笑って
いる。その笑いが、不快だったから俺は戻ってきたわけだ。わざわざ
ざ不快になりくるなんて、俺はマゾかもしれない。

「で、結局おっさんだれ？」

「おっさんじゃねえよ。そういうお前は誰だよ」

「ああ？なに、おじさん、じゃなくてお兄さん、までそんなこと言

「うわけ？俺は拓也だよ」

「ああはいはい。そんなのもういいから。俺はさっさと話し進めた
いんだよ。解決編にしたいわけよ。だから、そんなわかりきった嘘
を言うのはやめてくれ」

拓也は俺のその言葉を聞いて、ニタニタ笑いから、共犯者に向け
るような笑みにその笑いを変えた。ああ、まだそっちの笑いの方が
不快じゃない。戻ってきたかいがあつたな。

「いや、嘘じゃねえよ？ただまあ、小林拓也じゃなくて、大林拓也
ってだけでさ、拓也ってというのは嘘じゃなねえの。息子っていろ
は完璧嘘だけだな」

はいはい、下らない下らない。

9 .

「つまりさ、拓也と俺は友達だったわけよ。同じ名前の好よでさ、結
構仲良かったかな。まあだから、拓也が引きこもったあとともメール
とかで連絡を取り合っていたわけ。お兄さん知ってる？この家さ、
母親がすっげえ厳しいわけ。なんつーの？カカア天下っていろのか
な。まあ呼び方はなんでもいいけどさ、この家は母親が全てを管理
しているわけよ。父親も母親のいうことを何でも聞く。そしてそれ
を自分にも強要してくる。それが拓也は嫌だったわけよ。だからま
あ、それに反抗して引きこもったらしいんだよ。いや、俺もそれは
どうよって思ったよ？親に反抗するなら家出とかのほうが、いいん
じゃねえのかなーって。もしくは暴力による反抗？まあそれは冗談
だけどさ、なんていうのかなあ。やっぱり昔からそういう母親に育
てられていたからかな。拓也は母親から離れるのもけっこう怖がつ
ててさ。でも、母親に反抗したい。ってことで、引きこもったわけ。
この部屋から一歩も出ないっていろのは、母親から離れてるよう
で離れていないような感じだろ？」

ああうん。そうそう。俺も思った。弱虫だなあってさ。うん。だ

から俺がメールとかで励ましてやったわけよ。もつと頑張らないとダメだ。ってさ。そしたらさ、拓也が引きこもってから、だいたいそうだなあ……二ヶ月くらいかな。拓也がさ、入れ替わらないか？って提案してきたわけよ。そう。拓也の方から。これには俺も驚いた。なんだろう。引きこもる前の拓也じゃ、絶対提案してこなかったと思うよ。こんな馬鹿なことさ。やっぱり引きこもってみるとわかるけどさ、変わるよ。一日中パソコンで、色んなサイトを見たり知らない情報を知ったり知らない人間と触れ合つと、考え方がさ。それで俺は聞いたわけだ。一体どういう意味だ？ってさ。んでまあ、話しを聞いてみたらさ、どうやら限界に近かつたらしいんだよな。

何がって、引きこもってるのがさ。これがやっぱり一度やってみるとわかるけど、引きこもるのって結構大変なんだよ。精神的にっていうのかな。罪悪感っていうのが近いかな。拓也は清く正しく育てられたからさ、その罪悪感に耐えれなかったのかもな。まああと、母親に抵抗しきれなくなったのかもかもしれない。そうはいつても、引きこもる前の拓也じゃ絶対提案しなかったな。入れ替わるなんて。どうやら、引きこもった結果にたどり着いた答えが、家出だったらしいんだよ。まあある意味順当な考え方だよな。家に引きこもり続けた人間が、外に憧れるっていうのはさ。家出なんかしたらすぐにバレるだろ？バレたら探されるだろ？そういうのは嫌じゃん？だから俺と入れ替わろうってわけ。最初は俺も断ったんだぜ？そんなのすぐバレるって。でも拓也の話しを聞いてたらなんかバレない気がするきてさ、まあ実際、一年近くバレてないわけよ。案ずるより生むが安しってやつだな。

どうやって入れ替わったって？そりゃ簡単だ。昼間はこの家空っぽだからな。玄関から入って、拓也と交代した。な？簡単だろ。いやあー、最高だよこの環境はさ。部屋にいれば飯は持ってきてくれる。パソコンがあれば退屈しない。買い物だってネットで出来る。ああもちろん代金は、拓也の親のクレジットカードだから、働かなくても、勝手に金が入る。受け取りは昼間に時間指定しとけば、自

分で受け取れるしな。いや、実際俺、引きこもりっていつても結構外出てるんだぜ？コンビニとか、週に一度は欠かさず行くし。まあ『お袋』と『親父』に会わないようには気をつけてるけどな。

『拓也』が今どこにいるかって？はははは、おかしなことを聞くね、お兄さんは。今、目の前にいるじゃないか。ああそっちの『拓也』か……さあね、一年前から行方不明。ってことになってるらしいよ？まあ俺には関係ないけどね。

え。もう帰るの？あつそ。でも、その扉だけは直してくれよな。なんでって、お兄さん馬鹿？扉がないと、俺が引きこもれないだろ？」

10・鼎菜

「とうわけだったのさ」

「とうわけだったんですか」

社長はチヨコレートケーキをフォークでちまちま食べながら、今回の仕事についての報告をダラダラと述べた。時刻はさつき七時を告げる鐘がなったから、そのくらい。そろそろ私は帰りたいが、まあ報告くらい聞いてやるのが優しさって奴だ。

「で、その後どうしたんですか？」

そして話しの続きを促すのも優しさ。

「ん？その後、木目ちゃんを呼んでさ、扉をパーツと直してもらって、まだ幻想と現実の狭間くらいを彷徨っていた小林さんに、事情をテキストに説明した」

「納得してくれたんですか？」

「さあ？」

さあってお前。

「もしかしたら、話の半分も聞いてなかったかもしれないなあ。まあいいじゃん。お金も十万円きっちり頂いたし」

そう、この男。小林さんが夢と現実の狭間を彷徨っているのをい

いことに、財布から残りの五万円を抜き取ったのである（財布の中に折りたたまれていた万札を見つけたらしい）。それを聞いたときは呆れたが、まあよく考えたら依頼は達成しているのだから貰ってもいいだろう。息子さんは、すでに外にいるのだから。

「しかも、アフターサービスまでしちゃったし。やべ。俺、すっげえいい人じゃね？ 栞ちゃん褒めてもいいよ？」

フォークをくわえながら、何かを思い出したのか、もしくはこれから起るであろう楽しいことを想像しているのか、社長は悪そうに笑った。

「社長が栞ちゃん言わなかったら褒めてあげます。アフターサービス？」

「そ。壊す前の扉は内側からしかロックの解除が出来なかったけど、新しい扉は外側からでも開けられるわけ。あははは、あのガキ気づいてないだろうな。ざまあみるってんだ。お前にお兄さんと呼ばれても全然嬉しくないんだよ。俺は女の子にそういつてもらいたいんだよ」

そこで私をチラッと見る意味がわからない。

「それで、その扉の鍵はどうしたんですか？」

「もちろん小林さんに渡したよ？ でも出来ることなら、あの鍵は奥さんに使ってもらいたいなあ。栞君もそう思うだろう？ どうなるのかなあ。旦那はへなちよこだったけどさ、奥さんはあのガキと対面したときどう思うだろうね？ そしてどんな行動を取るんだろう。楽しみだねえ。わくわくするね。栞君もそう思うだろう？」

「思いません」

だって興味ないもん。

私は今日一日の最後の仕事として、報告書の改ざんを行なった。

『依頼内容：ドアの付け替え』

『備考：依頼料金十万円。ドアの付け替えは木目に頼んだのなら、おそらく無償に近いお値段だろう。彼女は金には興味がない人だから。つまり社長は扉を破壊しただけで、十万円手に入れたわけだ。』

青髭もびっくり」

「まあ、君はここでケーキ食べてただけで、何もしてなかったわけだけだね。何もせずに十万円ゲットしたわけだね。まあ別にいいけどね」

なんだか皮肉っぽく社長に言われた。この前のお前もそうだった。というか、何故私が打った内容がわかるんだ？まあいいや。私も社長に皮肉で返すことにしよう。

「食べていただけじゃありません。子どもの世話もしてましたよ？あああと、地雷処理もしました」

私はパソコンを閉じ、今日一日の仕事を終えた。

2 - 4 ・ 今回の結末（後書き）

この小説……………ジャンルコメディーかなあ……………

3・0・プロローグ・人形も雨が嫌い

嫌な天気ね。

全くほんと嫌な天気。

雨ってほんと憂鬱にさせる。

この雨って植物以外にはなんの恩恵も与えてない気がするわ。

あなただってそう思うでしょ？

人間にも。

ましてや人形になんて。恩恵なんて。ね？

くすくす。

聞こえてないか。

聞こえてたらさっさと離れてもらいたいわね。

くすくす。

聞こえてないか。

そんなに近くで見られたらあたし恥ずかしい。

なんちゃって。

ああ。つまらない。ただ聞いているだけなんてつまらない。お喋りしたい。お喋りしたい。ねえねえ。お喋りしましょうよ。あたしの声が聞こえるなら。お喋りしましょう？

つて。ちょ！あんた！や。やめなさい！こら！きゃ！てめえ！このガキ！調子のもつてんじゃ。だから。籠を揺らすな。つて言ってるでしようが！！

ああ。もう。倒れちゃったじゃない。どうするのよこれ。最悪だわ。だから雨は嫌なのよ。

ああ。もう。起き上がるのつて。疲れるのよね。喋るより全然大変。ほんと大変なんだから。

くすくす。

驚いてる驚いてる。ああ。これで。あなたにあたしの声が聞こえたら完璧なのに。ね？

あら。行くの？

行きなさい行きなさい。そして悩みを解決してね？

そして願わくば。

あたしの声が届くようになりますように。

な—んてね。

0 .

その部屋は広がった。その部屋には窓がなかった。ドアは5つあった。1つは1階に続く階段へ。1つは3階に続く階段へ。1つはトイレへ。1つはお風呂へ。1つは洗面所へ。壁は一面灰色だったが床にはピンクのカーペット。部屋の端には大きな衣装ダンスに、大きな鏡台が置かれていた。そして部屋の中央には3人は余裕で眠れそうな大きな天蓋付きのベッドが置かれていた。そしてそのベッドの中央には10歳前後の少女が一人で眠っていた。天使のようなという言葉がぴったりの寝顔ですやすや眠っている。髪は艶やかな黒。腰まで届きそうなくらい長い。着ている寝巻きはアニメのキャラが描かれた子どもらしいものであった。どこかアンバランスな空気を纏っている不思議な少女だった。しかしこの部屋もアンバランスなのだから、当たり前といえば当たり前なのかもしれない。

少女の名は見習ありす（みならいありす）

茶柱誠曰く、「子どもだからって純粋なわけじゃない。だからといって、残酷なわけでもないけどね」

鼎菜曰く、「おやつのお時間だけは忘れない子どもです」

西洋人形曰く、「あの子とはもっとお喋りしたいわ。」

見習ありす曰く、「眠い……………」

というこころしい。

1・鼎菜

今日は雨だった。雨の日はよくないことが起こりやすい。気がする。もちろん気のせいだと思うのだが、私はそう思う程度には雨の

日にろくでもないことであつてきたわけなので、用心するに越したことは無い。だから私は地雷処理を行わず、引き出しからカッターを十本程度取り出し薄手の手袋をはめ、ソファアに座り、カッターの手入れをすることにした。「栞ちゃん？雨が降るたびにそういうことされると怖いんだけど？」という社長の言葉も華麗にスルーすることが出来る素晴らしい耳を持たたことを私は何かに感謝したい。私は社長の言葉に一切答えず、午前中とりあえず五本のカッターの手入れを終え、「ねえ栞ちゃん？栞ちゃんってばさー。いつものほら、ちゃん付けはやめる的な発言は？」という社長のよくわからない要望にも答えず、昼食を食し、残りのカッターの手入れを開始した。

そして私がちょうど七本目のカッターの手入れを終えたとき、社長が何故か私の対面に座り「しーおりちゃん。あーそびましょー」とか言つていたとき、チャイムが連打された。チャイムと言うのは本来一度で十分事足りるものであり、普通なら一度押すだけでしばらく待つのだ。連打するものではない。連打する人間というのは、何か急ぎの用があるのか、それとも普通ではない人間ということだ。雨の日はよくないことが起りやすい。だから私はカッターの手入れをしていたのに、どうやら無駄だったようだ。しかしまだ抗うことも出来るかもしれない。

「社長。今日は臨時休業ということではいかがでしょうか？」

「却下」

でしようね。社長の楽しそうな顔を見ればわかるというものだ。私にとってよくないことが、社長にとつてもよくないこととは限らない。私は嫌々、あまりにも嫌々だったのでついついカッターを机の上に放置したまま、ソファアから立ち上がり、いまだにチャイムを連打している人物のためにドアを開けてやった。

そして開けた瞬間、その人物は入ってきた。

「いやあー、やべえな。これはやべえな。マジで雨つてやつはやべえ。傘差してたのに濡れ濡れのビショビショになつちまつたぜ。も

う最悪。まあビショビショの女だったら俺にとつちや最高つてやつだけどさ。あ、おばさん、傘どこに置けばいいわけ？あ、ウソだぜウソ。わざとだよ、こういうと女ってみんな怒るんだよなあ。それがおもしろくてさ。美人の姉ちゃん、傘たてねえからその辺に置いとけばいいよな。うう寒い寒いっつと。うわあー、このソファースっげえ高級な感じ。座り心地サイコー。って何このカッター。チョー怖いんですけどー。ところでお兄さん、あの人形ありやなんだ。勝手に起き上がったぜ？すっげえじゃん。勝手に動く人形なんてテレビに売り込もうぜ。まあどうせ中にそういう機構があるんだろうけどな。うわあ、すっげえ本だ。あんたが集めたのか？いやあすげえな。俺も結構本読むわけよ。ああライトノベルとかいう最近流行ってるオタクっぽい本じゃないぜ？ちゃんとした文学のやつさ。まあ家、ビンボーだから図書館で借りるんだけどな。まあさすがに外国の本は読まないけどな。しっかしほんとにすげえ量の本だな………そうだな。よし、俺の名前はサトウだ。サトウユウヤだ。よろしくな、カツコいいお兄さん？」

入ってきたのは少年と呼んでもいいくらいの風貌の男であり、入ってきてからまさに勝手に、勝手に行動して（ドア付近で私にべらべら話しかけ濡れた傘をそこに投げ捨てソファースに座り作り笑顔を作った社長にべらべら話しかけソファースから立ち上がり本棚の本を眺めまたソファースに戻って）名を名乗った。しかも偽名っぽい。

………今からでも遅くない。社長にもう一度臨時休業を進言してみようか。今なら社長も同意してくれるかもしれない。

「こちらこそよろしくサトウ君。俺は、そうだな。モリ。モリヒロシだ。そしてそこにいるの美人のお姉さんはツジムラミズキ。ほら、ミズキ君。何をぼんやり突っ立てるんだい？早く席についてパソコンを開いていつもの仕事をしなさい」

「そうだぞー。ミズキー。しっかり働けよー。大人なんだかさー」
「……………わかりました」

社長に期待した私が馬鹿だった。そしてあのガキをぶち殺したい。

ニヤニヤ笑って私を馬鹿にしているようだ。しかし我慢だ。私は大人。大人なのだ。ガキに本気で怒る人間ではない。だから後で社長に八つ当たりしよう。

私はため息をつくのを我慢しつつパソコンを開いた。ちなみにお茶は用意しない。だって社長が頼まなかったんだもの。早くパソコンを開いて仕事をしろというのは、こいつに茶を出す理由はねえから茶はいらん。という意味なのである。私はそう判断した。

『依頼人：少年。おそらく高校生。制服を着崩している。茶髪。痩せ型。ピアス装着。チャラチャラしている。嫌な奴。生意気な奴。ガキ。自分は優秀でありなんでもわかっていると思い込み大人を馬鹿にするのが楽しくて仕方ない。世界はどうすれば平和になるか？という問いに対して得意気に、人間が全員死ねば平和になるぜ。と答える。そんなガキに見える。というかたぶんそうだろう。先ほどからずっとニヤニヤ笑っている。社長が名乗ったのは明らかに偽名であるが、それに対して何も言わない。俺だって偽名を名乗ってるだからそっちも偽名を名乗るのは当然。というかそうしない方が馬鹿だ。とでも思っているのだろう』

「さて、サトウ君。君はこの場所がどういうところか知っているかな？」

「ああ知ってる。だから来たわけ。ここは悩みを解決してくれるんだろ？」

社長もガキも笑っている。なんだか張り合っているように見える。つまり、どっちが先に笑うのをやめるのか。社長が作り笑いをやめるのが先か、ガキが人を小馬鹿にする笑みをやめるのか。実に下らない。

「その通り。ここはなんでもやる場所です。人探し犬探し猫探し豚探し牛探し人殺し犬殺し猫殺し豚殺し牛殺し！なんでもやります。だからあなたの悩みを絶対に解決できる」

社長はおおげさに両手を広げた。どうも今回は過剰に演出をしたいらしい。

「それはサイコーだ！聞いていた通りじゃないか！」

ガキも社長のようにおおげさに両手を広げる。感激しているらしい。

「で、サトウ君。君の悩みは何か？」

「ああモリさん。俺の悩みは簡単なもんさ。母親がうぜえのよ。うざくてうざくてたまらないのさ。だから、」

ガキは社長の反応を見るためにあえて、一拍置いてから、言った。「母親を殺してくれ。出来るだろ？簡単だろ？ここは、なんでもやるんだろ？」

そう言ったガキは、教師が授業中に間違えた些細なことをしつこくねちねちと馬鹿にする、それが楽しくて楽しくてたまらない。そんな表情だった。一言で言えば、醜悪。

『依頼内容：人殺し 馬鹿としか思えない』

「わかりました。その依頼受けましょう」

おそらく。社長のこの淡泊な反応はガキにとっては予想外だったのだろう。きよんとした表情を浮かべている。拍子抜けだったに違いない。社長はガキが言ったことの意味がわかっていないんじゃないかと思うほど変わらない。変わらず、作り笑顔をキープしていた。つまり、社長とガキの張り合いは社長の勝ちということだ。どうでもいい。

「ということ、ミズキ君。あり、じゃなくて、アリスガワ君を呼んできてくれたまえ」

「わかりました」

私はパソコンを閉じて、いまさらながらずっと薄手の手袋をしていたことに気づいたので外してから、2階に続く扉に向かう。

ガキは何も言わない。私たちの反応が自分の思ったとおりではなかったから混乱しているようだ。ざまあみろ。

階段は人一人歩くのがやっとの幅しかなく、もちろんコンクリート作りで、何故か急勾配で、私のように体力がない人間には、結構

つらい。

やっとの思いで階段を上りきり、扉を開ける。そこは1階とは違って、人間が住んでいそうな部屋っぽい部屋である。カーペットがピンクというのは私の趣味にはあわないが、この主が子どもなのでまあいいだろう。

この主である子ども、つまり見習ありすは、部屋の中央のベッドの中央で、すやすやとお昼寝中である。昼食を食べたら即昼寝、そして3時に起きておやつを食べて、夕寝、それがこいつの生き方なのだ。いいご身分なこと。

「ありす。起きなさい。ありす。起きろ。子ども。おい子ども」

私はベッドに上り（中央に寝ているありすを起こすためにはベッドに上がらないといけない。腰掛ける程度じゃダメだ。こうしないとありすを起こしにくい。無駄にでかいから。このベッド）ありすをゆすり起こす。

「ううん……………しおりちゃん？」

ありすが目を擦りながら眠そうに起きた。

「菜ちゃんじゃない。そう呼ぶくらいなら呼び捨てにしなさい。全……………何度言えばわかるの？」

この子は社長から悪影響を受けている気がする。

「なに？おやつの時間？ティータイム？」

私の言葉を聞いているのかいないのか（たぶん聞いていない）欠伸をしながら、「今日のおやつは？」と聞いてくる寝ぼけありす。

こいつは、このこの社員という自覚が一切無い。まあ子どもだから仕方ない。

「違います。仕事です。ありす、じゃなくてアリスガワ。今日のあなたはアリスガワです」

私はとりあえずベッドから降り、ありすの衣服の準備に取り掛かる。さすがにパジャマで人を殺すのはよくない。それなりの正装じゃないと……………。

「……………なにそれ。しなの川のしんせき？」

「たぶん違います。とりあえず顔を洗ってきなさい」
私はあるすのたわ言を軽く流しながら、服を選び始めた。

3 - 2 - ヒトコロシ

2・茶柱誠

「あのお姉さんは何しに行ったわけ？」

「君の悩みを解決してくれる人材を呼びに行ったのさ」

「へえー………つまり、本当に依頼を受けてくれるってわけ？」

「当たり前」

サトウは人を不快にさせる笑みをこちらに向けてくる。俺はその顔を見るのはもううんざりだったので、自分の爪を弄るのに忙しい。もう作り笑顔もやめた。

「ああ、サトウ君。そこに置いてあるカッター。1本あげるよ」

「あん？………ああありがとうお兄さん。そうだな………これにするか」

サトウは理由を聞かずに、栞君が綺麗に手入れしていたカッターを1本手に取りポケットにしまった。おそらく理由を聞かなかつた理由は、聞かなくとも理由がわかっていているからではなく、聞くのがかつこ悪いとも思っているんだろう。自分は聞かずともわかっていられると思われたいのだろう。くだらねえ。聞くは一得聞かぬは恥みたいなことを知らないのだろうか。まあ都合だからいいけどー。

「じゃあ、依頼料金について話をしようか？」

栞君達が戻ってくる前に依頼料金について話しておこう。女の子の準備は時間がかかるからね。その時間を無駄にしない俺は偉い偉い。

「ああやっぱりそういうことか」

「ん？何を納得したのかな？」

まあ薄々わかってるけど聞いてやるか。優しい俺。つまり、

「で、いくら取るわけ？何千万？何千億？何千兆？ははは、それとも一兆億円とか？人を殺してくれるお値段はいくらなわけ？」

ああやつぱりね。サトウは俺が払えない金額を提示して、それじゃあ依頼は受けれませーん。ここは何でもやるけど、何でも受けるわけではありませんからー。とでも言うと思ってるのだろう。はあ……………やめるよその、勝ち誇った顔。もう、うんざり。

「今いくら持つてる？」

「あ？あ、ああ、20万はあるかな。ははは、あのババアのヘソクリを持ってきてやったぜ」

「じゃあ、それでいいや。20万。前金10万」

ほれよこせ。俺は、呆気に取られているサトウによこせと手を差し出す。

「ほ、本当に、殺すのか？」

今さらそれかよ。というか、今それかよ。

「それが君の依頼だろ？それとも、冗談だったのか？冗談で人を殺してくれと言ったのか？」

「……………そんなわけねえだろ。ああわかった。10万な。受け取ったからには絶対に殺せよ。受け取って途中で投げ出したら、ぶっ殺すぞ。ああ後、俺に責任がくるような事はやめてくれよな」

「ああ大丈夫。ここはアフターサービスも万全なんだ。そして君に言われなくても、絶対に殺してやるよ。君の母上をね」

俺はサトウから10万円を受け取った。これにて取引完了。あとはありすちゃん頼りだねー。

その後、サトウの「母親がいかにダメで殺すに値するか」という話を聞き流していると、二階からありすちゃんと栞君が下りてきた。ありすちゃんの服装はゴスロリと呼ばれるものだった。まあ似合ってるけど……………栞君の趣味ってよくわからないなあ。

3・鼎栞

「あ、そのこの交差点右でよろしくー」

私は無言で右にハンドルを切った。

今現在私は少年の家に向かっている。当然車だ。歩いて30分くらいの距離らしいのだが、雨も降っているというのに歩く程私は自分の健康を気遣っていないし、自分の体を痛めつける趣味もない。というわけで、車での移動。助手席に少年。後部座席にありすを乗せている。社長はやることがないので、留守番。少年の家に向かう理由は当然、少年の母親を殺しに行くためなのであった。

「しかし、本当にこんなガキが人を殺せんのかよ」

少年は後部座席を見ながらそう言った。私もバックミラーで確認して見ると、ありすは目をつぶって眠ろうとしているようだ。まあいつもならこの時間帯はお昼寝の時間だから仕方ない事だ。しかしゴスロリが似合う子どもだ。そのゴスロリの服が少々ボロボロなのがちょっとよろしくないが、まあ、黒いレースの手袋もあったし、うん。選んで正解だった。着物にしようかと悩んだけど、うん、さすが私。

「社長が言った通りです」

少年はありすを見た時にも、そう言っていた。それに対して社長は、子どもだからこそ殺しやすい。この子はそういう教育を受けているので大丈夫だ。と、なんかペラペラと色々喋って少年を納得させていた。ありすは欠伸をかみ殺しながら眠そうにそれを聞いていた。私はカッターが1本無くなってるなー。と思いながら聞いていた。

結果少年は納得した。どうやら社長の「子どもの方が残酷だ。君だってそれは知っているだろ？」という言葉が決め手だったようだ。「まあいいけどよー。しかし、あれだなー。こんな子どもに人を殺させるなんて、あんた達、どうかしてるな」

実の親を殺してくれと頼んだガキに言われたくない。ほんと、いけ好かないガキだ。死ねばいいのに。

でも私は優しい人間だから、忠告しておいてあげることにした。

「今ならまだ、やめる事もできますよ」

「はあ？」

「母親が死んだ後どうするんですか？そこをちゃんと考えてますか？生きていけるんですか？お金は？住む場所は？学校は？」

「はっ、あんなババアがいなくても俺は生きていける。一人で何でも出来るさ。逆に、あのババアが活着ている方が生きづらくて仕方が無い。あいつが死ねば、俺は今より幸せになれるんだよ。余計な心配ありがとう、でも、余計なお世話だよ？お姉さん」

「人を殺すのはよくないことです。それを知っていますか？」

「お姉さんこそ知らないわけ？そんな綺麗な事さ。殺すのがいい事になる時もあるわけ。そして死ぬべき人間っているんだぜ？俺の母親がまさにそれさ。お姉さんはあのババアの事を知らないから、そう言えるわけ」

そう言つて、少年は「母親がいかにダメで殺すに値するか」を楽しそうに喋り始めた。母親がどれだけダメで最低で失格で、自分がどれだけ正しいかを延々喋り続ける。

私はもう忠告したので、それ以上何も言わず黙つて車を走らせる。バックミラーを見ると、ありすが眉間に皺を寄せて、不愉快そうに目をつぶっていた。きつと少年の語る身勝手な言い分が聞くに堪えないのだろう。私も似たような気分だった。

そんな私たちにお構いなしに喋り続けるガキ。たまに道を指示して、また喋り続ける。少年の住むボロアパートに着くまで、少年は喋り続けた。

少年が住んでいるのは二階建ての外見からわかるくらいボロアパート。おそらく風呂なしだろう。隣の部屋の物音が聞こえない方がおかしい。というくらいボロさ。少年の話によると、家賃は一月一万。住んでいる奴らのほとんどが日中は部屋にいて、ゲータラしているダメな奴らしい。何でも、このアパートでダメじゃない奴は自分だけらしい。

「アリスガワ、やり方はわかってますか？」

ボロアパートの横に路上駐車中の私は、車から降りたありすにそう尋ねた。私は車から降りない。ありすを置いたらすぐ戻るからだ。そして仕事が終わったら戻ってくる。少年の話によると、母親は19時に帰ってくるらしい。今は16時。三時間後に戻ってくればいいということだ。

ありすはこくと頷き、先に行った少年が待つボロアパートの方にとことこ歩き始めた。

ゴスロリ衣装でビニール傘を持っているありすを見て、シユールだなあ。と思った。

4 .

少年とありすは、狭い畳の部屋で対角線上に座っている。

少年の家は、1Rで狭く汚かった。荷物もほとんど無く、部屋を見れば、ここに住んでいる者が苦勞している事がわかるようだった。ありすは何も喋らない。ただ黙って部屋の隅で、目をつぶりながら体育座りで俯きがちに座っている。

じーっと。座っている。何かを待つように。じーっと。

少年は、肩膝を立てて座っている。

「おい。お前ほんとに人を殺せんのかよ。」

少年はありすを睨みながら、そう聞いた。

「……………」
ありすは目を開け、一度少年を見た後、何も言わずまた目をつぶった。

その、話すのも面倒。というような態度が癩に障ったのか、少年は舌打ちをして立ち上がり、ありすに近づき胸倉を掴んで無理やり立たせた。ありすは抵抗せず、少年の目を見つめる。

その目には苦悶の色も懇願の色もなく、何の色もなく、少年を見つめている。ありすの、なんでもないうようなその態度が、少年をさらに不機嫌にさせる。

「あんまり舐めた態度取ってんじゃねえぞ。俺はな、ガキが嫌いなんだよ。わかるか？ 何にも知らないガキがだいつ嫌いだ。本当ならてめえを部屋にいれるのも嫌なんだよ。なのになんで俺が、我慢してお前をここにしている事を許してるかわかるか？ お前があいつを俺の代わりに殺すから、入れてやってんだよ。たけえ金払ったんだよ。わかるか？ つまりお前は俺に買われてるようなもんなんだよ。わかるか？ 俺はお客様だ。だから、あんまりふざけた態度取って

んじゃねえよ。とりあえず、俺の質問には答える。お前は、ほんとに、人を、殺せるのか？」

少年のその問いに、ありすはただ一言。

「殺せます。」

なんでもないように、そう言った。

少年は、ありすのその、気負ったわけでもなく、ただ事実を告げるかのように言った言葉を聞いて、息を呑んだ。

少年は一度舌打ちをして、ありすの胸倉を掴んだまま、ありすを壁に押さえつけた。

ありすは苦しそうに顔を歪めた。その顔を見て、少年は満足したのか、ありすを離れた。

「ならいいんだよ。なら我慢してやるよ。お前のそのふざけた格好も、許してやるよ。」

少年はありすにそう言っつて、元の座っていた場所に戻った。

ありすは何も言わず、何事もなかったかのように、衣服の乱れも直さず、また目をつぶり、体育座りで座った。

二人はその後、一切会話をしなかった。

少年は、一方的に母親の話をし、ありすは目をつぶって、じーっと待っていた。

少年の母親が帰ってくるのを、じーっと。待ち続けた。

5・鼎菜

「ただいま戻りました」

「見ればわかる。おかえり」

私がありすを少年の家に置いてきて戻ってくると、社長はルービツクキューブで遊んでいた。しかし、その手つきと不機嫌そうな顔から、色を揃える気がないのはすぐにわかる。

社長がルービツクキューブをしている時は、たいてい不機嫌な時だ。私は、経験上知っている。

だから私は、何遊んでるんですか。とは言わず、机の上に置きっぱなしだったカッターを引き出しにしまい、パソコンのワードを開いて、報告書もどきを打つ。

「栞君は、あいつの事どう思った？」

社長がルービツクキューブをしながら話かけてきた。だから私も、パソコンを見ながら答える。

「ガキですね」

私のその答えを聞き、社長が嘲笑を浮かべた気がした。

「簡潔でストレート。全くもってその通り。ガキだ。なのに、大人を馬鹿にする。いや、ガキだから大人を馬鹿にしているのか。まあどうでもいい。とりあえず、むかつくガキだ。ちっ、地獄に落ちねえかなあ」

社長も一般的な大人から見れば、ガキみたいなもんですよ。と、言ってやるうかと思っただがやめておく。

「栞君。ありすを迎えに行く時、タオルを忘れずに。もしかしたら汚れてるかもしれないから。まあたぶん大丈夫だと思うけど」

ルービツクキューブを社長は乱暴に回している。やっぱり不機嫌だな。

「わかりました」

「しつつかし、まあ……」

はあ。と、社長はため息をつく。

「ああいう奴の依頼も受けなきゃいけないなんて、ほんと、嫌になる。あいつが女子高生なら、まだよかったよ。気分的に。モチベーション的に？ ほら、橘さんだっけ？ あの時は頑張ろうと思ったよなあ」

その時を思い出しているのか、社長は乱雑にルービツクキューブを回しながら中空をぼんやり見ている。

私はワードから、その時の報告書もどきを引っ張り出す。

『依頼人：女子高生。橘明美。気が弱く、引っ込み思案。インドア派。家族は両親と姉がいるらしく、姉は自分とは正反対の性格らし

い。姉のことを尊敬しているらしい。自分からそういう事を言うのは、普通なのだろうか。』

『依頼内容：下着泥棒を捕まえて欲しい 珍しく妥当な依頼。下着が盗まれるらしい。姉の下着もたまたま盗まれるが、たいては自分の物だけが盗まれるらしい。母親の気持ちは複雑だろう。』

『備考：依頼料金は、社長が女子高生で可愛いからという事で、格安にした。1000円。馬鹿かと思った。犯人は見つけたが、警察には届けなかった。』

む。読み返してみたが、これは報告書として何か間違っている気がする。肝心の仕事を行なった過程が書かれていない。まあもどきだからいいか。私の趣味みたいなものだし。

「あの時の犯人って、誰だっけ？ お父さんだっけ？」

「どうやらうる覚えらしい。というか、お父さんって。そんなわけないだろ。」

「依頼人の姉です」

「ああ、そうだった。懐かしいなあ。あの時俺は、女性も下着に興奮するんだな、と思ったのさ。ほら、下着泥棒ってたいい男だろ？ 盗むのも女性の下着だし。女性にはそういう気持ちはないと思っただけだけどさ。あるんだねえ。まああの子の場合は、妹の下着限定で興奮してたわけだけど。栞君も、そういう気持ちわかる？」

「社長、セクハラって知ってますか？」

私が社長を半眼で睨むと、社長はこっちを見ておらず、ルービックキューブをやる気なさそうに回していた。

「セクハラ？ なんだいそれは？ ロリコンの仲間かい？」

「違います。行き過ぎると捕まるという点では、仲間ですけどね」

社長はルービックキューブを回しながら、「ふーん」と空気のよくな返事をした。

その後社長はルービックキューブを回し続け、私はありすを迎えに行く時間になるまで、パソコンで遊び続けた。

3・4・ヒトゴロシ

6・見習ありす

「ただいま……」

女の人の声がした。目を開ける。眠い。

玄関に疲れきっている女の人が立っている。着ている服も、持っている袋も、疲れている。この部屋も、疲れている気がする。

「ほら、さつさとやれよ」

男の人が笑っている。誠とは違う笑み。嫌な笑み。言われなくても眠い。

「あなた、だれ？」

声も疲れている。目も疲れている。私も疲れてる。

「あの人に連れてこられた」

男の人を指差す。男の人は驚く。女の方は男の人を見る。眠い。

「龍也……どういうこと？」

「おい、人聞きのわりいこと言ってるんじゃないよ。さつさとやる事やれよ」

男の人はわたしを睨む。言われなくてもやってる。

「わたしは嫌だったのに、あの人に連れてこられた。わたしは嫌だったのに」

女の人を見ながら言う。涙目にはなれない。嘘泣きは難しい。

女の方はこつちを見る。疲れている目には、わたしがどう見える。

そういう風に見えたら嬉しい。この服のボロボロがそう見えたら嬉しい。見えなかったら。面倒。カッターがあればよかったのに。

「龍也……あなたまさか……」

そう見えたらしい。頭も体も心も疲れてる。

「ちげえよババア！！ てめえも何言ってるんだ！ さつさとやる事をやれよ！ いまさら出来ねえとか言ったらぶっ殺すぞ！？」

男の人が近づいてくる。服を掴まれる。そして頬を叩かれた。痛い。痛かった。痛いから、泣ける。だから、泣く。泣く。叫ぶ。泣く。泣く。叩かれる。痛い。もっと泣く。叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。

「やめなさい！」

女の人が間に入ってくる。男の人は離れる。わたしは泣き続ける。「龍也：自分が何をしたかわかっているの!？」

女の人が痛そうな声を上げながら。男の人を殴る。

「私がつ！ どれだけっ！ 頑張っつ！ あなたのためにっ！ 頑張っつると思っつるのっ!？」

女の方は泣きながら殴る。殴る。殴る。それを見ながらわたしは泣く。もつと。もつと。泣く。

「違う！ 俺は何もしてねえ！ あのガキが！」

「言い訳なんて聞きたくないっ！ あんたはっ！ どうしてっ！

私がつ！ どれだけっ！ 私がどれだけっ！ あなたのためにっ！

それなのにつ！ あんたはっ！ あんたは!!！」

「どうしたんですか!？ 川島さん!？ 何があっただんですか!？」

ドアが叩く音がする。やっと来た。もう少し。泣く。泣く。助けを求めているように聞こえるように。もつと泣く。

女の方は男の人にのつかで。男の人を叩くのに忙しい。外の声は聞こえてない。疲れているのに大変そう。だからもつと泣く。男の人を叩くのを応援するように。もつと泣く。

「どうしたんですか!？」

ドアが開いた。男の人が数人入ってくる。男の人たちにはどう見える。そういう風に見えたら嬉しい。

「いい加減にしゃがねババア!!！」

男の人が女の人を自分の上から蹴り飛ばす。だからもつと泣く。男の人達に教えるために。

「なっ、てめえら何しやがる!! 離せこのクズが!!！」

男の人が数人の男の人達に取り押さえられる。だから泣く。

「暴れるなこの犯罪者!!！」

「ロリコンめ！」

暴れる男の人を必死に取り押さえている。わたしはそれを涙で滲んだ視界で確認する。泣きながら立ち上がる。女の人が人形みたいに動かない。ただ、涙を流しているから人形じゃないとわかる。その涙も疲れている。女の人に近づく。囁く。

「死んだら疲れないよ」

わたしは泣きながら部屋から出る。誰も気づかない。泣きながら階段を下りる。敷地から出る。雨に濡れる。泣くのをやめる。傘を忘れた。取りに行くのは面倒。周りを探す。菜の車を見つける。その横に菜も立っている。こっちに気づいた。手を振ってる。眠いしお腹が空いた。今日の夜ご飯は、なんだろう。

7・鼎菜

車の脇で待っていたら、ありすがアパートから現れた。手を振ると、こっちに気づいたのか、とことこ歩いてくる。走れよと思わなくもない。

「ちゃんとできましたか？」

「たぶん……」

ありすを助手席に乗せて、この場を立ち去る。

「はいこれ。髪とか拭きなさい」

信号で停まったので、眠そうに目を擦っているありすに、持ってきておいたタオルを手渡す。ありすは髪をおざなりに拭く。やはり傘は忘れてきたようだが、ビニール傘だから別にいいか。

「どこか怪我とかしてませんか？」

見たところ、頬がちよつと腫れているくらいか。唇の端が切れているかな？まあそのくらいだが、見えないところが怪我している可能性もなくはない。

「だいじょうぶ……」

力の無い声で少し心配になる。横目でありすを見ると、タオルを

握り締めながら、眠る体勢に入っていた。どうやらただ単純に眠いらしい。よほど疲れたのだろうか。報告は後で聞けばいいし、静かに寝かせてやることにする。

「今日のご飯は……？」

っと思っただら話しかけてきた。ほんとにこの子は食べるか寝るかくらいにしか、興味がないうようだ。

「社長が、お金も入った事だし、どこかに食べに行こうと言ってましたよ。何か食べたい物がありますか？」

私的には、寿司が食べたい。

「ハンバーグがいい……」

「……わかりました。じゃあ、ファミレスでいいですね」

残念。まあ、今回はありすが稼いだようなものだから、我慢する事にする。

今日の夕食が何かわかって、安心したのか、ありすはすぐに寝息を立て始めた。

私はそれなりに安全運転で、事務所に向かう。途中、パトカーがサイレンを鳴らして横を通り過ぎたが、ありすがその音で目覚める事はなかった。

8 .

それから一週間後。その日も雨だった。茶柱誠はソファアに座って、ルービックキューブをカチャカチャと回している。部屋には茶柱誠以外はいない。

茶柱誠が一心不乱にルービックキューブを回し続けている。するとドアが勢いよく開いた。いつもは鍵をかけてあるはずだが、今日は鍵を開けておいたようだ。

入ってきたのは少年、本名川島龍也、仮名サトウユウヤ。一週間前に来た時とは違い、軽薄な笑みをしてはいない。少年はびしょ濡れだ。傘を持っていないことから、傘をささずにやってきたようだ。

目が血走っていて、憔悴している。

「やあ少年！ 待っていたよ！ いやあ、もう来ないかと思っていたよ！ さあ座りたまえ！ 話しをしようじゃないか！」

茶柱誠は、ルービツクキューブをソファアに置き、楽しそうに笑う。

少年は茶柱誠の言葉には耳を貸さず、その部屋にあるもう一つのドアに向かう。ガチャガチャとドアノブを回すが、ドアには鍵がかかっていて開かないようだ。

少年は血走った目で茶柱誠を睨む。

「おい。ここを開ける」

少年は茶柱誠を脅すかのように、どすの利いた声でそう言った。

茶柱誠はその言葉を受け、さらに笑みを深くする。

「どうしてだい？ そっちには誰もいないよ？」

「じゃああのクソガキはどこにいるんだよ！！ ぜってえに許さねえ！！ ぶつ殺してやる！！」

少年はソファアに座っている茶柱誠に詰め寄る。懐からカッターを取り出し、茶柱誠の目の前に突きつける。そのカッターは、一週間前に茶柱誠が渡した物だった。よく見ると、少年の服装は一週間前と同じだ。着替えていないのかもしれない。

茶柱誠はカッターを突きつけられても動じず、座ったまま笑みを浮かべている。

「おいおい物騒だな少年。落ち着けよ。そんな危ない物を持ち出して、俺を殺そうってのか？」

「ああ、てめえがあのがきがどこにいるか言わなかったらそうなるな」

「さつきからガキガキって、一体誰のことを言ってるんだい？ 世の中ガキは一杯いるからねえ」

「俺をロリコンに仕立てあげたあのふざけたガキだよ！ あの後俺がどれだけ恥をかいたと思ってんだ！」

「そのくらい別にいいだろ。喧しいガキだな。人を殺してもらった

んだから、そのくらい我慢しろよ」

茶柱誠は笑みを消し、静かな声でそう言った。茶柱誠のその変化に、少年は動揺して、茶柱誠から距離を取る。

「死んだろ？ お前の母親。お前の依頼通り。お前の母親は死んで、お前は捕まっていない。依頼達成だ。残りの金を払えよ。十万円だ」

「…………… ああ、死んだよ。自殺した。首吊ってた。遺書には疲れたって書いてあった。それだけだ。他には何も書かれてなかった」

少年は舌打ちをする。苛立っているようだ。

「それはよかったじゃないか。邪魔な母親が死んでほんとによかったな」

「…………… ああそうだな。よかったよ。清々したさ。あんな奴が死んで、俺は自由だ。そこまではいい。別に問題ねえよ。問題は、俺がロリコン扱いされて嘘つき呼ばわりされて、果ては警察の事情聴取まで受けた。これはどういうことだ！？ ぜってえ俺はあのガキを許さねえぞ！！」

「さっきからお前は何を言ってるんだ？ ちゃんと仕事をこなしたアリスガワ君を、どうしてそんなに恨んでいるんだい？」

「…………… どうしてだと？ そんなの当たり前だろうが！！」

少年は茶柱誠の安い挑発に簡単に引っかけかり、茶柱誠の胸倉を掴んだ。

「あいつのせいで俺は犯罪者扱いだ！ 噂はすぐに広がったよ！

俺がロリコンでガキを連れて込んで？ それを知った母親がシヨックで自殺した？ ふざけんなよ！！ しかも警察は俺の言葉を信じやしねえ！ 俺がこの場所の話をしても全く信じねえし！ 狂ってやがるよてめえらは！！」

「…………… はあ」

茶柱誠はため息をついて、自分を掴んでいる少年の手を掴む。

「っ！？」

少年はソファアに叩きつけられた。少年は自分がどうなったか理解できていないようだ。自分が投げられたという事はなんとなくわ

かったが、どうやって投げられたかが、全く理解できない。

「狂ってるって？ 今頃気づいたのかよ。人を殺すのを二十万で請け負うところが、普通だと思ってたのか？ 窓がない建物が普通だと思っただのか？ 普通じゃないに決まってるだろ。この場所は、普通じゃない。当然だろ？ いまさら何を言ってるんだよ。おいおい、そんな目でこつちを見るなよ。むかつくなあ。殺してやるうか？」

茶柱誠は、少年が持っていたカッターの刃は力チ力チと出す。少年は自分がいつ、そのカッターを取られたか全くわからなかった。ただ、何か得体のしれない恐怖を感じた。

だから少年は、逃げるように部屋から出て行った。

結局茶柱誠は、少年が来てから帰るまで、ずっとソファに座ったまま、立ち上がる事はなかった。

9・鼎菜

そろそろ頃合かと思い、二階から一階に下りてみる。

「やあ、菜ちゃん。ナイスタイミング。ちょうどお客様が帰ったところだよ」

ということらしい。ナイスタイミングだ。さすが私。

「菜ちゃんは却下です。そうですね。ちゃんと残りのお金は貰えませんでしたか？」

席に座りパソコンを立ち上げながら尋ねる。

「いや、ダメだった。あのガキ意味不明。だからガキは嫌いなんだよ。子どもは好きだけどね」

そう言っ社長がルービックキューブを放り投げてきた。私はなんとかそれを受け取る。色が揃ってる。すごいなと普通に思う。しかし、やっぱり金はダメだったようだ。期待はしていなかったけど、残念であることには変わりはない。

「それあげるよ菜君。飽きた」

「いいません」

「じゃあ、ありす君にあげてよ。そついや、ありす君は？」

「夢の世界です」

社長と会話しながら、ワードを開きいつものを書く。

『依頼内容：人殺し 馬鹿』

『備考：依頼料金二十万。だったが結果十万。満足するしかない。

今回はありすが仕事を行なった。子どもなりに頑張ったようなので、ショートケーキを買ってあげた。出費はドアに鍵をつける費用。木目さんに頼んだら千円で済んだ。外すときは二千円らしい。よくわからないが、格安だから別にいい』

「ああ、あとこれ。栞君のカッターを回収しといたよ」

さすがにカッターを投げてくることはなかった。机の上に置かれているカッターを確認する。確かに私のカッターだ。

「汚れてませんか？」

汚れてたらただじゃおかない。

「大丈夫。未使用みたいだから。全くあのガキ。俺がどうしてカッターを渡してやったか、全然気づいてなかった」

社長は嘲笑を浮かべている。

「ありす君に渡せば、自分がロリコン扱いされる事もなく、ただの可哀な被害者になれたのにねー。自業自得だ」

社長はなんでもないのでそう言った。

だから私も、なんでもないので聞き流した。

3・4・プログラミン(後書き)

これは酷い……。

更新スピードが落ちることをここに宣言しておきます。

4 / 2 5

3・？・エピソード・人形の救済

おいこらてめえちよつと待て！

そうだよ。お前だよ。お前。命からがら逃げ出しましたみたいなお前だよ。

そうだよ。あたしだよ。あたしが喋ってるんだよ。なに悲鳴あげんの？馬鹿じゃないの？人形が喋らないと思つてたの？馬鹿じゃないの？ねえ馬鹿じゃないの？

え？なに？人形が喋るなんて狂ってるって？あははは！そうね。そうね。狂ってる。確かに狂ってるかもね。

でも。人形の声が聞こえてるあなたも狂ってるんじゃないの？

喚かないですよ。鬱陶しいな。あ。でも行かないでね。あなたがいなくなったら。あたし寂しくて泣いちゃうから。くすくす。

聞いてたわよ。え？何をつて。中での会話。

どうやってつて。そんなの別にいいじゃない。聞いていた。というのは本当なんだから。

おもしろかった。とってもおもしろかった。誠もなかなかやるわね。あたしはとてもおもしろかった。まあ。1番おもしろかったのは。あなただけだね。

聞いてたわよ。あなた。ありすを殺したいんだって？しかも。その

理由が。自分勝手。そこが気に入ったわ。

どういう意味かって？だってね。普通ならここはね。親を殺した敵みたいな動機で殺そうとするのよ。普通ならね。なのにあなた。一度も。それを言わなかった。そこが。気に入った。

はいはい。そんな大声で喚かないで。当たり前のことを大声で喚くほど。惨めなことはいわ。

そろそろ本題に入りましょうか？そう。本題。あたしが話しかけた理由はね。あなたを助けてあげようと思って。そう。助けてあげるほんとはね。籠を振り回してくれたお礼をしようと思ってただけ。気が変わった。助けてあげる。

ほら。悩み事を言っただけで御覧なさい。ここはね。どんな悩みも解決してくれる。不思議な場所なのよ？ああ。でも。いまからあの部屋に戻って。自分を助けてと依頼するのはやめたほうがいいわ。だってすごいお金取られるわよ？知ってる？人を殺すより。人を助ける方が。何倍も大変らしいの。だから。何倍も高いお金を取るらしいの。あたしは人形だからわからないけどね。さあ。話して御覧なさい。あなたの悩みを。

ああ。なるほど。つまり邪魔な人間はいなくなったけど。生きづらくなつたと。今の状況をどうにかしたいと。具体的に言っと。ロリコンじゃなくなりたいと。そして。自分を信じなかった奴らに。自分を嘘つき呼ばわりする奴らに。復讐したいと。くすくす。

あ。ごめんなさい。ちよつと笑っちゃった。ええ。いいわ。その依頼。あたしが受けてあげる。

でもね。その前に。依頼報酬をもらうわ。ああ。安心して。お金は
いらぬから。人形にお金なんて。必要ないから。

あたしが頼みたいのはね。この籠から出して欲しいの。ね？簡単で
しょ？ほら。そこに扉があるでしょ。そこにね。鍵がかかっているの。
内側からじゃ開かないからね。あなたに開けて欲しいの。ほら。そ
このつまみをくるって回せば開くのよ。簡単でしょ。ねえ？お願い。
早く開けてよ。そうすればね。すぐ助けてあげる。ええ。簡単よ。
あなたを助けるなんてね。そのつまみをくるつと回すのと同じくら
い簡単なの。だからほら。早く早く。早くしてよ。何を迷ってるの
？早くしてよ。くるつと。くるつと。くるつと。早くしろ！！

何してんだよ早く開けるよこのグズがてめえみたいなグズな人間は
さつさとあたしの言う通りにすればいいんだよそうすれば救ってや
るよ助けてやるよ殺してやるよ！！

ああ。行っちゃった。あともう少しだったのになあ。残念。

ああ。早くここから出たいなあ。自由に歩きたいなあ。自由に喋り
たいなあ。自由に人間に会いたいなあ。

ああ。早く誰か来ないかなあ。あたしの声が聞こえる人が。早く来
ないかなあ。．．．

4・0・プロローグ・カワイイ人形

さつきからなにじろじろ見てんのよ。

「たっちゃんどうしたの？ 早く行きますよ。」

なにあなた。たっちゃんっていうの？ なかなかいい名前じゃない。くすくす。大切にしなさい。

「あら。可愛い人形ね。この子が気になるの？」

ふーん。わかってるじゃない。あたしは確かにカワイイものね。くすくす。ところでたっちゃん。あたしの声聞こえてるでしょ？

「たっちゃん。行くわよ。もう、そんなにその人形が気になるの？」

やっぱりね。まあいいわ。もう少しゆっくりお喋りしたいけど。今はダメみたい。後でゆっくり話しましょうね？ あなたが。もしくはそっちの人の。悩みが解決した後に。ね？

「行きますよ。お母さんは時間が無いんだからね。ほら、お人形さんにバイバイしましょうね。」

バイバイ。たっちゃん。また後でね。

4・0 プロローグ・カワイイ人形（後書き）

ゆっくり更新しよ。

4 - 1 子供も大変

0 鼎菜

「……………」

私がこの会社（というには少々へんてこりんだが、会社以外に当てはまる言葉もないので会社と呼ぶしかない。名前がないのは全くもって不便である。事務所でもいいかと思わなくもない今日この頃である。）に就職（というよりは流れ着いたというか導かれたというかなんか気づいたらここにいたという表現の方が正しい気がするがなにぶん説明するのが難しいので就職でいいや）した時にはすでに、ありすはここに住んでいた。というか働いていたのだが、一日の大半寝ているんだから働いているというよりは住んでいるというほうが正しいに決まっている。もちろん社長もいた。まあつまり、ありすは私の先輩にあたるわけである。とはいえ先輩として扱う理由がないし、そういうの苦手だし、年下なので子供として接している私は何も間違っていない。

つまり何が言いたいかといえば、子供として扱ってる私は、先輩だからといってこのオセロに全力で挑んでも問題ないというわけです。

「菜ちゃん弱い……………」

「菜ちゃん言うな」

「ふぁ……………」

あくびで返事しやがってこのガキ。とは思っても口に出さない私は大人です。睨んでるのは気のせいだ。

現在時刻は午前十一時くらい。社長は、隣の家の犬がワンワンキヤンキャン喧しいからどうにかしてくれ。という依頼を解決に行っているので不在。そして私たちは、今現在一階ソファで、オセロに勤しんでいる。

なぜこんなことになっているかというとお互い暇だからだ。

1・鼎菜

私がいつも通りマインスイーパーに勤しんでいたところ、ありすが二階から下りてきた。パジャマ姿である。いつもありすは十時くらいに起きて、十三時くらいに昼寝して、二十時くらいに寝るといふ健康優良児である。ほぼ一日中ベッドの上で眠りこけている健康優良児である。大人だったら引きこもりのニートと侮蔑の目で見られるだろうに。子供っていいな。

「おはようございます。昼食なら三階ですよ。それとも朝食ですか？」

「おはよ。別に、お腹空いてない」

まあそうだろう。お腹が空いているなら、ありすは最初から三階に行くはずだ。

三階は社長の部屋となっており、まあ、窓がないということ以外は普通の部屋だ。キッチンっぽいものがあるので、社長はそこでありすの朝食やら昼食やら夕食やらを用意するわけだ。一階にもコンロと小さい冷蔵庫はあるが、料理はできない。

「誠は？」

ありすはソファアに座った。何か持っている。なんだろう。ポードっぽい。

「仕事に行ってます。今頃犬と戯たわむれてると思いますよ」

「ふーん……」

社長の不在を知り、ありすはソファアに横になってしまった。寝る気か？ じゃあ二階に行きなさい。まあ別にいてもいいけど。

ありすと社長はここに住んでいる。私はマンションで1人暮らしだ。気が楽だぜ。

『この子はありません。あー、見習い……うん。見習あります。子供だけと仲良くしてやってねー。で、彼女は菜ちゃん。女の子同士仲良く

「してやってねー」

社長はありすをこんな感じで紹介した。それ以上の紹介はされていない。偽名つばいなあと思い、栞ちゃん言うなと言った。

事情はわからないが、社長がありすの面倒を見ているわけだ。学校に通っていないので、家出かなあ、もしかしたら戸籍すらないのかもしれないなあと思ったこともあるが、まあどうでもいいかという感じである。

「栞ちゃんはなにしてるの？」

「仕事してます。というか、栞ちゃん言うなと何度言ったらわかりますか？」

「仕事って、なにしてるの？」

無視かよ。しかし私は大人だから無視仕返すという仕打ちは行なわない。

「地雷処理です」

「それ、遊んでるってことですよ……」

む。心外だ。世界平和は私の左クリックにかかっているといっても過言ではない。

「暇ならオセロしよ」

ありますがソファアの肘掛に顔を乗せてこっちを見てくる。子供特有の眼差しだ。卑怯極まりない技である。

まあ、地雷処理にも飽きてきたから別にやるのもやぶさかではない。

「わたしの勝ち」

「……………」

というわけで二回戦目も私の負けであった。退屈そうにあくびをするありすをじと目で睨む。

一回戦目は、僅差だったのだ。後もう少しで私が勝てたのだ。というわけで再戦を申し込んだ。ありすは一回で飽きたのか、もう寝るといいやがった。勝ち逃げを許す私ではない。おやつケーキを

エサに二回戦目を承諾させた。

「おやつシヨートケーキもらっね」

その結果がこれである。ほぼ全部黒。ありすのくせに生意気だ。

「……もう一回です。ありす。先に三回勝った方の勝ちと言ったはずですよ？」

「言っていない」

「言っていない」

「いいえいいいました。さあもう一度です。」

私は勝つまでオセロをやめない。シヨートケーキを諦めない。

ありすが露骨に嫌そうな顔をしたがそんなことを気にする私ではない。コマを片付けて分配して、初期配置。

「さあ、やりますよ」

「眠い……」

「……」

こんなやる気がない子供に負けない。内なる闘志を燃やしている。

ピンポン

チャイムが鳴った。来客だ。これは好都合。

「ありす。お客さんがきたから勝負はお預けです。仕方ないですね。今回は引き分けという事にしておきましょう。勝負がまだついていないのだからそうなるのは当然です。仕方ないですよ。というわけで、ケーキはあげません」

勝利よりケーキが大事。私はありすにそう言って、オセロを手早く片付け、ドアを開けに向かった。

「大人つてずるい……」

後ろからありすの眠たげな声が聞こえた。

今頃気づいたか。

ドアを開けながら、心の中で勝ち誇ってみた。

4 - 2 ・子供も大変

2 ・ 鼎菜

「どうもすいません。急にお伺いして」

「いえ。かまいませんよ。どうぞこちらに」

ドアの向こうには女性と子供、おそらく親子、がいた。母親はだいたい30代後半くらいだろうか。夫の稼ぎが少なくて、ホント困るわ。そのくせ家事は手伝わないし。もうホント困っちゃう。と、パート仲間に愚痴っついていそうな人だ。リュックサック装備の男の子は、保育園の年長くらいだろうか。今日は平日、しかも昼間、なので小学生ではないだろう。たぶん。教室の隅で一人折り紙で遊んでいて、保育士さんに「楽しい？」と聞かれたら返事をせずに頷くだけのタイプな気がする。

「あの、この子は？」

パジャマ姿のありすを見て、母親が困惑したように聞いてくる。会社に子供がいたらビックリするのも仕方がない。しかもパジャマならなおさらだ。

「ああすいません。ありす。二階に行つてなさい」

「ふあ……」

ふあ。じゃねえよと言ってやりたい。どうやら動く気がないらしい。さっきのことを根に持っているのだろうか。しかしショートケーキは渡さない。

「いえ、別に私は気にしませんので。綺麗な子ですね。あなたのお子さんですか？」

「どうもすいません。この子は……社長の子です」

親子をソファアに座るように促しながら、ありすを社長の子にしたてあげる。説明するのは面倒なのでこれがベストである。ありすが睨んできたが気にしない。

「あ、今お茶を用意しますね」

社長がいないので私が全てやらなければならない。面倒だ。ariusは働く気がないようで、目を眠たげに擦っている。最初から期待はしていないので、怒る気にもならない。

「いえ、急いでいますので。それで、あの、ここはなんでも屋と聞いたんですけど」

急いでいるらしい。先ほどから腕時計を気にしていると思ったらそういうことか。

「ええそうです。ここは、人の悩みを解決する場所ですので、なんでもやります。失礼ですが、どこでこの場所のことを？」

宣伝していないので、これ、結構気になる。この人は人形パターンではないと思うし。

「その、近所で噂になってまして。ここの場所の事が……」

申し訳なさそうに言うという事は、いい噂ではないのだろう。

ちなみに男の子は、キヨロキヨロすることもなく、じーっと自分の膝を見て、おとなしく座っている

ありすはあくびをしながら、つまらなそうに男の子を見ている。

眠いなら二階行け。

「そうですか。それで、ご依頼は？」

「ええその。この子を預かって欲しいんです」

そう言うって男の子の頭に手をのせる。うん。そんなことしなくてもその子だとわかる。ありすが男の子から母親に視線を移した気がしないでもない。

「預かって欲しい、ですか？」

「はい」

母親の話によると、私たちは共働きで父方の祖母と同居している。いつもは祖母が日中は面倒を見てくれているのだが、最近体調を崩し入院してしまった。この子は保育園には通っていないので、日中一人にするのは忍びない。というわけで、ここ四日は仕事を休んでいたが、今日はどうしても仕事にいかなければいけないらしい。近

くに頼れる親戚はおらず、近所の人も日中は仕事に出ているので頼れない。祖母は明日退院なので、今日だけでも預かって欲しい。とのことである。

「十九時くらいに迎えにきますので、どうかよろしくお願いします」
丁寧な頭を下げる母親。子供の頭も下げさせる。

「わかりました。ご依頼を引き受けます。」

「ありがとうございます」とまた丁寧にお辞儀されたが、そこまでされることじゃない。断る理由ないし。子供預かるだけだし。ありますが服を引っ張る理由がわからないし。

目でありすになんかようですか？と聞く。すると首を横に振ってきた。どうやらやめておけと言いたいらしい。声に出せよ。

「どうしてですか？」

小声で理由を聞いてみる。ありすは何も言わず私を見るだけ。私も見るだけ。すると、怒ったようにそっぽを向かれた。意味がわからない。ので、ありすは無視して依頼料金の話をすることにする

「それで、依頼料のことですけど」

「ああはい。いくらくらいなんでしょうか？ こういうことは、その、なにぶん初めてなもので」

「そうですね……」

悩み考えた結果。半日だから五千円ということにした。子供を半日預かるだけで一万円は、さすがに取りすぎだろうと思いき自粛した。このくらいの値段なので一括払いでお願いしたところ、先払いしてもらった。ラッキー。

「じゃ、たくみ。おとなしくしているのよ？ お母さん十九時に迎えに来るからね」

母親（名前を聞き忘れた）は、男の子、たくみ君にそう言って、仕事に旅立った。

結局たくみ君は、一度も顔をあげることはなかった。緊張しているのかな？

「菜ちゃんのバカ」

そしてありすは機嫌が悪かった。

「栞ちゃんでもないですしバカでもないです。何か問題があるんですか？」

「知らない」

そう言っておりすはむすつとした。機嫌が悪い理由が全くわからないので、気にしないことにした。

3・鼎葉

「というわけで、たくみ君。お母さんが来るまでここでゆっくりしててください。退屈ならそのソファで寝てもいいですし、本だけならそこにたくさんありますので、自由うにどうぞ。リュックサックはそこに置いておいていいですよ。トイレは二階です。ありすは……パジャマを着替えなさい」

たくみ君は私の言葉に頷いて、ありすはむすつとしながら二階に上がっていった。不貞寝する気か？ 理由は全くわからない。

私は、パソコンを立ち上げていつもの業務記録的な何かをつけることにする。これは仕事であり趣味なのだ。

『依頼人：女性30代後半。氏名は不明。男の子のリュックサックのネームに『ささきたくみ』と書かれていたので、名字は『ササキ』だと思われる。佐々木か笹木。どっちだろう。服装、髪型、物腰から、人付き合いはうまいと見た。なんとなく姑ともいい関係を築いている気がする。上司からも信頼されており仕事をよく頼まれる。それを同僚に愚痴っている姿が目につかぶ。しかしそれに反して息子是人付き合いがうまいとは思えない。父親に似てしまったのだろうか？』

『依頼内容：子供を預かる おとなしい子なら歓迎』

『備考：依頼料金五千円。十一時～十九時まで。八時間。時給六百円くらい。』

「……………」
時給六百円か……、やっぱり一万円でもよかったか？

私がかちかちとキーボードを打っている間も、たくみ君はソファに座ったままピクリとも動かない。萎縮しているのか緊張しているのか、それとも母親におとなしくしていると言われたからおとなしくしているのか。後者な気がするので、声をかけないでおく。前者だとしても、おとなしくしてくれている今の状況は万々歳だ。

今回の依頼は子供を預かるだけだ。面倒を見てくれとは言われていないので、例えたくみ君が退屈で死にそうだとしてもあちらからアプローチがない限りは、私は最低限の世話をすればいいだけなのだ。わざわざ遊んでやる事はない。

最低限の世話。食事とか、トイレとか。トイレは自分でいけるだろう。食事は……どうするんだ？ あのリュックの中にお弁当が入っていることを祈っていいのだろうか。

「……………」
とりあえず十二時頃になったら聞くことにして、地雷処理に励む事にしよう。とか思っていたら、二階からありすが下りてきた。寝ないのか。珍しい。パジャマからワンピースに着替えたようだ。何しに下りてきたのだろう。

ありすは私を睨むように一瞥してから、とことこ歩き、たくみ君の向かいに座った。まさか遊び相手をしてあげるつもりなのか？ 珍しい。ありすが自主的に働くとは。年下好き？ それはないか。

「……………」
ありすは無言でたくみ君を見ている。見ているというより睨んでいるという感じか。たくみ君は自分の膝を見るのに忙しいらしくありすを見もしないので、睨まれているとは気づいていないだろう。ありすは自分の存在を無視された事に怒ったのか、机をバンバン叩きアピール。

たくみ君はありすに顔を向ける。眉根をよせている。君何してんの？ という感じか。

ありすは机の端っこに片付けて置いたオセロ盤を2人の前に置く。オセロやるうよ。という誘いか。そんなにオセロをしたいのか？
たくみ君はオセロ盤に目を落とす。なにこれ。と知っているに違いない。

ありすはオセロ盤をビシッと指差す。オセロだ。と教えているのに違いない。

たくみ君は小首を傾げる。わからない。ということだろう。

ありすはオセロ盤をバンバン叩く。そしてたくみ君を睨む。わかれよバカ。と怒っているのか？

たくみ君は首を横に振る。だからわからないって。それとも、オセロをやらない。という意味かな。

ありすも首を横に振る。そいつは許さない。という意味かな。私は思う。

君たち、意思疎通には口を使いなさい。口を。

4 - 3 子供も大変（前書き）

時間を置いたら、よくわからなくなっちゃった……

4 - 3 子供も大変

4 鼎菜

結局どうなったかというところ、私が『たくみ君。その子とオセロで遊んであげて』と言ったことにより、たくみ君とありすの不毛なやり取りは終結した。私がそう言わなければ、ずっとありすはテーブルを叩き続けていたかと思うと、なんだかなあ。という気分である。

私は地雷処理に夢中だったのであまり二人のオセロを気にしていなかった。二人がどんなオセロを繰り返していたかはわからないが、ありすの『弱い』という言葉が聞かなかった。おそらくたくみ君を私よりは強かったのだろう。実際にはらたしい。いやしかしオセロが強かったって大人の社会には何の意味もない言わばオセロが強いというのは子供社会にでしか通用しないステータスであり、私はすでに大人なのでオセロが強いとか弱いとか全く気にしなくてもいい、つまり私が言いたいことは別に悔しくもなんともないということである。というか逆に大人としては、子供にわざと負けるのではなく本当に負けているのだから、いい部類に入るのではなからうか。子供の自尊心を傷つけることなく子供と遊ぶことができるのだから。そうに違いない。

「菜ちゃん。何考えてるの？」

「何も考えてません。何か用ですか？」

よき大人について無駄に考えていたら、ありすが近づいてきていたことに気づかなかった。平静さを保つたためになんでもないように答えたら、ちゃん付けを容認してしまった。不覚。これは一生の不覚。ありすも、あれ？ ちゃん付け怒らないけどあれ？ というように私を見て首をかしげている。やはりこいつは私がちゃん付けを嫌がるその反応が楽しみで、菜ちゃんと言っていたことがここにきて判明した。社長の教育がなっていないからこんな子に育ったのだ

ろう。と思うことにより、その怒りを社長に向け、子供を叱らない私は大人です。

ありすは、まあそんなときもあるよね。という結論に達したのかはわからないが、首を傾げるのをやめ、部屋にある大きなのっぽの古時計を指差した。指差されたら見るのが世の常人の常。私は見た。「十二時ですか」

見た瞬間十二時になり、鐘が鳴る。さすがありすの名前を冠しているだけはあるって、時間とは相性がいいな。と一瞬思ったが、いや、そんなことはないか。こいついつも時間とか気にせず寝てるし。と思いついた。

「昼」

ありすが端的に用件を告げる。わかってるって。

「たくみ君は、お昼ご飯はどうするんですか？」

ソファーに座っている、というかここに来てから一歩も場所を移動していないあの子は、たくみ君に声をかける。というかこの二人はいつの間にオセロやめたんだ？ 全く気づかなかった。

テーブルの上のオセロ盤に注目したら、勝負の途中という感じで黒と白以外にまだ緑色が見えている。どうやらありすが昼になるからというわけで、唐突にやめたようだ。だって私、昼だからやめようね。という言葉聞いていないし。

「……………」

たくみ君は私の方を一度見て、こくと頷き、リュックサックを漁り始めた。そして、お弁当らしきものを取り出した。お昼はこちらで用意しなくてもいいようだ。ラッキー。

「じゃあ、お昼は問題ないですね。そこで食べてていいですよ。今、お茶を用意しますね」

水筒はないようなので、お茶くらい出してやるかという優しい私。まあ、自分のお茶を用意するついでなのだが。ここに来る前に、買っておいたコンビニ弁当を冷蔵庫から取り出し、チンすることにする。

さて、パソコンを落としてそういう行動を起こそうか。と思っ
ていると、ありすが服を引つ張ってきた。まだいたのか。

「どうしたんですか？ いつも通り三階に昼は用意してありますよ
？ ああ、社長ですか？ 昼までに戻ってこなかったら夕方に戻る
と思つて。と言つていましたから、まだ戻つてはこないと思ひます」

「……………」
無言でフルフル首を横に振るありすを見ても、私には何にもわか
らない。今日のありすは一体何なんだろうか。

「…………… 栞ちゃん使えない」

しばらく無言で見つめ合っていたら、そんな捨て台詞を残し、あ
りすは三階に行つてしまった。

「…………… ちゃんじゃねえですよ」

全くもつて今日のありすはよくわからない。まあ、いつものあり
すがわかるのかと言われれば、わからないのだが。

他人が考えていることはわからない。それは大人でも子供でも変
わらない。

5・鼎棊

「……………」

もしかしたら、本当にたくみ君に恋でもしたのかしら。そう思っ
てしまうほど、今日のありすの行動はおかしい。

三階にあがつて一人で食べるのかと思つたら、ありすはわざわざ
三階から、お昼（社長特性のサンドウィッチのようだ）を持ってき
て、細々で箸を口に運んでいたたくみ君の前に座り、食べ始めた。
そして私をジト目で睨み、「お茶」と要求してきたのだ。何様のつ
もりだと思つたが、お子様のつもりなんだろうなと思ひ黙つて入れ
てあげた。

別に一人で食べるのが寂しいというわけではないだろう。いつも
ありすは三階で一人で食べているはずだ。まあたまに一階で食べて

いるが、それは本当にたまにだ。今日は一階で食べたい気分なんだな。で、解決してしまつていいのだろうか。

まあ私が深く考えてもわからないものはわからない。別にいいかほつとこ。ありすがたくみ君の相手をしてくれるというなら、それはそれいいし。

私はコンビニで買った蕎麦を啜りながら、ありすとたくみ君の食事風景を観察する。

二人はお互いを気にせず、もくもくと食べている。いや、ありすはたくみ君を気にしているのかもしれない。サンドウィッチを食べながら、たくみ君のお弁当を注視しているようにも見える。たくみ君のお弁当はおそらく母親のお手製だろう。卵焼きやミートボール手作り弁当という感じが滲み出ている。羨ましいのか？ と思つたが、ありすが食べているサンドウィッチだって社長の手作りなのだから、羨ましが理由はないな。と思ひ直す。とはいえ、母親が作つてくれたお弁当と、赤の他人が作つてくれたお弁当には天と地の差があるとも考えられるが。

「……ん」

ありすに動きがあつた。たくみ君の前に自分のサンドウィッチを一つ差し出したのだ。どうやら、これをやる。という意味合いらしい。あの食べて寝るだけのありすが、自分の食べ物をあげるとは、よっぽどのことなのかもしれない。それこそプロポーズの指輪並みの意味があるのかもな。と、蕎麦を啜りながらテキトーに思う。

「………」

しかしたくみ君は無反応。差し出されたサンドウィッチを見てるだけ。あの母親はどういう教育をしているのだろうか。普通差し出されたら、くれるのかな？ と思うだろうに。たくみ君は、どうやら意地悪とかではなく、本気で、差し出されたサンドウィッチがどつという意味かわからないようだ。あの子も苦労してるのかな。と、お茶を啜りながらテキトーに思う。

「ん……」

ありすは、そんな反応のたくみ君に苛立ったのか、たくみ君の眼前にサンドウィッチを差し出す。テーブルを乗り出してまでやることか？ と疑問に思うのは大人だけであり、ありすにはありすの。子供には子供の理屈があつてやっているのだから、何にも疑問に思わないんだろ？ と、薬味を入れながらテキトーに思う。

「……………」
たくみ君はもはや、普通の男の子ではないと決まったようなものだ。首を傾げやがった。

「……………」
ありすが無言でこちらを睨んでくるが、それは私に助けを求めているのか？ それとも見てんじやねえよという意味か。私は後者を選択し、ありすから目を逸らす。そしてお茶を啜る。ホツとするね。

「……………」
ありすは、もういいや。と思つたのか、サンドウィッチをたくみ君のお弁当に置き、ミートボールを掻つ攫つていった。しかも二つ。まあサンドウィッチ一個ならそのくらいの価値はあるかもしれないが、とりあえず強奪である。許可を取るのを諦めて交換ではなく強盗にシフトしたらしい。

満足そうにミートボールのたれ(?)がついた指を舐めているありすを、たくみ君が恨めしげに見ている。わけもなく、たくみ君は不思議そうにサンドウィッチを見ている。ここまできても、ありすの行為がどういう意味だったのか理解しておらず、このサンドウィッチをどう処理するべきかわからないようだ。子供だな！。で流すわけにもいかないのかな？

「そのサンドウィッチはあなたにあげるといふことですよ。そうですね？ ありす」

仕方ないので私が助け舟を出す。このままでは、たくみ君がサンドウィッチの謎を解くのに夢中でお弁当を消費しない気がする。そうするとお弁当が残っていて、預け先で何があつたの！ ということになりかねない。面倒事はごめんだ。

たくみ君は私の言葉を受け、ありすの方を見てこくと頷き、サンドウィッチを食べ始める。私は感謝の言葉がたくみ君の口から出るとは思っていなかったが、ありす的には感謝の言葉がなかったのは許せないのか、たくみ君を睨んでる。しかしたくみ君がそれに反応するわけもなく、そうするとありすはまた怒りゲージが溜まり、私をなぜ睨む。

4 - 4 子供も大変（前書き）

7 / 17 後半追加。

4 - 4 ・子供も大変

6 ・鼎菜

「人魚姫は自分の美しい声を魔女に捧げました。そしてついに、人間になれる薬を手に入れたのです」

何度も言うが、今日のありすはおかしい。もしかしたら偽者かもしれない。私は人魚姫を朗読しながらそう思っていた。

昼食はありすのミートボール強奪以降はそれなりに無難に終わった。私は蕎麦を嚼りハンバーグ弁当を咀嚼し満足であった。お腹いっぱいである。ありすが「太る」と言ってきたが残念。私は太らないう体質なので問題ないのである。

たくみ君は案の定と言うかやはりというか、終始無言で昼食を食べていた。ごちそうさまも言わなかった。しかしごちそうさまなんて学校の給食以来私も言っていないので別に言わなくてもいいかと思わなくもない。

昼食を食べ終わったあと、私はまた地雷処理に精を出し、ありすとたくみ君は午前中と似たようなやり取りを行なったあと、またオセロを始めた。そこまではよかった。問題ない。ありすがどういう考えを持ってたくみ君と遊んでいるかはわからないが、私が相手をしなくていいというのは大変よろしいことだ。

そんな感じでのんびりとそれなりに平和な時間が過ぎ、午後二時になった頃に私に面倒が回ってきた。私もそろそろかなと思っていたのだ。このまま時が過ぎると思っていなかった。

その頃になると、ありすは眠いのか、首をカクンカクンとさせながらオセロをしていた。いつものありすならこの時間はお昼寝をしている時間なのだ。眠いのも当然だろう。ありすとたくみ君は二時間あまりずっとオセロをしていたわけのだが、飽きないのだろうかという疑問はナンセンスである。子供は楽しければ永遠に遊んで

いられる動物なのである。そういう噂だ。しかし眠気には勝てない動物でもあるので、ありすはついにソファーに倒れこんでしまった。たくみ君はオセロの途中で倒れたありすを不思議そうに見るだけで何も言わなかったのだが、私は寝るなら二階に行けと言いたかった。というわけで私はソファーに近づきありすを起こし、二階に行けと言った。するとありすは目を擦りながら「栞ちゃん本読んで」と言ってきた。つまり寝物語を要求してきたわけである。

ありすが寝物語を頼んでくる事はたまにある。なんでも私に本を読んでもらうと、すつと眠れていい夢が見れるらしいのだ。自分が朗読している音声を聞きながら眠るほど私はその効果に興味はないので、真偽のほどは定かではないが、社長も「栞ちゃんは本を読むのが異常なまでにうまいから、いい夢がみれるのかもしれないね。それで愛想がよければ保育士が天職だったろうにねえ」と言っていた。褒め言葉として受け取ったが、全く嬉しくない。本は好きだが、朗読は好きではない。本は静かに読むものだ。学校の授業で交代に読んでいくのは意味がわからなかった。本は一人で読むもの。一人に全部読ませればいいだろうに。教師も時間つぶしに必死なんだなと思ったのはほろ苦い思い出である。

いつもなら面倒だなあと思いつつ読んであげるのが、今日はたくみ君がいるのだ。このたくみ君から目を離すわけにはいかない。いや、別に目を離してもなんら問題ないような気がするが、一応預かっているわけなのだ。何かあったら大変だ。もしかしたら目を離れた隙に逃げ出すかもしれないし、引き出しを漁り始めるかもしれない。今こうやって静かにおとなしく座っているのは私がいるからかもしれないのだ。という理由をオブラートに包みありすに説明し、眠いなら二階に行けともう一度言ったところ、ありすはソファーを下り、壁際にある巨大な本棚にしまわれている無数の本の中から一冊の文庫本を引き出してきて、私に渡した。『アンデルセン童話集』。「人魚姫がいい」ありすはそう言ってソファーに横になった。つまり、ここで私寝るから問題ないだろ？ ということのようなのだ。い

つものありすなら私が理由をつけ嫌だと言えば、「栞ちゃんのけち」と言つて諦めるはずなのだが、今日は諦めないようだ。本当に変な
ありす。よほどいい夢がみたいのか、それともたくみ君から離れた
くないのか。どちらにしても、今日のありすがおかしいことには変
わりない。たくみ君は、何も言わず自分の膝を注視しているので、
本の朗読に文句はないようだ。文句があつたところで何も言わない
だろう。「栞ちゃん早く」ありすが急かしてきたので、私はため息
を一つつき、「ちゃんじゃない」と言つたあと、朗読を開始した。

7・鼎栞

「人魚姫は陸にあがり、魔女からもらつた薬を飲みました。飲んだ
途端、人魚姫はナイフで体中を切り刻まれたような痛みを感じまし
た
」

すでにありすは私の横で寝息を立てて眠っている。つまり私はも
うこの朗読をやめ地雷処理に戻つてもいいはずなのだが、どうも前
方のたくみ君の視線が気になつて朗読をやめる事ができない。熱心
に聴いているようなのだ。ならば仕方がない。途中でやめるのもな
んだから、最後まで読みきることにする。

人魚姫という物語を簡単に説明すると、未っ子の人魚姫がどんな
性格かもわからない王子に見てくれだけで一目惚れし、魔女に声を
捧げ、人間になつて、結婚できなくて、殺せなくて、永遠の命を得
る。そんなお話である。見事なまでにわがまま未っ子の一人勝ち。
全員を不幸にしたあと自分だけ救いを勝ち取つた。と思つてしまふ
のはきつと私の心が大人になつて醜く汚れて歪んでいるからに違
ないと思わくもないが、よくよく思い出してみたら私は子供の頃も
人魚姫が好きではなく似たようなことを考えていた気がしないでも
ない。ということ、心が歪んでいるとか関係なく、私は人魚姫が
嫌いのようだ。

そもそも人魚姫がハッピーエンドなのが気に入らないのだ。最後は

泡になって消えておけという話である。空気の娘ってなに？ どうしてそうなるの？ どうして泡になって消えなかったの？ と子供ながらに思い今も思っている。恋が実らなかつたという点から見ればこの物語はバットエンドなのかもしれない。しかし残念ながら私は結婚というものが必ずしもハッピーエンドというわけではないということが知っているので、恋が実らなかつた結末というのはハッピーエンドなのだ。

恋が実らず泡になって消えた。で終わっていたら人魚姫はバットエンドだったかもしれない。物語のバットエンドとは、登場人物が何も得られずに死ぬ終わり。人魚姫が自分の声を失い、家族も捨て、歩くたびに激痛を味わい、その末に何も得られない。最高にバットエンドだ。これなら私も納得し、人魚姫可哀想と思つたのに。それがなに？ 永遠の命？ 自分の声を失い、家族も捨て、歩くたびに激痛を味わい、好きな男には想いも伝えられず、好きな男は別の女に取られ、その末に永遠の命を得た。羨ましいじゃないか。永遠の命を得られるなら300年真面目にお勤めますとも。完璧ハッピーエンドだ。人魚姫。私はあなたが羨ましくて妬ましい。

「おしまい」

そんなことを思いつつ、朗読を私は終えた。

たくみ君も眠ってしまった。ソファーに倒れ、あどけない寝顔を浮かべている。どうやら私の朗読には子供にしか効かない睡眠魔法の効果が付与されているようだ。この部屋は空調が異様なまでにしっかりと働いているので毛布をかけなくても風邪を引く心配はないだろう。

私は横で寝ているありすを起こさないように、静かにソファーから立ち、本棚に本をしまい、地雷処理をまた始める事にする。

さて。いまさらだが、なぜありすがこんなにもある本の中から、この人魚姫を読むように私に頼んだのか。ということだが、別に説明する必要はないだろうと思うが、一応説明しておこう。

つまりありすは、たくみ君は人魚姫みたいなものだよ。と言いた

かったのだろう。

全くもって今日のありすは不思議なアリス。それがどうした。という話である。

8・見習ありす

「ん……」

目を開ける。天井と電気。時計の音。起きる。眠い。あくびが出る。目を擦る。眠い。向こうのソファーに目を移す。男の子が寝てる。栞ちゃんの読む声は眠くなる。誠が言うには、子供だかららしい。よくわからない。

「……」

ぼーっとする。栞ちゃんを見る。ショートケーキ食べてる。わたしも食べたい。というかあれはわたしのじゃなかったっけ。栞ちゃんの後ろの時計を見る。4時。眠い。あくび。もう一度男の子を見る。寝てる。起きそうもない。暇だから起こす。

「あります。寝かしておきなさい」

栞ちゃんに止められた。まだ揺すつてもない。栞ちゃんは、寝ているほうが楽だから起こすのダメって言ったのに違う。栞ちゃんは今全体的に見ると働き者だけど、根っこの部分はなまけ者だと思う。しかたないのであきらめる。だから栞ちゃんと話すことにする。栞ちゃんの横に行く。栞ちゃんはパソコン見ながら、ショートケーキを食べてる。パソコンには文字が並んでる。いんたーねつだと思う。よくわからないけど、世界とつながっているらしい。世界とつながってるというのがどういうことかはよくわからない。つながる意味もわからない。疲れないのかな。

栞ちゃんはわたしの方を見ない。だからわたしは見る。見る。見る。「何かようですか？ あなたの分は三階ですよ」そしたら栞ちゃんはこっちを見た。栞ちゃんは根っこの部分はなまけ者けど、全体的に見ると優しい。

「誠は？」

誠がいれば早いから早く帰ってきて欲しい。

「さっき電話がありました。少々てこずっているようで、帰るのは遅れるようです」

残念。しかたないので、栞ちゃんに話すことにする。

「あの子」

ソファーに寝てる男の子を指す。栞ちゃんも見る。

「飼っていい？」

栞ちゃんが、ゆっくりこっちに目を戻す。バカを見る目だ。

「バカ？」

目でわかるんだから、口に出さなくてもいいのに。

「どうしたんですかあります？ 今日はおかしいですね。何かありましたか？」

「別になんにもない。飼っちゃダメなの？」

「だから飼えるわけじゃないでしょ？ 遊び相手が欲しいなら社長に頼みなさい。どうにかしてくれませよ。きつと」

栞ちゃんはこれで話は終わりだ。みたいにパソコンの方を向いてしまった。栞ちゃんは全然わかってない。

「じゃああの子どうなるの？」

「どうなるって、19時に母親が迎えに来て、それで終わりです」
「迎えに来なかったら？」

栞ちゃんがまたゆっくりこっちを見る。それは考えてなかった。

という目だ。栞ちゃんは全体的に見ると頭が良いけど、根っこの部分はバカだと思う。

「そんなことは……」

「ない？」

「……」

栞ちゃんは難しい顔になった。その時はどうしようと考えていると思う。住所とか聞いてないし。名前も聞いてないし。あの子しゃべれないみたいだし。そんな子面倒だから捨てるとかありそうだし。

とか考えてると思う。いまさら考えてもどうしようもないのに。栞ちゃんはバカだなー

「その時は飼っていい？」

「……」

栞ちゃんはわたしを横目で見て、なんにもいわない。でも、考えたくれてるみたい。栞ちゃんは全体的に見ると、働き者で優しくて頭が良いからきつと許してくれる。

「ダメに決まってるじゃないですか」

と、思ったのにダメだって言われた。

「ケチ」

ぷくーってふくれてみた。栞ちゃんには効果がないようだ。

「ケチで結構です。そもそもあります。たくみ君の母親が迎えに来ないとは、私は思いません。考えすぎですよ」

「わたしは、栞ちゃんが考えなさすぎだと思う」

子供なんてペットと同じ。捨てるも捨てないも飼主おやしだいって、誠が言ってた。鳴けない小鳥は生きてけない。美しい声の人魚も、声がなければ、ただの魚。ただのきれいな女の子。声を失った時点で、泡になるのは決まってた。

「いいですかあります？」

栞ちゃんがため息ついて、わたしにもわかるように説明する。という空気を出してきた。栞ちゃんは全体的に見ると何を考えてるかわからないけど、根っこの部分はわかりやすい。てきとーにそう思う。

「そもそもたくみ君が喋れないとは私は思いません。耳も聞こえてるみたいだし、喋れないなら喋れないでいくらでも情報伝達の方法はあります。それなのにたくみ君はそれを一切しません。つまりあの子はただ単純にそういう子なんです。さらに喋れないなら母親が何か一言くらい言っただけでしょう。確かにあの母親がたくみ君を捨てる気でここに来たのなら、それを言わずに去っていくかもしれない。しかしそれにしてもちゃんとお弁当も用意しているみたい

ですし、大切にはしているように見えます…… ああでも、最後の晚餐というか最後の贈り物的な何かということもあるか…… 姥捨て山でもおにぎりを一個持たせたっけ……」

「ほら、わたしの言ったとおりでしょ」

勝ちほこつてみた。栞ちゃんはわたしより大人なのにわたしより世の中のことがわかつてないな……。つて思う。

「……まあ。もし。もし万が一たくみ君が捨てられたとして。19時になつても母親が迎えに来なかつたとしても、たくみ君を飼えるわけないでしょうが」

「どうして？」

「どうして……」

栞ちゃんがまた、バカを見るような目で見た。バカは栞ちゃんの方なのに。はなはないかんである。

「じゃあ、栞ちゃんはその子どうするの？」

「迎えに来なかつた時ですか？ その時は……まあ、社長に相談しますけど、私個人の考えとしては……」

栞ちゃんは、イチゴを口に運んでから、ふつーに言った。

「養護施設の手続きとかを考えるのも面倒ですし、頼まれてもませんから、その辺に放り出して終わりじゃないですか？」

「……………」

栞ちゃんは全体的に見るとふつーの大人だけど、根っこの部分は間違いなく、くさつた大人だ。

早く誠、帰つてこないかなあ。

9・鼎栞

「今日は本当に助かりました。ありがとうございました」

「いえ。仕事ですから」

ありすが意味深なこと言っていたが、19時ほぼきっかりに、たくみ君の母親は迎えに来た。ありすは母親が迎えに来たのを確認し

た後、すぐに二階に上がっていった。その表情は、つまんなそうでもあり、ホツとしていたようにも見えた。どちらにしても、私の方がバカではないと証明されたということだ。うん。ありすめ。散々バカを見るような目で見て。その結果私が正しかったわけだ。ざまあみろという奴であるが、私は大人なので、口には出さず胸のうちはこの気持ちを感じたのであった。

「たっちゃん、おとなしくしてた？」

「……」

たくみ君は無言でこくと頷いた。来たとき同様、リュックサックを背負っている。結局この子は一言も喋らなかつた。喋れるかどうかもわからないままだが、まあどうでもいい。たくみ君はおとなしかった。それが全てであり、私にとってはそれで十分だった。

まあ何はともあれ。

「では、本当にありがとうございました」

「はい。また何か悩み事がありました。またよろしくお願いします」
たくみ君親子を送り出し、今日の仕事はこれで終わりである。

「……ふう」

19時ということでもう帰宅時間なのだが、残念ながらもまだ帰れない。社長がまだ帰ってきていないのだ。先ほど電話をもらい『いや、なんかさ。二人の恋のキューピットであるあなた様を是非夕食に誘いたって言われちゃって。断れないから、ありす君の夕食よろしく』ということ、社長はまだ帰ってきてないし、私も帰れないというわけである。隣家で飼っている犬の鳴き声をどうにかしてくれという依頼の果てが、恋のキューピットとは、社長はホントすごいな。と、思った気がした。

というわけでそんな感じで、ありすの夕食を作ってから帰らないといけない。三階を使っていいらしい。とりあえずありすに、オムライス以外は却下の方向で、何が食べたいか聞くことにしよう。

自慢ではないが、私にオムライス以外を作ることを期待しないでいただきたい。

「かれこれ三日だね少女A。君の母上が君を預けてから迎えに来なくて、三日が経った。これはもう完璧にあれだね。君、捨てられたね。いやあ、まいった。まさか迎えに来ないとは思わなかった。君の母上があまりにも美人で話上手だからコロツと騙されました。俺反省してます。今度こういう依頼があった時は注意しないとなあ。というのはまあ、こつちの問題なだけだね。少女A。今は君の問題をどうにかしようか。君はどういうわけか母上に捨てられました。それはオツケーかな？」

そいつは結構。頭がいい少女Aでラッキーだよ。ここで駄々をこねられたら俺は困ってしまって困ってしまって、犬のお巡りさんと呼ぶこともなく、君を外に放り出していただろうからね。君にとってもラッキーだったし、俺にとってもラッキーだ。さてさて。親に捨てられた気持ちはどうだい？ 何か思うことはあるかな？

ははは。どうも思わないか。おもしろい少女Aだ。まあその反応は間違いではないよ。子供なんて愛玩動物みたいなもんさ。飼主に望まれたから生まれたんだから、飼主が捨てたかつたら簡単に捨てられるよね。まあ、そんな飼主少ないけどね。偶然たまたま君の飼い主はそういう飼い主だったわけだ。運が悪かったね。いや、道端に捨てられなかっただけ、運がよかったのかな？ まあそれはさておき少女A。ここがどういうところか知っているかな？

その通り。ここはどんな悩みも解決する場所。犬の世話が面倒ならその犬をどうにかするし、寝たきり老人の世話が面倒ならその老人をどうにかするし、引きこもりの世話が面倒ならその引きこもりをどうにかするし、子供の世話が面倒ならその子供どうにかする。なんでもやるからどんな悩みも解決できる。君も今、悩んでいるだろ？ 何か頼みたい事はあるかい？ 君の今の悩みは何かな？」

「住むところがない。それにお金もない」

「なるほどなるほどそうきたか……。親に捨てられた子供の悩みは思った以上に切実だね。オツケーわかったよ少女A。あなたの悩み、解決しますってやつだ。ちょうど二階も空いてるし、人でも欲しかったし、俺の悩みも解決で、一石二鳥って奴だ。」

「というわけで、これからそれなりによろしくね。少女A」

エピローグ・気味が悪い人形

「では、本当にありがとうございました」

あら。たっちゃん。ようやく出てきたわね。どうだった？ 楽しかった？

そう。それはよかったわね。ありすとは仲良くできた？

「たっちゃんどうしたの？ またこの人形が気になるの？」

くすくす。そうなの。オセロを。どうだった？ 強かったでしょあの子。

「……来たときも思ったけど、この人形ちょっと不気味ね。なんでこんな籠に入れて置いてあるのかしら。よくわからない場所ね……」くすくす。やっぱりね。そう思ってたんだこの人。たっちゃんはどう思う？ あたし不気味？

嬉しいこと言ってくれるわね。あたし。たっちゃんのこと大好き。くすくす。それで。やっぱりありすに負けたのね。あの子はアリスって名前だけあって。ボードゲーム強いのよ。でも。オセロじゃなくて。そこはチェスよね。全く。わかってない子供。

え？ 「ほら。たっちゃん行くわよ」あなた意味がわからないわけ？ もしかして不思議の国のアリス。知らないの？ ダメじゃない。そのくらい知ってないの。世界の常識ってやつよ？ くすくす。人形に世界の常識教えられる気分ってどうなの？ 「たっちゃん！ 言う事聞きなさい！」 別にどうも思わない？ あたしが不思議

じゃない？ あたしが怖くない？ そつ。なら。くすくす。

あたしの悩み。解決してくれる？

「いつまでそんな気持ち悪い人形見てるの！ ほら！ 帰るわよ！」

「やだ」

「……………え？」

「くすくす。聞こえなかったの？ やだって言ったの。帰りたくない。家に帰ってもつまらないもん。ぜんっぜんおもしろくないもん。遊び相手もないし。おばあちゃんとお母さんの喧嘩もうんざりだし。お父さんとお母さんの喧嘩もうんざりだし。あたし帰りたくないなあ」

「た、たっちゃん？」

「ねー。それよりお母さあん。あの人形。あたし欲しいなあ。ねえねえ取つてよお。盗つてよお。あたしじゃ届かないから取つてよお。あの籠のカギ外してよお。ちよつとクルツとやれば外れるからあ。ああ。でも。ダメかあ。くすくす。だつてあなたは。あたしの声聞こえないもんね。じゃあ。あたしを抱っこしてよお。ねえねえお母さあん。早くう。あたしの手が届くようにしてよっ……………！」

つたあい。何も叩くことないじゃない。自分の子供をそんな思いつきり叩くなんて。親として失格じゃないの？ くすくす。

「……………い、行くわよたっちゃん！」

バイバイ たっちゃん。また来てね。

あーあ。あともう少しだった気がしたのに。やっぱりダメかあ。うまく同調できたのに。残念ね。くすくす。でも。久しぶりに痛かったなあ。

ああ。早く来て。あたしの声無き声が聞こえる誰か。

そしてあたしの声になれ。なーんてね。くすくすくすくす…。

5 - 1 ・ 食人嗜好

0 ・ 茶柱誠

唐突に宣言するが俺は、大人です。間違いなく大人です。なんか
菜ちゃんがホストみたいとか言っているけど、普通な大人です。い
や、別にホスト⇨普通な大人じゃないと考えているわけではないけ
れども？ 普通の社会で働いている普通な大人という意味ね。いや、
夜の世界が普通ではないと思っっているわけじゃないよ？ でもまあ、
夜の世界って言ってる時点で別格扱いだけどさ。

そんな普通な大人代表を自認しているこの俺が、何故このような
奇妙な場所で働いているのかと問われれば、まあどうでもいいじゃ
ないかそんなことと切り返そう。つまりまだ語るべきときではない
ということだ。とりあえず今のところは、俺は『ここ』の三階に住
んでいるということだけを知っておいてもらいたい。しかし忘れて
もらってもかまわない。なぜならさして重要ではないからだ。重要
じゃないから描写もなしってことでよろしく。20代独身男性のワ
ンルームと思っただければ、よろしい。ちよつと広いけどね。

さてさて。そのように普通な大人代表である俺は、なぜか一人の
少女を養っているわけだ。誰がなんと言おうと養っている。だって
衣食住補償してるし、お小遣いもやってるぜ？ これは養っている
と言っ間違いない。立派な大人だぜ。

しかしまあ。働かざるもの食うべからずという言葉通り、働かし
ているわけで労働なんか引っかけりそうだが気にしてはいけな
い。『ここ』は法の外に位置している。法律・倫理。どうでもいい
じゃん精神。

しかし。しかしだ。俺は倫理やら法律は軽視しても常識やら理性
やら道理やらは重んじているということは信じてくれ。信じてくれ。
信じてくれ。三回言うと嘘っぽくなるらしいので実践してみた。意

味は特にない。意味がないのになぜそんなこと言ってるんだ。さつきからお前は何か言いたいんだ。と、問われれば、こう答える。

「はい。これで三連勝」

「……」

子供相手のオセロに本気で挑み、オセロ盤をほぼ黒一色に染め上げ、ありすが涙目になっていても気にせずワンサイドゲームを繰り広げる俺は、普通の一般的な常識やら理性やら道理やらを重んじる立派な優しい大人なんですよー。まあ別に信じなくてもいいけどねー。と、答える。

1・茶柱誠

16時。俺が暇つぶしに本を読んでいると、二階からありす君が下りてきた。手にはオセロのボード盤、そして服装はジャージ。ありす君はたまに、ゴスロリやら着物やらドレスやら、年中スーツを着ている俺から見れば奇妙というか奇抜な服を着ているが、あれの大半は栞君の趣味というのは内緒だ。着せられてる本人が嫌がってはいないようなので別に問題ない。はず。

「栞ちゃんは？」

ありすはソファーに座り、栞君の席を眺めながらそう尋ねてきた。そしてあくびを噛み殺した。昼寝から目覚めたばかりなのだろう。

「仕事に行ったよ。家庭教師のね」

今頃栞ちゃんは、夏を制したい受験生の相手をしているはずだ。

栞ちゃんは、運動はからつきしたが学力は高い。というわけで、運動が含まれない勉強の家庭教師には適している。栞ちゃんがここで働くようになって早四年くらい経ったが、一日三時間で一教科に付き二万円という条件なのに、毎年それなりに家庭教師の依頼がある。どうやら、夏休み中に栞ちゃんが家庭教師をした学生は、絶対に志望校に合格できるという噂が流れているらしい。そんなわけがないに、最近の保護者の方は夢見がちが多いみたいで、こちらとしては

嬉しい限りだぜ。

「誠は何してるの？」

「ん？ 見ての通り本を読んでる。ヘンゼルとグレーテル。ありす君知ってる？」

「知らないわけない。誠、暇なんだ」

ありすが小バカにするようにそう言ってきたが、ここで強がるような人間ではない俺は「まあ、そうなるね」と、肩を竦めて答えた。こんなところで強がるような人は、大人とはいえないよねー。誰とは言わないけどさ。

グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』。内容は有名なので特に説明するまでもない気がしなくてもないが、簡単に説明すると、ヘンゼルとグレーテルは金ないから捨てられて、魔女に捕まって、グレーテルが魔女を殺して、ヘンゼルとグレーテルは父親と末永く幸せに暮らしました、めでたしめでたし。という話。有名だね。しかし有名なくせしてたまに、ヘンゼルとグレーテルはどっちが兄でどっちが妹かわからなくなるから、定期的に読まないといけないお話だぜ？ まあ、そんなわけないけど。でもまあ、『お菓子の家』が出てくる物語がヘンゼルとグレーテルということはたまに忘れない？ 忘れない？ ああそう。忘れない。忘れないか……忘れないかあ……忘れてたろ？

「暇ならオセロしよ」俺がヘンゼルとグレーテル内のお菓子の家の陰の薄さについて思いを馳せていたら、ありすがそう提案してきた。テーブルにオセロ盤を広げながら提案してきたところを見ると、もうやることは決まっているようだ。別にやらない理由もないし、相手をするにすることにする。本棚に童話集を戻し、ありすの対面に座る。「何か賭けるかい？」

俺のその提案に、ありすはニヤリと笑った。

「誠が負けたら今日の夕ご飯ハンバーグ。わたしが負けたら、野菜炒めでいいよ」

ありすは野菜が嫌いだ。それなのに負けたら野菜炒めでいいと言

うとは。ありすの自信がうかがえるというものだ。まあ、確かにありすちゃんはボードゲームが得意だから、その自信は間違いではないね。この前も、栞ちゃんをこてんぱんに叩きのめしたと楽しそうに語っていたし、俺が頻繁に負けてるのも、ありすちゃんの自信を高めているのだろう。

「おっけー、それでいいよ。俺が負けたら巨大ハンバーグ。俺が勝ったら野菜たっぷり野菜炒めだ」

しかし。しかしだありす。確かにお前は強い。運もある。実力もある。だが、お前は甘い。甘すぎるぜ。ありす。お前には圧倒的に経験が足りない。策略が足りない。お前はまだまだ見習いだ。

「わたし、負けないから」

「俺だつて負けないよ？」

アリスの世界は魅力的で人を惑わせ惹きつける世界だが、アリスが消えれば消滅する、小さな小さな脆弱な世界ということを、教えてやるぜ。

3 . 茶柱誠

「はい。俺の四連勝。というわけで、今日の夕食は野菜炒め。明日の夕食も野菜炒め。明後日の夕食も野菜炒め。そして明々後日の夕食も野菜炒め。いやー、野菜炒めは作るのが楽だから助かるなあ。

ありす君も、野菜炒めばかりで嬉しいだろ？」

「……………」

教えてあげた結果、ありす君は俺の皮肉に何も返さず、目に涙を浮かべ、膝に置いた手をブルブル震わせながら、白一色の盤を睨みつけることになりました。合掌。

ちよつとやり過ぎたかもしれないと思わなくもないが、ありすがもう一回もう一回。明日の夕食明後日の夕食を賭けて勝負勝負ー。と、言ってくるからいけないんだぞ。お前の負けず嫌いがいけないんだ。だから野菜炒めを食べるはめになったのはお前のせいだ。と、

責任転嫁をしてみてもいいですか？

「……………誠、強い」

ありす君が盤を睨むのをやめ、俺を睨み始めた。

「いつもは手加減してた？」

咎めるように言われてもねえ。

「まあね。本当の実力は大事なときに出せばいいのさ。それ以外はテキトーにそれなりにやってればいいわけ。これ、大人の常識」

子供相手に本気になるような人は、大人とはいえないよねー。ちゃんと手加減しないとねー。

「大人つてずるい……………」

ありすはポツリと呟いた。でもそれは勘違いだ。

「違うね。子供が純粹すぎるんだ」

「……………」

ありすは俺をキツと睨みつけてから、涙を拭き、荒々しくオセロ盤を片付け始めた。もう諦め「ん？」

ピンポン

やはりチャイムが鳴った。客が来たようだ。ありすはオセロ盤を持ち、二階に帰るようだ。ふて寝するとみた。

栞君がいらないので、俺がドアを開けなければいけないし、お茶も汲まなければいけない。

でもまあ。面倒つてわけじゃない。栞ちゃんが来る前は、俺がやっていたことだからね。

5 - 1 ・食人嗜好（後書き）

とりあえず暑い!!

だから茶柱誠の口調とかが安定しないんです！ 嘘です！ ごめんなさい！ そういう仕様だと思ってください！ 仕様ならしょうがないみたいな感じでよろしく!!

今回のキーワードはヘンゼルとグレーテルだよ！これを機会に読み直してみたらどうかかな！？ 結構おもしろいよね！お菓子の家じゃなくてパンの家とかいうバージョンもあるしね！！ たぶん。

はい。そんな感じで更新頑張ろう。おー。

おかずなしでご飯はおいしくない。あきる。どうしよ。野菜炒めやだ。でもお腹空く。でも野菜やだ。どうしよ。どうしよ。どうしよ。あ、栞ちゃん家に泊めてもらおうかな。帰ってきたら頼んでみよ。それがいい。きつと栞ちゃんなら、わたしの気持ちもわかってくるれる。栞ちゃんも好き嫌い多そうだし。

「…………ふあ」

野菜炒めを食べなくてすむ方法を思いついたら、眠くなった。眠い。眠い。今ベット。なら寝る。寝る……………野菜おいしくない……………野菜嫌い……………野菜炒めなんて、誠が一人で食べてればいいんだ……………

「ありす君。ありす君。おーい。起きろー」

「ん……………」

うるさい。不快。体が揺れる。眠い。なのに寝れない。起こされる。起こされた。どうしてわたしを起こすの？ ずっと寝かしといてくれればいいのに。

「…………誠」

目を開けたら誠が横にいた。いつも通り、軽い笑顔。寝起きには不愉快。わたしが起きたのを見て、ベットから下りる。まだ眠い。今何時。時計を見る。七時三十分。たぶん夜の七時。ここは窓がないから朝か夜かわかんないけど、そんなに寝てないと思うから夜の七時。七時三十分だから……………三時間くらい寝てた。どうして寝てたんだっけ。あ。寝る前何か考えてたけど。なんだっけ。

寝ぼけてる頭で思い出す。と、誠が床に落ちてたオセロを拾ってるのが目に入った。思い出した。野菜炒めだ。

「栞ちゃんは？」

ベットから下りる。ふらつく。まだ眠い。でもそんなことより何よりもまず先に栞ちゃんがまだいるかどうかが大事なのだ！。

「もう帰ったよ」

「……………」

目の前が野菜でうまってしまった。そんなナレーションがつく気分になった。

菜ちゃんは定時にはちゃんと帰るタイプだからねー。と、誠がほめるのかバカにしているのかよくわかんないこと言ってるけど、わたしの耳には入ってこない。終わった。なにもかも。わたしにはもう野菜炒めを食べるという選択しかない。最悪。ほんとやだ。野菜やだ。野菜嫌い。野菜おいしくない。誠がどうしてわたしを起こしたのかわかった。野菜炒めを食べさせる気なんだ。ようやく気づいた。やっぱり誠は才二だ。でもわたしは才二には屈しないからベツトにもぐり込んだ。

「ん？ どうしたんだいありす君。君の大好きな大好きな食事の時間だぜ？」

誠がニヤニヤしているのが声だけでもわかる。むかつく。死ねばいいのに。あ、死んだらわたし困る。あ、でも今は菜ちゃんがいるからやっぱり死んでいいや。

「野菜炒めがありす君を待ってるぜ？ だから早く出てきなよ」

「やだ」

絶対食べない。出て行かない。わたしは。あれだ。えっと。

「はんがーすとらいきする」

たしかそんな感じのあれ。

「ハンガーストライキって……それは困るなあ。明日からありす君には働いてもらわないといけないのになあ……」

誠が悩んでいる。思いのほか効果があるようだ。このまま今日の夕ご飯は野菜炒めじゃなくて、ハンバーグにできるかもしれない。

「んー……仕方ない。わかった。わかりました。野菜炒めはやめにしてあげよう」

やった。でも、なんか簡単すぎるような気が。うそかもしれない。気をつけないと。

「……ほんと？」

だからベツトから顔だけ出した。「はい。捕まえたっ」とえり掴

まれて引つ張り出された。だまされた。肩にかつがれる。このまま連れてかれてなるものか。

「バカ！ うそつき！ オニ！ 誠なんか死ね！！」

暴れる。けどダメ。どうにもならない。誠は楽しそうに三階に向かう。三階はわたしにとって、今日にかぎっては、じごくとどろぎである。

「ははは！ 騙されるほうが悪いってことも確かにあるんだよねえ世の中実際さ！ さあありす君！ ゲームで負けたんだからおとなしく野菜炒めを食べてもらおうかなあ？ いやあ。あれだな。子供の好き嫌いをなくそうと努力するなんて、俺、すっげえできた人間じゃね？ 実際さ！！ あははは！！ そう思うだろ？」

「思わないから下ろして！！ やだやだ野菜炒めやだー！！」

「ああ。やっぱりそう思う？ だよねえ。俺って実際、菜ちゃんよりの奴だよね」

誠はわたしを無視して何かと会話してる。そして急な階段を上る。この階段はわたしにとって、今日にかぎっては、十三階段とどろぎである。

「こらこらありす君。あんまり暴れると落ちるぜ？」

「わたしを離して下ろしてから誠が落ちればいいの！ そのまま死んじゃえ！！ 死ねば楽になるよ！！」

「楽になってもつまらなくなるのはごめんだから遠慮しておくよ。」

「とうかありすちゃん。キャラが崩れてるぜ？ そんなに野菜炒めが嫌なのかい？」

「やだやだ！ 野菜炒めやだ！ 食べたくない！ おいしくない！

食べるくらいなら死ぬ！ 誠が！」

「俺が死ぬのかよ。はい、なんだかんだで到着」

「ああ……やだよー。野菜炒めやだよー」

三階についた。部屋の中央にある四人がけのテーブルの上にはキヤベツの芯ばかりの野菜炒めがのっている大きな大きなお皿が置いてある。野菜炒めとはわたしにとって、毒とどろぎであるのはい

うまでもない。泣ける。

「そんなに食べるのが嫌なのかい？」

わたしはすぐにうんうんと必死にうなずく。すると、「んー。そっかそっかぁ……」と、誠は考えるそぶりをした。これはチャンスかもしれない。わたしはすかさずメソメソと泣くのを続行する。

「仕方ないなあ……」

誠はそういつて、テーブルではなく宝箱に向かった。やった。野菜炒めはなしにしてくるみたいだ。うれしい。やっぱり誠は優しい。誠は宝箱を開けた。宝箱には色々入ってる。だからわたしは宝箱つて呼ぶ。何かを捜してるみたい。そんなことより下ろして欲しい。「あつたあつた」

誠はそういつて、宝箱の中からロープを取り出した。ロープ。ロープ。ロープ？

「そんなに嫌なら仕方ない。椅子にくくりつけて無理やり食べさせるしかないな。全く、世話がかかるアリスだぜ」

誠は楽しそうに笑いながらそういつた。わたしは、金魚のように口をパクパクさせることしかできなかった。

その後わたしは、ロープでグルグルにされてイスに固定された。痛くなかったけど、全然動けなくて逃げれなかった。そして無理やり野菜炒めを食べさせられた。口を無理やり開けさせられて、無理やり野菜炒めという名の毒を入れられた。やめて。と言っても誠はやめなかった。どんどんどんどん野菜炒めを口に入れてきた。たまに牛乳とかご飯もくれたけど、そんなの気休めにもならない。

苦しかった。おいしくなかった。苦かった。死にたかった。野菜炒めは涙の味がした。涙は苦いということわたしは知った。

誠は最初から最後まで、楽しそうに笑ってた。

やっぱり誠は才二だった。

5 - 3 ・ 食人嗜好

5 ・ 見習ありす

「ありす。依頼人の家についたら、その膨れっ面。引っ込めてくださいよ?」

「……………」

栞ちゃんが、めんどくさい。というのを隠さない声で、わたしに話しかけてきたけど、わたしは不機嫌なんだから、不機嫌な顔になるのは当然だから、やめない。という、かつこたる意思を貫き通すという意思表示のために、栞ちゃんを無視した。栞ちゃんが、バカを見るような目でこっちを見ている気がしたけど、わたしは気にせず、窓の外に流れていく風景を、膨れっ面で眺める。車の振動と景色で、眠気がすごい。

誠に毒を無理やり食べさせられた次の日の午後1時。わたしは、栞ちゃんの手で仕事先に向かっている。仕事内容は、昨日、誠がわたしの口に毒を入れながら、なんか説明してたけど、あんまり覚えてない。引きこもりの小学生の話し相手をしろという仕事だったと思う。栞ちゃんも、運転しながら何か言ってたけど、眠かったし、わたしが昨日のことを栞ちゃんに話したら、野菜炒めくらい食べればいいじゃないですか。そんなことでケンカするなんて、バカじゃないですか。とか言って、わたしは不機嫌だったから、あんまり聞いてなかった。同年代の子とお喋りするのが、第一歩とかなんとか言ってた気がする。

「ふぁ……………」

そんなことより、眠い。やる気ない。誠嫌い。野菜嫌い。今の眠気くらい嫌い。きつと誠も私のこと嫌いなんだ。だからあんなこと出来るんだ。死ねばいいのに。

「もう少しかかりますから、眠いなら寝てていいですよ。仕事先で

寝られても困りますからね」

「……ん」

言われなくても寝る気だった。栞ちゃん、ちょっと優しいから、野菜よりは嫌いじゃない。そういえば今日の服も栞ちゃんが、選んでくれた。小学生っぽくて、スカートじゃない服装らしい。なんでスカートじゃないのかはよくわからないけど、とりあえず、眠いから、寝る。

6・見習ありす

「す。起きなさい。ありす！」

「……ん」

うるさい。眠い。けど寝れない。目を開ける。横を見る。栞がいる。ここどこ。周りを見る。車。塀。狭い。思い出した。

「起きましたか？」

「寝てる……」

「起きましたね。早く降りてください」

栞はさつさと車を降りる。わたしは寝る。「早く降りなさい」仕方なく降りる。眠い。あくび。涙が出る。

どこどこ。狭い道。古い建物に囲まれてる。裏道？ 細道？ よくわからない。とりあえず眠い。フラフラする。

「ここですよ。ほら、しっかりしなさい」

手を掴まれる。引っ張られる。連れてかれる。建物に入る。裏口？

「こんにちは」

栞が挨拶した。わたしはおやすみなさいがしたい。狭い玄関。やっぱり裏口。どまき？ みたき？ たたき？ よくわからない。眠い。あくび。俯く。目をつむる。

「どうもすいません。わざわざ裏口にまわってもらって……」

「いえ。こちらこそ、少々遅れまして申し訳ありません」

顔を上げる。白いエプロンした太ったおばさん。栞と話してる。

わたしには関係ない。寝る。

「その子が、ありすちゃんですか？」

「はいそうです。ありす。挨拶しなさい」

「……ありす、です」

挨拶した。させられた。頭掴まれて下げさせられた。眠い。抵抗するのも面倒。

「可愛らしい子ですね」

お世辞。眠くて半眼の子が可愛いとは思わない。

「そうですね」

嘘。心にもない嘘。

「あ、じゃあ、こちらです」

「はい。ほら、行きますよありす。シャキっとしなさい」

「……無理」

眠いし、シャキシャキの野菜は好きじゃないから無理。

靴を脱いで、栞ちゃんの後ろに続く。狭い廊下。古い家。なんだか生臭い。狭くて急な階段を上る。家のよりは急じゃないし、短いけど、栞ちゃんがため息をついた。栞ちゃんはもっとがんばるべきだと思う。

「なおき。入るわよ」

太ったおばさんが、階段を上がったところのふすまを開ける。入る。栞ちゃんが、一度深呼吸してから、続く。緊張してるからじゃなくて、疲れたからしたんだと思う。栞ちゃんはホント、もっとがんばるべきだと思う。

「なおき？ 昨日話した子が来たわよ」

たたみ。ベットが一つ。布団が膨らんでる。なおきが寝てるらしい。羨ましい。部屋にはダンス。勉強机。サッカーボールとランドセルが置いてある。両方とも汚れてない。ランドセルは懐かしいよ。うな懐かしくないような気がした。どうでもいいけど。

なおきは布団から顔も出さない。寝てるのかな。羨ましい。

「ありすちゃんって言うのよ？ とっても可愛らしい子よ。きつと

すぐにお友達になれると思うわ」

わたしは思わない。

「あのねなおき。お母さん、別に今すぐ引きこもりをやめなさいとか。外に出なさいとか言うつもりはないわ。ただどね、ずっとこのままってというのはダメだと思うの。だから、今から少しでも同年代の子と、慣れておいたほうがいいと思うの。それにね、今回連れてきた子は」

おばさんの言葉になおきは全く反応しない。栞ちゃんも興味なさ気だ。わたしは眠いから半分聞き逃した。

「……それじゃあ、ありすちゃん。お願いできる？」

子供が自分の言葉に全く反応なくて、シヨックなのはわからなけれど、なんだか暗い笑顔で、おばさんはわたしにそう言ってきた。子供を大切にしているらしい。どうでもいい。でも、仕事だからそれなりにがんばる。わたしは、コクンと頷いた。

「では、ここはありすに任せて。木下さん。迎えの時間などを、相談したいんですが……」

「あ、はい。わかりました。じゃあ、居間で。あ、お茶も出さない」と

「申し訳ありませんが、私は別の仕事がこれから入ってるので」

「おばさんと栞ちゃんの会話が離れていく。部屋に残されたのは、わたしとなおき。なおき「布団とも言える。」

「……」
どうしよう。依頼内容は、よく知らないけど、お喋り。でも、わたしはそんなに喋るの得意じゃない。どうしてこんな依頼受けたんだろう。誠か。やっぱり誠はわたしのことが嫌いなんだ。わたしがこうやって悩むだろうと思ってこんな依頼を受けたに違いない。むかつく。むかつくから、がんばる。まずは、挨拶をすればいいはず。「こんにちは？ ありすです？ 10才くらいです？」

……これでもいいのかな。よくわかんない。間違っではないかと思

う。でも、なおきは反応しない。むかつく。眠いのを我慢してるわたしの前で、布団に入って寝てるなんて、すつごいむかつく。眠い。眠い。怒ると眠くなる気がする。なおきのベットに飛び込んで、なおきを追い出して、眠ってもいいのかな。

「アリス……？」

と、思ったけど、なおきが反応したから、その計画は保留。布団がもぞもぞ動いて、なおきが顔を出す。

引きこもりだからかはよくわからないけど、絶対的に白い。髪は黒くて長いけど、肌はなんか白い。ひよろひよろしててやせてるし、もやしみたい。もやしは野菜っぽくないから、嫌いじゃない。でも好きではない。もやしって、なんか気持ち悪い。

「アリスって、アリス？」

「？」

なおきは何を言っているかよくわからない。わたしはアリス。それ以外に名前はない。

「君がアリス……」

「……」

なおきはわたしをジッと見て、何かを考えているみたい。わたしも仕方がないので、なおきをジッと見て、考えることにする。これからどうしよう。マンガや本もあるみたいだし、それを読んで時間をつぶすのもいいかもしれない。なおきが話しかけてくるなら相手をして、話しかけてこないなら本を読む。それが眠る。あ、でも、榎ちゃんが寝るなって言ってた。それに依頼内容は、話し相手……。バレなきゃきつと大丈夫。

「アリス」

「？」

どうでもいいけど呼び捨て。ちょっと不快。

「早くここから逃げるんだ」

「……………？」

なおきは真剣な表情で、よくわからないことを言い始めた。

「これは畏だ。畏なんだよアリス。アリスを捕まえて食べるための畏だ。だから僕に構わず早く逃げるんだ。この家は人食いの家なんだ。僕を囷にしてアリスみたいに可愛くてそれでいて綺麗な女の子を連れて来るんだよあいつらは。そして、食べちゃうんだ。本当だよ？ あいつらは人の皮を被った鬼さ。人を食らう、鬼なんだよ……。」

さっきまでそこにいた太った奴がいただろ？ あれは僕の本当のお母さんじゃない。僕の本当のお父さんとお母さんはもう食べられちゃったんだ。僕は見たんだ。あいつらが僕のお父さんとお母さんを食べる姿を……。あれはもう三ヶ月くらい前かな。僕が夜遅くに起きちゃって、それで喉が渴いてて、何か飲もうと思って下に行っただ。そしたら、お父さんとお母さんの部屋から物音がして、僕は何だろうと思って、ふすまをちよっと開けて中を見たんだ……。今思えば見なかった方がよかったかもしれない……。いや、でも、見なかったら僕はもうすであいつらに食べられて、あいつらの仲間にされていただろうから、見てよかった……。そう、見て、よかったんだ。

僕がそこで見たのは、お父さんが、いや、お父さんの皮を剥いで入れ替わった鬼が、お母さんを食べているところだった……。鬼は寝ているお母さんを、足の方から、丁寧に、丹念に、皮を舐めるようにはいでいたんだ。お母さんは苦しそうにうめいていて、僕は怖くなってすぐに部屋に戻ったんだ。そして、朝になるまで待った。……あの日、僕は初めて眠らずに夜を過ごしたよ。夜って、あんなに長くて、あんなに怖いものだったんだね。

朝になって、いつも通り、そう、いつも通りお母さんが起こしに来た。いつも通り、ね。姿も、喋り方も、表情も、全部いつも通りの、お母さんだった。でも、僕にはわかったんだ。こいつはお母さ

んじゃない。お母さんの皮を剥いで、被った鬼なんだって。下に行くと、お父さんもいつも通りそこにいた。そして、いつも通り、机の上には肉が置かれていた。お父さんもお母さんも朝食もいつも通りだったけど、僕にとっては、全然いつも通りじゃなかったんだ……。

僕はもちろん、その朝食の肉は食べなかった。だって、その肉はたぶん……。するとお母さんが、お母さんの皮を被った鬼が、こう言ってきたんだ。どうしたのなおき？ 具合でも悪いの？ 大好きなお肉をあなたが食べないなんて……。ってね。さも心配したような表情で、優しい優しいお母さんの声で……。アリス。その時の僕の気持ちかわかるかい？ いや、わからないだろうね。お母さんの肉を食べると、お母さんに言われるなんて……。そんな気持ち、誰にもわからないだろうね。僕が何も言わずにいると、今度はお父さんが、昨日の夜、僕のお母さんを食べた鬼がこう言ったんだ。なおきどうしたんだ？ いっぱい食べないと大きくなれないぞ。って。それで僕はわかったんだ。ああ、そうか。こいつらは僕を太らせて食べる気なんだなって。

その日から、僕とあいつらの戦いが始まったんだ。そうさ。僕は引きこもりなんかじゃない。僕は、あいつらと戦ってるのさ。この戦いにアリスを巻き込むわけにはいかないよ。これは家族をあいっらに食べられた、僕だけの戦いさ。部外者、しかも弱いアリスを巻き込むわけにはいかない。確かに一人で戦うのは大変だし、心が折れそうになる時もあるし、アリスみたいな子がいてくれたらなって、思うこともあるけど……。だけど、そんな理由でアリスを巻き込むわけにはいかない。

早く逃げるんだアリス。早く、自分の世界に戻るんだ」

8 . 茶柱誠

「はははは！！ マジでそんなこと延々と喋ったわけかよそのガキ。

それは相当筋金入りの夢見がちなガキだな。早く自分の世界に戻るんだ？ お前が現実に戻って来いよって話だよな！ ははははは！
！ご両親がこんな怪しい場所に相談に来るのも仕方がないと思っ
てしまふよ。全く、ご愁傷様って奴だ。

で、それを延々とありすちゃんに聞いてたわけ？ へえー、すごいな。ちゃんと黙って聞いてあげた？ うんうん。偉いぞありす君。下手に機嫌損ねるのも大変だ。そこは黙って聞くに限る。まあ俺は開始五分で音を上げる自信があるけどね。ああ、そう。やっぱり30分くらいで眠くなって半分聞き流してた？ でも、寝なかつたと偉いねー。

しっかしまあ、鬼か……。ははは。鬼なんているわけないのにねえ。一体どうして自分の親を鬼だと思っちゃったんだろうね。いつたいそのガキは、何を見ちゃったんだろうね？ まっ。想像はつくけども？

ん？ どうしたんだいありす君。そんな反抗的な目で俺を見て。ああなるほどわかった、お口が寂しいんだな？ まあまあ待ちなよ。今、この大きな大きなキャベツの芯をその口に入れてあげるからねー。あははは。今日はお仕事を頑張ったありす君のために、野菜炒めも昨日の倍作っちゃったからね。まだまだいっぱいあるよー。遠慮せずにたんとお食べ。

おいおいどうした？ 口を開けないと、ありすの大好きな大好きなキャベツが食べれないぞ？ 全く仕方ないなあ……。自分で口を開けないなら、俺が開けてやるしかないな。うん。それしかないん？ おいおいありす。そんな目で俺を見るなよ。俺はお前の健康を思っ
て野菜を食べさせてやってるんだぜ？ いいことしてるんだぜ？ 聖者レベルのいい奴だぜ？

そんな俺を、まるで鬼を見るような目で見ちゃダメじゃないか」

「今日は泊まっていけ？　そして私の代わりにキャベツの芯を食べる？　……嫌です。キャベツの芯くらい頑張つて食べなさい。」

社長が鬼？　……まあ、そうかもしれないですね。あの社長は、笑いながら人殺しの準備をして、笑いながら人を殺して、笑いながらその後始末をして、笑いながら被害者家族にお悔やみを申し上げて、笑いながらその後も生活して、笑いながら捕まつて、笑いながら取り調べを受けて、笑いながら死刑になつて、笑いながら独房で生活して、笑いながら首を吊つて、笑いながら生き返るような社長ですからね。鬼かもしれないですね。でも、野菜炒めを無理やり食べさせるまでその事に気づかなかつたあたりすもどうかと思いますよ？

はいはい。わかりました。社長に対する不満はまたいつか聞きまします。今はそんなどうでもいいこと言つてないで、寝ておきなさい。社長から聞きましたよ？　よくわからないことを延々と話されたようです。おそらく今日もそうなるでしょう。なおき君の母親の口ぶりから察するに、あなたが初めてのお友達というわけではなさそうですね。

しかしある意味ラッキーでしたねあります。あなたは、ただ、黙つて、寝ないで、その話を聞き流して入ればいいんですから。それだけでお金がもらえるなんて、楽な仕事です。まあ、依頼が話し相手ではなく、人格矯正だったら大変だったかもしれませんけどね。

ああ。それとあります。まあ多分大丈夫だと思いますけど、一応油断しないように……寝てるし」

5 - 4 ・ 食人嗜好

10 ・ 見習ありす

夜。誠というオニに毒を食べさせられる。昼。毒が体内に残っている。ので寝て体力回復する。夕方。栞ちゃんに連れてかれてなおきの家に行く。そしてなおきのよくわからない話を、眠気をこらえて聞き流す。そして夜。また毒を食べさせられる。

そんな地獄が三日続いた。死ななかつたのが不思議だった。わたしはわたしを褒めてあげたい。毒をあんなに食べて、よく死ななかつたなあ。と、しみじみ思う。と同時に、誠への憎悪が、ふつつつと沸き起こる。と同時に、眠気がむにやむにやとやってくる。むにやむにや。

ここ三日はよく眠れなかった。いつもわたしは、十二時間は眠る。眠いからそのくらいは当然寝る。でも、ここ三日は八時間しか眠れなかった。八時間はつらい。つらすぎる。しかも眠りが浅かった。野菜炒めの夢を見る。誠がわたしを具材にして野菜炒めを作る夢。すっごい怖い。だから眠りが浅くなるのも仕方がない。

誠に夢の話をしたら、夢にまで見るくらい野菜炒めが好きになったんだねー。俺も頑張ったかいがあったよー。はーはっはっはっ。って、言ってた。すっごいむかついたから殴りかかったら、簡単にあしらわれた。栞ちゃんに車の中でその話をしたら、だいぶまいつてますね。って、どうでもよさそうに同情してくれた。栞ちゃんは優しいなー。と思いつながら、わたしは寝た。

車に乗っていると眠くなる。栞ちゃんの運転だとなおさら眠くなる。栞ちゃんは朗読といい運転といい、色々眠くなる。これはもう超能力レベルだと思う。もしかしたら栞ちゃんも、人間の皮を被ったオニなのかもしれない。エスパーじゃなくてオニ。眠らせて、子どもを捕まえて食べる。大人には効かない理由は、子どもしか食べない

からだ。

『子どもの肉は柔らかくて、筋もあまりないから食べやすい。眼も舐めると美味しいらしいし、骨はいいダシが出る。耳もコリコリしていて美味しい。内臓も汚れてないから、簡単に食べられる。観賞用にも適している。だからあいつらは、僕を囮おとりにしてアリスを連れしてきたんだ』

「アリス？ 寝てしまったの？」

「んっ……！」

なおきの呼びかけで、わたしは夢現ゆめうつから現うつに戻った。ここがどこか一瞬わからなくなる。周りを見る。使っていないランドセルやサッカーボールがかけである勉強机。子どもっぽいカーテン。タンス。腰から下は布団の中のなおき。わたしはその前で、座布団にちょこんと座ったまま、なおきの話を聞き流していた。聞き流していたら眠くなつて夢現に入り込んでいたようだ。

「アリス眠いの？」

なおきが微笑みながら言ったその言葉に、わたしは頷いて同意を示す。

この三日。わたしはずっと眠かったけど、我慢していた。しかし、今日から夕食が野菜炒めじゃなくなるという安堵があつて、ついつい寝てしまった。いや、寝てない。半分。完全じゃなくて半分。半分だから朶ちゃんも許してくれると思う。あ、そもそも朶ちゃんに寝ていたことを報告しなければ大丈夫だ。

「眠いならここで寝ればいいよ。大丈夫。ここは安全だから」

自分の横のスペースをぼんぼんと叩きながらそう言ったなおきは、わたしが首を横に振ると少し残念そうな顔をした。そんなにわたしと一緒に寝たかったのかな。と思いながら、あくびを噛み殺す。仕事中に寝ることは残念ながら許されない。だから、我慢。

なおきの話によると、この部屋は安全らしい。この部屋ならオニは襲つてこれないらしい。理屈はわからない。なんか言つてた気がするけど、忘れた。だからなおきはここにこもつて、来るべき日に

備えている。とか言ってた気がする。

三日。三日間、なおきは飽きもせず、ずっと話していた。わたし以外とは話さないから、一日分の会話量を消費しようとするかのごとく、わたしがいる三時間。ずっとわたしに話していた。

アリスと話するのは楽しい。と、なおきは言っていた。ずっと一緒にいたい。とも言っていた。でも、危ないから早く逃げて。とも言っていた。どうして逃げないで毎日来るの。もしかしてアリスも逃げられないの？ それとも僕のことか……。とかなんとか言ってた。眠かったからてきとーに聞いてたのでよく覚えていない。

昨日。なおきはずっと喋っているのに疲れたのかはわからないけど、いきなりわたしについて尋ねてきた。どういうところに住んでいるのか。家族はとか。外はどうなのか。わたしは、てきとーに色々言った。具体的に何を言ったかはほとんど覚えていないけど、誠が野菜炒めを無理やり食べさせてくるから困っている。とは、言った気がする。そしたら、そいつもオニだね。僕たちは同士だ。世界中に隠れてるオニと一緒に戦おう。みたいなことを言っていた。オニというところだけには同意したので、頷いておいた。という話を誠にしたら、笑顔でキャベツの芯を口に詰め込まれた。泣いた。そしたら、泣く子は大きくなれないぞー。とか意味不明なことを言いながら、お肉を口に詰め込まれた。なんか泣いた。

誠は間違いなくわたしをおもちゃ扱いしていると思う。別におもちゃ扱いするなどは言わないけど。寝るところと、野菜以外の食べ物を与えるならそのくらい別にいいけど。でも、最近の誠はちょっとやりすぎな気がする。おもちゃにも、人形にも意思があることを知ってるくせに。わたしの意見も聞いて欲しい。

「アリス寝ちゃった？」

「……………寝てない」

また夢現に旅立っていた。今日は、ほんと眠い。

なおきがわたしを見てくすくすと笑っている。不快。なおきはここ三日で、わたしに慣れたみたいで、ちょっと馴れ馴れしい。不快。

でも我慢。

「眠いなら遠慮しないで寝てもいいんだよ。だってアリスは僕みたいに安全な場所がないんだから夜も眠れないんだ。昨日話してくれた夢の話。その夢は、オニがアリスに見せているんだよ。アリスを精神的に弱らせて、食べる機会を待っているんだ。僕も同じことをされたからわかるよ。僕もアリスが見たような夢を見たことがある。オニが僕を肉切り包丁で解体する夢なんだ。ホントに怖かったよ。でも僕は負けなかった。僕はね。その夢を逆手に取ったんだ。これがオニからの攻撃なら逆にこの夢を使って」

「……」
なおきがまた話し始めた。なおきの話は、栞ちゃんと同じで、聞いていると眠くなる。でも、栞ちゃんとは違う。栞ちゃんの場合は、聞いているうちに眠れる。なおきの場合は、聞きたくないから眠くなる感じ。

どっちの方がいいのかは、言わなくてもわかること。

11・鼎栞

「ただいま戻りました」

19時前後。仕事から戻ってきた私が中に入ると、社長が机に突っ伏していた。暇の極致。

「栞ちゃんおかえりー。あれ？」

顔をあげた社長が私の方を見て、首を傾げる。

「ありす君は一緒じゃないのかい」

ここ三日は、途中でありすを拾い、ありすと一緒に帰ってくるのが日課だった。しかし今日は私の横にありすはいない。もちろん背中にもいない。

「ちゃん言っな。見ての通り一緒ではありません。社長。これどうぞ。おすそ分けです」

なんだかようやくツツコミを入れられた気がした。社長ではなく

ありすに言いたかったような気がしないでもないが、まあいいだろう。私は奇妙な達成感を抱きつつ、木下さんにもらった肉を一パック、袋から取り出し、社長の机に置いてから、自分の机に座りパソコンを立ち上げる。

ああ疲れた。家庭教師というのは結構疲れる仕事だ。何が疲れるって、相手に理解させるのが疲れる。あのくらいさつさと理解して欲しい。

「なにこれ？　ありす君、精肉されちゃった？」

社長がパックの肉を突きながらバカなことを言った。

「違います。豚肉です。木下さんから頂いたものです」

「これとありす君を交換してきたの？　栞君。それはさすがに薄情過ぎない？」

「違います」

私は、今日の仕事をパソコンに打ち込みながら、どういう経緯でこの肉をもらったかを社長にテキストに説明した。

私はいつも通り、バカな学生相手の家庭教師を終え、木下さん宅にありすを迎えに行った。木下さん宅はまだ営業中だったため、裏口に回った。これもいつも通り。そして裏口で木下さんに出会う。これもやはりいつも通り。しかし、ここからがいつも通りではなかった。いつもならここから、テキストに世間話をした後、ありすを連れて、ではまた明日！。という感じなのだが、今日は違った。木下さんが、ありすを今日泊めてもいいですか？　と聞いてきたのだ。私が、はあ……？　と首を傾げてしまったのは言うまでもない。

木下さんの話によると、私に来るちよつと前になおき君が二階から下りてきて、今日ありすが泊まりたいと言っているから泊めていいか。と、聞いてきたらしい。木下さんは驚き、そして泣いたらしい。もちろんうれし泣きだ。なんでも、一年ぶりに、なおき君から話しかけられたらしい。なんというか、おめでとunggざいます。という感じである。

私はその話を聞いたとき、はて。ありすがそんなことを言うかし

らん。と思つたのは言うまでもない。そして思つた後すぐに、まあ言うかもしれないなあ。と思つた。なぜすぐに考えを改めたかというと、まず第一にありすは寝れるならどこでもいいや。と思つていゝる気がしたからである。恐らく、なおき君の電波を聞いているうちに眠くなり、寝た。そして起こされ、帰るのが面倒になつたのだらう。さらに第二に、最近ありすは社長とケンカしている。ケンカといつても、部外者である私から見れば、じゃれあつていゝるようには見えないが、ありすが怒つていゝるのは確かだ。全く、野菜炒めを無理やり食べさせられた程度で、プチ家出とは……子供だ。

とはいへ。なんだか嫌な予感がしないでもなかつたので、私は一応ありすが本当にそう言つたか確認する事にした。ありすはまだなおき君の部屋にゐるといゝること、私はなおき君の部屋に向かつた。部屋ではありすが座りながら寝ていて、なおき君が布団に潜り込んで寝ていた。いや、二人とももしかしたら寝ていゝなかつたかもしれないが、私の主観としては、ありすは寝ていゝると言つて間違いない。ありすは虚ろな目をしていゝた。夢現を彷徨つていゝたのだらう。私が肩を揺さぶつても戻つてこゝなかつた。ありす起きましたか？と尋ねると、カクンと、首が折れたのではなかるうかといゝる感じで頷いた。その後、ありす寝てますか？と尋ねると、カクンと頷き、今日はここに泊まるといゝのは本当ですか？と尋ねると、カクンと頷き、本当は泊まりたくないんですか？と尋ねると、カクンと頷いた。まるで壊れた人形のように同じ動作しかしなかつた。きつと壊れていゝたのだらう。

私は連れて帰ろうとも思つたが、木下さんがお礼の気持ちです。どうぞ受け取つてください。といゝって肉をくれたので、まあいいかと思ひありすを置いて戻つてきた。だつて仕方ないじゃないか。ありすが泊まりたいといゝっているんだから。ありすも引きこもりみゝいなものだから、私は常々、ありすはもつと外に出て遊んだ方がいいと思つていゝたので、今回のお泊り。私は大賛成である。

「つまり、栞君はありすより肉を選んだといゝうわけか」

私がそんな感じのことをつらつらと説明したところ、社長は呆れ顔でそう言ってきた。だって仕方ないじゃないか。霜降り肉おいしそうだったんだもの。もちろん、社長におすそ分けした肉は質が悪いものである。質がいいおいしそうな肉は、今日の私の晚餐になる予定である。ステーキだー。

「まあいいけどね。いや、よくないか。せつかくありすのために作った、野菜炒めデラックスが無駄になっちまった」

社長がニヤリと悪そうに笑いながら言ったその言葉に、私は、おや？ と思った。確か昨日で野菜炒めは終わりではなかったか。今日の午前中、あと車の中でありすが、ここ三日は私の嫌いな野菜炒めを食べさせられたんだから、今日は巨大ハンバーグがカツどんを作ってもらうんだ。とかなんとか言っていたような気がしたが。それに対して社長も、はいはいわかったわかった。とかなんとか言っていたような気がしたが。気のせいかな？

「社長。今日は野菜炒めはやめるとか言ってますでしたか？」

「ああうん。言った。でも、急に突然突発的に衝動的になんだけどさ。野菜炒めが食べたくなってね。ホント不思議だよなー」

「……はあ」

ニヤニヤ笑いの社長を見て、さすがの私も呆れてため息をついてしまった。

「社長。ありすを苛めるのもほどほどにした方がいいですよ？」

「苛めてるつもりはないんだけどねー」

クルクルと器用にパックを皿回しのように指で回して遊んでいる社長には、悪気や反省の色は一切見られない。しかしそれもある意味当然のことだ。

「訂正します。ありすで遊ぶのもほどほどにした方がいいですよ？ そのうち逃げられるんじゃないですか？」

社長はありすを苛めているつもりは一切無い。遊んでるだけだ。

おもちゃで遊んでいるのと同じこと。そこに悪気があるはずがない。あるのはただ、楽しいという感情だけ。楽しい事をして反省するわ

けない。

「やだなあ栞ちゃん。俺を甘く見ないでもらいたい。逃がさず殺さずが、ありす君と遊ぶ上で最低限のマナーだ。俺がそのマナーを守らないとでも思っているのかい？」

最低限のマナーではなく、サイテーのマナーの間違いではないだろうか。

「だろだろ？ わかってるじゃないか。俺はこう見えて、結構優しいんだぜ？」

「……」

もし。もし万が一、社長が一人でいる時、今みたいに何かを尋ね、まるで同意を得たように独り言を喋っていたとしたら、社長はこう見えて、かわいそうな人なんだなあ。と、さすがの私も思わずにはいられない。

社長がかわいそうな人なのかはとりあえず保留しておくことにして、私はパソコンを閉じ、帰宅の準備と、ありすの着替えやらを持つていく準備をすることにした。

5 - 4 ・食人嗜好（後書き）

四話でまとめきれなかったorz

5 - 5 食人嗜好（前書き）

なげえ
……

5 - 5 ・ 食人嗜好

12 ・ 見習ありす

「……………」

うつすらと光が見える。目を開けた。つまり寝てた。つまり起きた。目の前になおき。顔が近い。なぜ。よくわからない。座ってる。つまり座ったまま寝てた。ここどこだろう。なおきの部屋。つまりなおきの部屋で寝てた。

「アリス起きたの？」

なおきが何か言った。顔を覗き込まれる。近い。気分が悪い。離れる。

「あ、ごめん。あの、ほら、アリスがあいつらに変な夢を見せられてたら大変だと」

慌ててる。言い訳。とりあえず首を縦に動かす。ホツとしてる。よくわからない。目をこする。眠い。あくび。今何時だろう。

「今何時」

「もう八時だよ。アリスおはよう。気持ち良さそうに寝てたね。寝顔、可愛かったよ」

八時。たぶん夜の八時。栞は？

「栞は？」

「しおり？ 急にどうしたの？」

使えない。帰ろう。立ち上がる。フラツとした。まだどこか寝てる。早く起きろ。

「アリスどこに行くの？ 今日はこちらに泊まるんだよ？」

「……………」

「アリス怒ってる？」

「怒ってない。眠いだけ。なんでわたし泊まるの？」

「……………」さあ、僕にもわからない。オニが来て、今日はアリスを泊め

るって言うてきたんだ。アリスをいつも迎えに来てる人も賛成してたよ。きつと、アリスをついに食べる気なんだよ。だから今日はこの部屋から出ない方がいいよ。アリス、食べられちゃうよ」

「……」

よくわからない。家に帰れない？ どうして。捨てられた？ よくわからない。

とりあえず、菜のバカ。

よくわからないまま、太ったおばさんに夕ご飯ですよと呼ばれた。メニューはとんかつに豚汁だった。ここ最近、ずっと毒しか食べていなかったわたしには、ごちそうだった。太ったおばさんが、遠慮しないでおかわしてねと言ったので、遠慮せずおかわした。サクサクしてジューシー。とても美味しかった。野菜は嫌いだけど、とんかつのキャベツは別だ。とても美味しい。毎日こんな食事を食べれるなら、ずっとここにいてもいいとさえ思った。

なおきも横で食べていたけど、まるで借りてきた猫のように静かに食べていた。太ったおばさんとメガネのおじさんは、そんななおきとは反対に、ご機嫌だった。なおきとこうやって一緒に食べるのは久しぶりだとか、ありすちゃんのおかげだわとか、いっぱい喋っていた。楽しそうで何よりだと思った。わたしは、喋る暇があるならとんかつを口に運ぶ。を選んだので、てきとーに相づちを打ちつつ聞き流していた。なおきは相づちも打たず、もくもくとご飯を食べていた。

いっぱい食べて、久しぶりに心地よい満腹感を得て、幸せを感じていると、太ったおばさんが、お風呂沸いてるからどうぞ。と言ってきて、着替えをくれた。わたしがいつも使ってるパジャマだった。どうしてここにあるの？ と尋ねると、鼎さんが持ってきてくれたのよ。と、太ったおばさんが教えてくれた。鼎さんって誰だっけ。と一瞬思ったが、すぐに菜ちゃんの名前だと思い出した。そして同

時に、ある疑問も思い出した。

どうしてわたしは今日ここに泊まるの？ わたしがそう尋ねると、太ったおばさんは不思議そうな顔をして、ありすちゃん泊まりたいて言っただんじやないの？ なおきがそう言っただわよ？ と言ってきた。

そんな事言っただ覚えはない。わたしは、隣に置物のように座っているなおきを見た。なおきは逃げ出した。よくわからない。後を追おうかと思っただけど、先にお風呂に行く事にした。ご飯の後のお風呂は、さいこーである。その誘惑に勝てるほど、わたしは大人ではないと自覚してる。一緒に入りましょうか。と提案されたけど、遠慮した。一人でお風呂に入れるくらいには大人だということを、わたしは自覚してる。

お風呂は普通のタイル張りだった。子どもなら三人。大人ならぎりぎり二人は入れるくらいのお風呂だ。家のお風呂はこれよりちょっと小さいから、いつもよりちょっと大きなお風呂に入れて、いつもより気持ちいい。眠くなってきた。

そういえば、家には二つお風呂がある。わたしの部屋と誠の部屋に一つずつ。普通家には、お風呂は一つなのになんでだろうと思っただ事があった。誠に聞いてみた。誠は、この建物は二世代住宅用に作ったんだよー。って言っただ。わたしは、マンションにしようと思っただから二つあるのかな？ と考えていた。わたしがそう言うとき、誠は、あつ。そっちの方がそれっぽいな。と言っただ。誠はてきとーに生きてると思っただ。

「……眠い」

危なく溺れるところだった。早く出よ。ねむねむと思しながら、お風呂から上がったタオルで体を拭く。そして栞ちゃんが持つてきてくれたパジャマに着替える。

「？」

着替えていると、後ろから視線を感じた。脱衣所の入り口の方だ。振り向く。が、誰もいない。でも、まるで今さっきまで誰かが覗い

ていたみたいに、扉が少し開いていた。

「……まあいいや」

でもまあ、そんなことどうでもいいので、わたしは気にせず着替えを済ませ、ぽかぽかと湯気を頭から出しながら、どこへ行く？ わたしはもう眠いので、出来れば柔らかいふわふわな布団がある部屋に行きたい。そもそもわたしは今日どこで眠るんだろう。なおきの部屋？

「ありすちゃん。お風呂から上がったの？」

わたしがどこ行くのかなあ。と、廊下でボーっと考えてたら、太ったおばさんが居間から顔を出した。わたしはとりあえず頷いておく。

「じゃあちよつとこつち来て。髪、乾かしてあげる」

手招きされた。別に断る理由もないし、どこで寝ればいいのかも聞かないといけないので、わたしはおとなしく招かれる。

居間にはメガネのおじさんもいた。お茶を飲みながら新聞を読んでいる。そういえば、誠が新聞を読んでいるところを見たことがないでもなぜか、部屋には新聞がある。

太ったおばさんはドライヤーでわたしの髪を乾かす。こそばゆい抵抗する理由もないので、されるがまま。なんとなく、懐かしい気がしないでもない。

「ありすちゃん髪サラサラね。とっても綺麗よ」

「ありがとうございます」

褒められたらお礼を言っておけという教えに従い、お礼を言っておく。途中で敬語にもちゃんと変更したし、わたしは偉い。

しばらく太ったおばさんに人形扱いされた。髪を乾かし終えた後、太ったおばさんは、やっぱり女の子も欲しいですね。と、メガネのおじさんに微笑みかけていた。メガネのおじさんはお茶を噴き出していた。お茶が変なところに入ったんだと思う。なんで入ったかはわからないけど。

太ったおばさんに、わたしはどこで寝ればいいんですか？ と尋ねたら、最初はなおきが自分の部屋で一緒に寝たいって言ってたから、なおきの部屋に布団を敷こうと思っただけで、鼎さんがどーとかこーとかだから、確かに言われて見ればどーとかこーとかだから、和室に布団を敷いておいたからそこ使って。という答えが返ってきた。

太ったおばさんに案内されて和室についた。和室は、居間の向かい側のふすまの向こうだった。和室の隣には階段とトイレ。怪談の向こうにはもう一つ部屋がある。たぶん、太ったおばさんたちの部屋だと思う。トイレの横は洗面所。

和室は和室というだけあって、畳だった。柱には、古い小さな振り子時計がかけてあって、部屋の中央には布団が一組敷いてあって、なんて書いてあるかわからない掛け軸が、床の間に飾ってある。和室独特の香りがする。この香りはあまり好きじゃない。あんまり和室って使ったことないから慣れてないだけかもしれないけど。

「ありすちゃん。もう寝るの？」

「はい、もう寝ます」

「そう……寝る前に、なおきに一声かけてあげて。さっき、居間に来て、ありすはどこ？ って聞いてきたから」

太ったおばさんは、ちょっと嬉しそうにそう言うてから、おやすみなさい。と言って和室から出て行った。たぶん、なおきに話しかけられて嬉しかったんだと思う。

「……………ふぁ」

太ったおばさんがいなくなって、とりあえずあくびが出た。今すぐこの布団に寝転がりたいけど、一応、依頼人の要望には答えないと。和室を出て、すぐ横の階段を上がって、なおきの部屋に向かう。どうでもいいけどこの階段、音がしておもしろい。

一応ノックしてから、部屋に入る。部屋ではいつも通り、なおきが布団を被って隠れていた。わたしが声をかける前に、なおきは布団から顔を出した。どうやら入ってきたのがわたしだとわかったら

しい。不思議。

「アリス。何の用？」

なおきの言葉にはトゲが含まれている感じがした。怒ってる？

「寝る前に、一声かけておいてって頼まれたから」

わたしは正直者。

「頼まれたって、あのオ二に？」

なおきの目は、わたしを責めているようにも見える。

「アリス。どうして僕の部屋で寝ないの？」

そんな責めるようにどうしてと言われても、それはわたしのあずかり知らぬところなので、わたしは首を傾げるしかない。

「アリス。君はわかかってないよ。今君は、とても危険なんだよ。ちよつと優しくされただけで油断して。どうしてあんなにご飯を食べたのさ」

だつて美味しかったんだもん。

「あれはアリスを少しでも太らせようという、あいつらの罠だよ。それに、どうしてあんなにゆっくりお風呂に入ったの？ どうしてあんなにキレイに体を洗ったの？」

だつてお風呂ってそういうものだし。

「あいつらがアリスにお風呂に入るように言ったのは、アリスを洗う手間をはぶくためさ。どうしてそんなこともわからないの？ その証拠に、お風呂から出たらすぐにキレイになったか確認してたでしょ？ 髪を乾かすなんていう最もらしい理由をつけて」

相変わらず、なおきの話は眠くなる。きつと、話の内容が不愉快だから。聞いていたくないから眠くなる。前、お母さんを殺してくれとか言っていた男の人と、なおきは同じだ。

「見てた？」

だから自然と、口調が不機嫌になるのはしかたない。

「え、あ、いや」

なおきはわかりやすく動揺した。見てたみたい。気持ち悪い。

わたしはあくびをしながら、おやすみなおきに告げて、部屋を

出た。なおきからおやすみの挨拶は返ってこなかった。

和室に戻って、布団に転がる。硬い。下が畳だから？ それとも布団の質？ たぶんどっちも正解。家のベットのほうが、寝心地がいい。枕も硬い。灯りを消す。いつもと違う風景。いつもと違う匂い。いつもと違う布団と枕。色んな理由でいつもより寝心地は悪い。それでもわたしはすぐに眠れる。そういう風に、わたしは出来てる。

13・見習ありす

「……………」

暗い。起きた。なぜ起きた？ 物音。トイレ。時計。丑三つ時。眠い。あくび。トイレ。襖を開ける。トイレ。洗面所。鏡。自分。こんにちは。手を洗う。洗った。あくび。眠い。寝る。「アリス」呼ばれた。階段。なおき。「こつちに来て」呼ばれた。眠い。だから行かない。部屋に戻る。「いいから」手を引かれる。眠い。「静かに、ほら、あれ見て」部屋。覗く。おばさん。おじさん。一つ。「共食いだよ」意味がわからない。眠い。「アリス。どこ行くの」布団の中。「アリス。早く逃げよう。あいつらは一つになってパワ―アップする気なんだ。きつともう、僕の部屋も安全じゃない」眠い。どうでもいいけど眠い。「だからアリス。一緒に逃げよう」どうでもいいから眠い。「ほら、しっかりして。早くこつち」……………眠い。「何言ってるんだいアリス。早く靴を履いて。ほら、早く……………もう、仕方ないな」あくび。眠い。もう、なんでもいいから寝かして。「アリス。君の家はどっち？ 君の家に逃げるんだ。君の家のオニは夢にしか干渉してこない。だからここよりは安全なんだ」……………家？」「そうだよ。アリスの家」……………寝れる？」「……………あ、もちろんだよ。だから早く案内して」寝れるならどこへでも行く。家に帰る。道を知らない。車ない。柔もない。でも。帰れる。パンもない。小石もない。でも。家の場所はわかる。

人形が、呼んでるから。

ああ。まったくいい満月。でもあれよねー。飽きるのよねー。いつも同じ角度。いつも同じ風景。この月にはもう飽きた。あーあ。早く誰か来ないかな。来ないか。こんな草木も眠る時間過ぎ。起きてるのは。お化けと妖怪と神様と。人形だけ。クスクス。あーあ。つまらない。ホントにつまらないわ。

「ここが、アリスの家？」

あら。ありすじゃない。おかえりー。

「……今、声がしなかった？」

隣にいるのは彼氏？　クスクス。こんな夜更けに男を連れ込むなんて。何する気なの？　クスクス。ませがきめ。

「ね、ねえアリス？　女の人の、こ、声聞こえない？」

無視か。相変わらず無視か。あーあ。あなたは結構あたしの好みなだけどなあ。どうして無視するの？　あたし悲しい。悲しくて悲しくて泣いちゃいそう。クスクス。涙なんてないけどね。

「も、もしかして……」

そうよ彼氏？　あたしが喋ってるの。何か文句ある？　って。待ちなさいよありす。もう少しあなたの彼氏とお喋りさせなさいよ。クスクス。大丈夫。あんたから盗ったりしないわ。ちよっと借りるだけ。だから。ね？　ほら。彼氏も怖がってないでもっと近寄りなさ

い。大丈夫よ？ 盗って食ったりしないわ。まあ。クスクス。ちょっと借りて。もらっちゃうかもしれないけどね？

「ア、 アリス、 早く行こう！」

クスクス。ちよっと怖がらせすぎたかしら。まあいつか。あの坊や。あたしの好みじゃないし。しかし。あのありすが男連れね。クスクス。ほっとくべきかしら？ 助けるべきかしら？ どっちの方が楽しいかしら。どっちの方が。暇を潰せるかしら…

15・見習ありす

「ア、アリス！ あの人形はなに！？ なんで喋るの！？」

うるさい。喋るものは喋るんだから別にいいじゃないか。わたしだって、よくわからないんだから、耳元で叫ぶな。無視するのが一番だ。って、誠に言われてるから無視する。あの人形についてはそれだけ。あと、迷子の時に利用して、お客さんと呼ぶ時に利用する。それだけ。招き猫みたいなもの。って、菜ちゃんは言っていた。

玄関を開ける。カギはなぜか、かかっていた。家に入ると、真っ暗。窓がないから灯りを点けないとほんとに暗い。でも、わたしは暗くても大丈夫。空調も止まっているから、空気がちよっともわっとする。不快。早くいこ。

「く、暗いねアリス。君はこんな場所で生活してるのかい？」

怯えるなおきの手を引いて、二階に向かう。結構歩いて疲れた。早くふかふかベットに飛び込んで寝たい。太ったおばさんの家の階段よりも急で、硬い階段を上る。後ろでなおきが息を切らしている。菜ちゃんと同じで、体力がない。引きこもってるからだ。

二階についた。わたしの部屋。一階と同じで真っ暗。空調が動いている音がする。誠が切り忘れたみたい。ダメな奴だ。

「ここが、アリスの部屋？」

なおきの言葉には、繋いでいた手を離すことで答える。汗でべとべととしていて気持ち悪かった。ようやく解放された。なおきが慌てている気配がするけど気にせずわたしはベットに向かう。そして、ベットに飛び込む。

ああ。ふかふか。柔らかい。やっぱりここが一番寝心地がいい。枕もいい感じ。ああ、すぐに眠れそう。

「アリス……！ アリスどこ……！？」

なおきが押し殺した声で叫んでるのが聞こえる。わたしを探しているみたいだ。うるさい。わたしは眠い。あのままじゃ眠れないから、面倒だったけどここまで連れてきたのに。まだわたしの眠るのを妨害する。なおきは、一体何をしたいのかな？

まさか、ほんとに親がオニだと思ってて、逃げたのかな。もしそうなら、バカだな。まあいいや。早く寝よ。

わたしがなおきをほっという寝ようとしたとき、部屋の灯りがついた。なおきがドアの側にあつたスイッチを入れた。眩しい。どこまでわたしの邪魔をするんだろう。目を守りながら、「消して！」となおきに言う。明るいと眠れない。というわけでもないけど、暗い方がよく眠れる。

「ごめん……」

なおきがそう言っつて、灯りが消えた。また真っ暗になった。よかった。これで寝れる。布団にもぐり、睡眠体勢。誠が空調をつけっぱにしてあつたから、寝やすい。誠に感謝してもいい。おやすみなさい……。

「ん……？」

夢の世界にこんにちはしようと思つたら、ベットがきしんだ。ベットに誰かが入ってきたからだ。誰かといつても、なおきしかいない。そうか。なおきも寝たいのか。ここにはベットが一つしかないから、このベットで寝るしかない。仕方ない。貸してあげることにする。

このベットは大きいから別に問題ない。大人でも三人は寝れそう

なベット。わたしのお気に入り。こんなベットを買ってくれた誠には、それなりに感謝している。

広いといっても、それなりにスペースを開けてあげようと思ってわたしはなおきが入ってきた方とは反対に転がる。これで寝返りしてもお互いにお互いの睡眠を邪魔しない。いいことだ。なおきに背を向けた状態で、目をつむる。今度こそこれで、「おやすみなさい……」

「アリス……」

三度目。わたしの睡眠を邪魔したのはこの短時間で三度目。なおきが小声でわたしを呼んだ。呼んだだけではなく、距離もつめてきた。

「なに」

わたしは、わたし不機嫌というのを隠さずアピールしながら、なおきの方を向く。なおきが思ったより近くについてビツクリした。距離を取る。肩を掴まれる。「痛い！」抑えられる。痛い。暴れる。痛い。仰向け。馬乗り。重い。苦しい。なに？

「アリス。ごめんねアリス」

暗闇。だけど見える。なおきの顔が。滲んでる。涙？

「ごめんねアリス。僕、頑張ったんだけど無理だったんだ。ごめんねアリス。嘘をついてごめん」

なおきの顔が見える。なおきは笑ってる。

「僕も、オニだったんだよ。だって僕は、君を食べたくて食べたくて仕方がないんだ」

ほんとに嬉しそうに。笑ってる。

オニの笑み。

オニの顔がわたしに近づいてくる。

近づいてきて、そして

5 - 6 ・食人嗜好

16 .

おーい。おーい。おーい。おーい。おーい。クスクス。おーい。おーい。おーい。おーい。おーい。おーい。クスクス。おーい。おーい。おーい。おーい。

「……………目覚ましにはまだ早いんじゃないかな『あたし』」

あら。やっと起きた。クスクス。おはよう。あ。なた。

「おやすみ『あたし』」

あ。ちょっと。寝ないですよ。用事があって起こしたのよ？ 寝かれたら困るわ

「なら、さつさと用件を言えよ『あたし』。ふざけた事言っていないでさ」

なによ。あなたはあたしを道具扱いするんだから。たまにはからかったっていいじゃない。

「たまにならいいんだけどねえ。頻度多いんだよ。夜中にいきなり話しかけてくるな」

頻度が多い？ クスクス。気のせいじゃない？ それに昼間はたまになんだから。感謝して欲しいくらいよ。しかも逆に。あなたの話し相手をしてあげてるのよ？ クスクス。褒められてはしても。怒

られることはないと思うけど？

「俺が『あたし』の暇つぶしの相手をしてやってるんだよ。そういう約束だから仕方なくね。で、何の用だい？ こんな新聞配達のパイトをしている貧乏少年しか起きていなそんな時間に俺を起こしてさ」

別に。ただありますが帰ってきたから教えてあげようと思ってね。

「ありますが？ ああそう。そりゃよかった」

カギとか空調とか準備しといた甲斐があった。って？ クスクス。そんなことして待つてたなんて。バカみたい。

「バカみたいとは失礼だな『あたし』は。あらゆる不足の事態に備えたわけですよ。そんな俺、すごくね？」

はいはい。すごいすごい。

「だろ？ じゃ、おやすみ」

クスクス。今頃ありますは整った状況で。彼氏と何してるのかしら。

「……………」

あんなことやこんなことかしら。ああでもありますはそういうの興味ない。いや。知らないのかしら。クスクス。じゃあ今頃ありますは。いやん。あたし。想像しただけで。クスクス。笑いが止まらないわ。

「……………はあ全く。まさか一緒に来るとは思わなかったよ」

面倒だが仕方がない。そう言つて。誠はベットから起き上がり。少し急ぎながら。二階に向かった。

「『あたし』黙れ」

クスクス。ごめんなさいね。ああ。ホントあなたは最高ね。

「よく言われるよ」

あなたが女でもう少し弱かったらもつと最高だったのに。

「奇遇だね。『あたし』が人間だったら最高だったと、俺も思つた」

あらそうなの。クスクス。あたし達。ほんと波長が合うわね。どう？ 今からでも遅くないから。あんな人形じゃなくて。あたしをあなたに入れてみない？ この際。男だつて構わないわ。うん。あたし。我慢する。

「俺が我慢できねえよ」

17・見習ありす

近づいてきて、そして 吹っ飛んだ。

「まったく、なんで俺がこんな事をしないといけないんだよ……全て柔のせいだな。肉程度で、ありすを置いてくるからいけないんだよ。明日説教」

首を横に動かす。いつの間にか誠が立っていた。暗闇だし滲んでいてよく表情はわからないけど、不機嫌そうだ。

「やあありす君。生きてる？」

誠がいつも通り笑った。体を起こされる。「ふむふむ……」ペタペタと触られる。涙を拭かれる。なにしてる？ 首を傾げる。ペチペチと頬を叩かれる。「起きてる？」首を横に振る。「混乱中か」首を傾げる。

「ゲホツ……！」

誠の後ろから声が出た。見る。なおきが壁の近くで苦しんでいる。いつのまに？ ワープ。超能力？

「あ、少年。生きてた？ ごめんね。暗くて誰かわからなかったから手加減できなくてさ。君だと知ってれば、もっと手加減したぜ？」嘘つき。という声が聞こえた気がした。

「それで少年。君はこんなところで何をしているんだい？ 何を、しようとしてた？」

誠がなおきに近づく。なおきは怯える。わたしは眠い。

「ぼ、僕は、な、なにも、だ、だから……」

「おいおい少年。そんなに怯えるなよ。ほら見てみ。俺、すっごい笑ってるだろ？ 笑ってるってことは怒ってないってこと。だろ？」

誠の顔はここからは見えない。だからほんとに笑ってるかはわからない。確認する気にはなれない。眠いから。

「そもそもさ。俺が怒るわけじゃないわけ。だってさ俺、別にありすの事どうでもいいと思ってるから。正直おもちゃ扱いなわけ。そんなに思い入れもないわけよ。だってさ世話が面倒なわけよ。わかるだろ？ 食事も作らなきゃいけないし。部屋も用意しなきゃいけないし。服も買わなきゃいけないし。しかも女の子なわけよ。それがまた面倒。そのせいで菜ちゃんも雇わなきゃいけなくなってさ。だから正直、いなくなったり壊れたりしたら、万々歳なわけ。まあ、人手が減るのがちょっと困るなあ。くらい？ そのくらいにしか思わないだから、お前がありがたすをどうしようかと別に俺は気にしないよ？ どうぞ好きにしてくださいって感じ。もうね、ご自由にどうぞお持ち帰りくださいってレベル。だから、俺は全く全然微塵も怒ってない

わけ。ご自由にどうぞって書いてある物を持っていった人に怒る人がいるか？　いないよな。そんな奴相当の捻くれ者かバカか人格破綻者なわけ。で、俺はひねくれ者でもバカでもない。わかつたか少年？　理解したか少年？　聞いているか少年？　俺は、怒ってない」

眠い。あくびが出る。なおきはもう邪魔してこないみたい。誠も邪魔しない。寝る。

「ぼ、僕は、ア、アリスを守ろうと……ま、守ろうとしたただけだ！」

うるさい。布団にもぐる。

「うるせえよ少年。殴るぞ」

「ヒッ……」

「おいおいそんなに怯えるなよ。嘘に決まってるじゃないか。ほれ、笑ってるだろ？　笑ってるって事はどういう事だ？　そうだよ。怒ってないって事だ。笑いながら怒る奴なんているわけないだろ？

いたとしたらあれだ。笑う事しか出来ない奴か、笑ってないと自分を自省出来ない程怒ってる奴のどっちかだ。俺は、笑う事しか出来ない奴じゃないぜ？」

誠もうるさい。枕でさらに耳栓をする。

「で、少年？　ありすを守ろうとしたって？」

「そ、そうだよ」

「そうか。立派じゃないか。女を守ろうとする男は立派だ。で、何からどうやってありすを守ろうとしたんだ？」

「オ、オニから……そうだ、オニからさ！　僕はオニからアリスを守ろうとしたんだ！　僕は何も間違っていない！　あいつらからアリスを守るのは僕しかいないんだ！　どうすればアリスをずっと守れるか僕はずっと考えてた！　一緒になればいいんだ！　一つになればいいんだ！　だから僕は」

「黙れエロガキ！！　てめえの話は聞き飽きた！！」

「ギャッ！！」

「二人ともうるさい！！　眠れない！！」

どうして眠るのを邪魔するんだろ。やっぱり誠はオニだ。わた

しの嫌がることばかりする。同じことするなおきも才二だ。

「おいこらエロガキ。お前のせいで俺までありすに怒られたじゃねえか。どうしてくれるんだ？」

「な、なぐった、」

「あん？　なんか文句あるか？　そうか。あるか。じゃあゆっくり聞いてやろう。しかしここだとまたありすに怒られるからな。俺の部屋に行こうか。安心しろ。取って食いはしねえよ。いや、むしろ逆だ。食わせてやるよ。ちようどありすの分の野菜炒めも残ってるしな。あ、念のためにもう一度言うけど、俺、怒ってないから」

「お、怒って」

「ない。ほら、行くぞー」

「い、いやだ。ア、アリス助けて！　食べられちゃう！　僕はこの才二に食べられちゃうよ！」

「残念。君のアリスはもう夢の中だ。つーかさ。守ろうとした相手に助けを求めるって情けくないか？　よし。依頼内容は引きこもりの相手だが、俺がお前の性根を叩きなおしてやろう。安心しな。

サービスって奴だ。金は取らないよ。俺は栞ちゃんとは違って、金にはあまり執着しないからね。じゃ、あります。おやすみ」

おやすみなさい。

わたしはようやく、眠れた。

18・鼎菜

『依頼内容：引きこもりの話し相手　テレビでいいじゃん。肉屋を経営している木下さんからの依頼。一人息子が引きこもりになってしまい、その話相手をお願いされた。息子さんは10歳ということ、ありすが適任。』

備考：依頼料金は日給五千円。とりあえず一週間との事。ありすの話聞く限り、なおき君はだいぶ電波が入っている。ありすに興味がある可能性もある。さらに社長曰く、夫婦の営みを目撃した可

可能性もあるらしいので、そちらに興味がある可能性もある。恐らく大丈夫だと思うが、一応ありすには注意するように言っておいた。服装もスカート類はやめた方がいいだろう。ありすは所謂無自覚美少女に分類され、そういう知識は少なくは教えているが、理解はしていないようなので、こちらが注意してやらなければならぬ。全く面倒だ』

「そこまでわかってたのに、何で栞ちゃんは、泊める何て事を許したのかな？」

「ちゃんじゃねえです。肉が食べたかったからですよ」

社長が私の依頼書を見て、呆れ気味に聞いてきたので私は正直に答えた。

私の返答を聞いた社長の笑みが引きつっている。この社長。私が思っていた以上にありすを大切に思っているようだ。昨日の話を聞き、私は本当に驚いた。

社長の話によると、その後、社長はなおき君と二人、楽しく野菜炒めを食し、なおき君の性根を叩き直し、タクシーでなおき君を家まで送った。そして、なおき君がいなくなった事にすら気づいていなかった木下さん夫婦に、「やるときは子どもが完全に寝たのを確認してやれ。性教育はしっかりしろ。というか子どもには、赤ちゃんはコウノトリが運ぶって事にしとけ。それがベストだろうが」と説教をしたらしい。社長曰く、木下さんは、俺の心を込めた真摯な説教に胸を打たれ感涙していたらしいが、恐らく、社長の怒りを込めた恐ろしい笑顔での説教に恐怖して、涙したのではなからうか。性根を叩きなおされたなおき君は、「もう引きこもりなんかやめません。ちゃんと学校行きます。ありすには手を出しません。オニなんではない。ごめんなさい。だから許して下さい」と、言っていたらしい。よかったね木下さん。という事にしておこう。

引きこもりがいなくなれば、引きこもりの話し相手という依頼は終了。というわけで社長は、その場で今までの料金を回収。ついで

にタクシー代も徴収して帰宅した。帰宅したら時にはもう、太陽が昇っていたらしい。お疲れ様ですって感じである。

しかし本当に驚きだ。本当に社長がそこまでしたのだろうか、疑うほどだ。ありすが襲われそうになっても、社長はほっとくのではないだろうかと思っていたのに。私だったら助けなかっただろう。だって眠いし。そもそも物音くらいで起きない。カギも開けておいて、空調も動かしておいて、ちょっとした物音でありすが帰ってきた事に気づいて様子を見に行くとは。おもちゃ扱い？ いやいや。もはやこれはあれだ。

「社長が娘のようにありすを愛していたとは。私、全く知りませんでした」

御見それしました。と、頭を下げたら、「っ！」頭を叩かれた。

しかもグーで。暴力反対である。これ、間違いなくタンコブ出来た。

「言っつていい冗談と言っつてはいけないう冗談があることを知らないのかい？」

社長がニコーと笑いながら聞いてきた。なるほど。怖い。

「言っつていい真実と言っつてはいけないう真実を知らなかつただけです。頭をさすりながら軽口を返す。怖いからなんだという話である。

「意味わからねえよ。まあいいか。これに懲りたら朧君も、食べ物や金に釣られないようにしようね」

失敬な。社長が思っつるほど、私は金や食べ物に弱くはない。と思っつ。というか、これに懲りたらっつて、私のせいなのか？

「しかし社長。なおき君がここまでありすを連れて来て襲おつとするなんて考えませんよ」

そう。そうなのだ。私だっつて、鬼ではない。ありすが泊まる上で危険がないか吟味した結果、泊まるのを許可したわけだ。別に肉がもらえるからと言っつて、無条件で承諾するわけではない。ちゃんと部屋は別々にしてもらっつよう頼んだりもした。自慢ではないが、私はここで働っつている人物の中で一番常識人であると自負している。甘くみてもらっつては困る。私は私なりに、ありすの事を考え行動し

た。まあ、それでダメならしょうがないかとも思っていたが。

「まあ確かに。家じゃ無理そうだから彼女の家で犯ろうなんていう考えを持つとは俺も思わなかったけど。全く、エロガキの考える事はクソガキよりわからないよ」

社長もそこには同意らしい。つまり私に落ち度はないと認めたま同然である。給料減らされなくてよかった。

「しっかし疲れた。ホント疲れた。栞ちゃん。今日俺仕事しないから。接客頑張つてね」

社長はあくびをしながら二階の階段に向かう。どうやら眠るようだ。接客は私には難しいが、まあ適当に頑張ろう。

「おや。ありす君おはよう。よく眠れたかい？」

と、社長が二階に続く扉を開ける前に、扉が開き、ありすが現れた。パジャマ姿のまま、今、起きました。というよう寝癖がある。

「ん」

社長の挨拶に肯定か否定かわからない頷きを返し、ありすはこことこと目を擦りながら、ソファーに座った。

「ありす君。昨日、何があったか覚えてるかい？」

「昨日……？」

社長の言葉に、ありすは何かを思い出すように天井を見る。首を傾げる。あくびをする。目をつぶる。動かなくなる。あれは寝たか？ と思ったら目を開いた。そして、社長を見る。

「わたし、どうしてここにいるんだっけ？ なおきの家に泊まったんじゃないっけ？」

どうも、覚えていないようだ。木下さん家で寝ていたのに起きたらここにいた。という感じなのかもしれない。

「いやいや。覚えていないなら別にいいや」

社長はいつも通り軽薄な笑みを浮かべ、そう言った。しかしその笑みは、気のせいかもしれないが、ホッとしているようにも見えなくもなかった。娘が襲われた記憶を忘れていてホッとした。という

ところだろうか。と、考えていたら社長に睨まれた。考えが読まれたかと思いきつとしたが、そんな事有り得るわけもないので、私は平静を装い、パソコンに視線を向ける。

「ああそうでありす。今日の夕食は何がいい？」

社長がふと思いついたように聞いたその質問に、眠そうだったありすは、瞬時に目を輝かせソファーから身を乗り出し「トンカツ！」と叫んだ。子供っぽい。

「りょーかい」

社長は苦笑を漏らしながら、二階に行った。残ったありすは「なおきの家のトンカツはすごい美味しかった！」と、私に楽しそうに話始めた。私はマインスイーパーを起動させながら「それはよかったですね」と、相づちを打つ。

自慢ではないが、ここで働いている人の中で、私は一番キャラ人格が安定している。

ありすがトンカツの素晴らしさを語るのを聞きながら、私はそう思った。

働いているモノの中では、わからないが。

5 - 6 ・食人嗜好（後書き）

長い上にこれはひどい……。
またしばらく更新停止……。

6・0・プロローグ〜日常〜

あーる晴れた。ひーるー下がりに。荷馬車に揺られー。どこかにー。行きたいなー。

ああ。退屈だわ。誰か来てくれないかしら。退屈は人形も殺すって言葉。知らないのかしら。早く誰か来てくれないと。あたし。死んじゃう。

くすくす。まあ。それもいいけど。死ねるってことは。あたしが生きてるってことだものね。くすくす…

あら。ありすじゃない。栞とお出かけ？こんな昼間から？珍しいわね。別にいけないわけじゃないわ。ただ。珍しいって思っただけよ。

くすくす。そう。服を買いに行くのね。それはとても楽しそうね。ホント。楽しそう。

あたしなんてこの服しかないのよ？ずーっとこの服着てるの。もう。嫌になっちゃう。

もちろんよ。私はあたしをそれなりに大切に扱ってくれてたから。この服も。そんなに汚れてもいないし。破けてもいないけどね。あたしだって一応女の子なのよ？新しい服だって欲しくなるわ。オシヤレだっと思っていたわ。それなのにあたしはこんなところに囚われの身。籠の中の人形は。ただただ。助けを求めて泣き続けるしかないのです。

くすくす。そうよね。ありすは本当に優しい子ね。どう？カワイソ

ウなこのあたしと。ちよつとだけ一緒になつてみる気はない？大丈夫よ。ちよつとだけなら何にも問題はないわ。誠のバカにも黙つてればわからないわよ。

くすくす。ええそうよ。あなたがね。あたしを受け入れてくればいいのよ。たつたそれだけでいいのよ？たつた一言だけ。わたしはあたしです。つて言つて御覧なさい。そうすれば。ありすはあたし。あたしはありすよ。くすくす。ねえねえ。ありすう。早く言つてよ。あたしもお洋服買いに行きたいんだからあ。あなたと同じでね。つまりそれつて。あなたじゃなくてあたしでもいいつてことじゃない？

つて。待ちなさいよ朧。こら。朧。待て。あたし。じゃなくてありすを連れてくな。今いいところなんだから。

あたしのカワイイカワイイありす。戻つておいで。あたしを置いて行かないで。手を振つてんじゃねえよこらあ！！

ああもう。どうしてうまくいかないのかしら。ありすはとてもいいのに。あんな素敵に入れ物が目の前にあるのに。こんな人形の体に入つてなきやいけないなんて。あたし。前世でどんな悪いことしたのかしら。くすくす。まあ。あたしに前世なんてないだろうけどね。

しかし。むかつかくなあ朧には。邪魔ばつかりして。あたしはいつも檻の中。あたしはいつも一方的に苛められるだけ。ああ。あたしつてば。本当にカワイイソウなお人形。ストレスが溜まつて。このままじゃ病気になるっちゃうわ。こういう時は。くすくす。誠をからかつて遊ぶのが一番よね。くすくす…。

6 - 1 ・曖昧自身

0 ・茶柱誠

今回の語り部が俺だとしたら、今回の主役は『あたし』かと思いきや、恐らく栞だろう。残念でも何でもないが、『あたし』は主役にはなれない。なぜなら『あたし』は『あたし』だからだ。『あたし』よ『あたし』、『あたし』だってばあ。と言われても、お前誰だよって話だ。つまり『あたし』なんて存在しないも同然。『あたし』は固有名詞ではない。代名詞だ。代わりの名。本当の名は別にある。『俺』は代名詞。『俺』は腐るほどいるが、『茶柱誠』は俺だけだ。いや、まあいるかもしれないが、そこは俺だけってことにしようぜ？

『俺』だよ『俺』って言って、誰だよって言われたら、茶柱誠だよ。と、俺は言える。だがしかし。『あたし』はそれが出来ない。『あたし』は『あたし』以外に名前を持たない。名前がない。人形？ それも代名詞だ。代名詞しかない。代わりの名しか持たない『あたし』は、唯一無二の主人公には決してなれない。

『あたし』の悩みはそれだ。いや、主役に成りたいわけではないが、『あたし』の悩みはそういう悩みだという意味。故に俺は、あの妖怪のような幽霊のような人間のような『あたし』を、ここに置いている。

ここはどんな悩みを解決する場所。どんなモノでも、解決する。ただまあ、いつ解決するかは俺の知ったことではございませんのであしからず。

1 .

あら。おかえ。あららら。あらあ？

ちよつとあんだ。いや。あなたかしら？ あたしの声。聞こえてるわよね？

いや。そんなに怯えなくてもいいじゃない。というか。ビククリしたわ。なにあなた。え。どうということ？ ありすは？ いや。そういうこと？

つて。ちよつと。行かないで行かないで。あなた。ここに用があったんじゃないの？ 違うの？ そんなに急いで。ああ。そうなの。逃げてて気づいたらここに？ 逃げてる。誰から？

はあ。そう。自分から。つまりそれって。いや。ちよつと。あたしは本当にビククリしてるわ。笑えない。ええ。笑えない。くすく。あ。やっぱりダメ。笑えない。あたし。笑えない。ちよつと誠。

あ。ちよつと。え。いや。どうしてこのタイミングで悲鳴あげるのよ。そこはあたしが話しかけたときにつて。え？ ちよつと。死んだの？ そんなわけないわよね。気を失っただけよね。

ああ。どうしようかしら。昼間とはいえ。麗しい女性が道端に。あたしが男だったらほつとかないわよね。つまり。誠には任せられないわ。

じゃあ。どうしようかしら。くすくす。ああ。笑えたわ。ようやく。あたしとしたことが。動転するなんて。まるで。人間みたいじゃない。くすくす。

まあ。あれよね。人を助たいという気持ちは。人間でも。人形でも。関係ない。わよね？

くすくす…

2・茶柱誠

「ん？」

先ほどまで、ずっとうるさく喧しく。透き通っていたようなノイズ混じりの雑音のような、表現しづらい声質で（しかし女性ということはわかる不思議）で話しかけてきていた『あたし』が急に黙り込んだ。いや、黙り込んだというより、こちらに話しかけてこなくなっただけか。

栞君とありす君が買い物に行っていて暇だったので、『あたし』の声を遮断せず読書の片手間に聞き流していたのだが……。

ソファーに寝ていた体を起こし、ドアの向こうを見る。もちろん俺には、透視能力というものは一切ないので、ドアの向こうを見ることは出来ない。が、ドアの向こうで『あたし』が誰かと会話している気がする。何か嫌な予感がプンプンしますよ。ええ本当にね。

ピンポンピンポンピンポン。ピンピンピンピンピン
ポーン

「……はいはい」

その予感を支持するかのようなチャイム音が鳴った。リズムよく連打するんじゃないよ。

栞ちゃんがいたら間違はなく、ドアを開けるのやめましょう。と言ってくるだろうなあと思いつつ、机に読んでいた本を置いた。

それから三三七拍子でチャイムを鳴らし続ける面倒な客を招き入れるためにカギを開けてドアノブを「助けてください！！」回す前にドアが開き、抱きつかれた。抱きつかれたが、全く嬉しくない。相手が包丁を持っていたら俺、死んでたな。じゃなくて、驚いた。

どういうことだ？

「もう怖くて怖くてどうすればいいかわからなくて……！！」

俺の胸に顔を埋めて泣いているご様子の女性は、栞ちゃんと同じくらいの身長、だいたい160cmか。体系も栞ちゃん同様、スレンダー系だ。スーツ姿だが、栞ちゃんとは違いスカートルック。しかしそのスーツは栞君とは比べ物にならないほどよるよるでボロボロだ。タイツも伝線しているし、泥もついている。どこかでこけたのか？ 酷い有様だ。髪も栞君同様黒のロング。しかしその黒髪は栞ちゃんとは比べ物にならないほどボサボサで手入れが悪い。寝癖ぐらい直せよ。

「とりあえず、落ち着いてください」

骨と皮しかないのではないかと思うくらい、細い肩を掴み、女性に離れてもらうことにする。

「はい、すみません……ごめんなさい……ちょっと、気が動転しています」

「……」

そう言いながら女性は離れ、涙を拭いた。その顔はさっき抱きついてくるとき、一瞬見えていたわけだが、どうやらやはり見間違えではなかったようだ。ああ、俺、今絶対作り笑顔が引きつってる。他人の空似……だよなあ。

よほど慌てていたのか、この女性。ブラウスのボタンを掛け間違えていて、下着が見えている。見えても全然嬉しいという気持ちは一切生まれぬ。姉がだらしない格好をしているのを弟が見ても喜ばないと同じ理由だろう。顔立ち……栞ちゃんより不健康そうだ。

青白い。化粧していない栞ちゃんはもしかしたらこんな感じなのか。「あの……？」

「ああ、すみません。今、お茶をいれますね。お話は落ち着いてからお聞きしましょう。そのソファーにおかけになっていてください」
ジロジロと観察し過ぎた。あまりにも珍しかったから。いや、珍しくはないか。いや、珍しいよな。まあ何はともあれ、話を聞い

てまないことには話しにならない。しかし、栞がいなくてよかった。
「……あの？」

女性に背を向け数歩歩き出したところで、ドアを閉める音とカギをかける音、そしてなぜかまた抱きつかれた。ああ、今日ですでに二回死んでるな俺。

「誠さんって……優しいんですね」

全くドキドキしない不思議。

「あたし、誠さんのこと好きになっちゃった。ねえ、抱いてえ」

体をまさぐられ猫撫で声で誘惑されたので、俺は思いつきり、女性の足を踏んだ。

「ったあーい！！」

足の甲は人体急所の一つという噂を昔聞いたことがなくもないぜ。まあ、急所じゃなかったとしても、手加減なしに踏まれた痛いのは言うまでもない。女性は悲鳴を上げて俺から離れた。ざまあみるだ。

「ああ、もう痛い。痛くて痛くて堪らないわ。でも、その痛みがちよつと、か・い・か・ん？」

涙目で気持ち悪いことを言う女性だ。今気づいたが、こいつ、靴が左右で違う。俺が踏んだ右足はサンダル。左足は運動靴だ。もはや慌てていたというレベルじゃねえぞ。わざとじゃねえのか。

「ちよつとあんた。あたしは依頼人様なのよ？ 機嫌を取るべき存在なのよ。それなのにこんな仕打ちして……いいのかしら？」

蠱惑的な笑み。外見がボロボロの癖に、どうも挑戦的な言い回しをする女だ。金髪碧眼の人間が西洋ドレスを着ながら流暢に京都弁を話しているような違和感を感じる。ハードに対して、ソフトが合致してねえ……ああ、なんかもう面倒だな。いい加減気持ち悪くなってきた。

「今ならそうねえ……跪いて靴を舐めれば、あたし許して、あ・げ・る」

「その顔で気持ち悪い事言うんじゃないよ『あたし』」

俺がそう言い放つと、女、というより『あたし』は一瞬驚いた顔

を浮かべたが、すぐにクスクスと笑い始めた。腹立つわー。

「気づいてたの？」

「当たり前だ。違和感バリバリ」

まあ、最初はわからなかったが。言動とか名前とかがあれでこれでそれだもんで、わからないわけがない。

「一応言っておくけど、無理やり奪ったわけじゃないからね？」

「そりゃそうだろうな」

無理やりには奪えないだろう。相手の弱みにつけこみ入り込み居座るのが、こいつの常套手段であり、それ以外では無理なはずだ。

「クスクス。勘違いしないでよね。今回は騙したわけじゃないし、弱みに入り込んだわけでもないわ。善意よ、善意。あたしだって、善意で行動する事があるのよ？ 人間みたいだね」

喋り方が、ぶつ切りではなく流暢だ。ずいぶん馴染んでいる。

「じゃあどうやったんだよ」

「えつとお。何か急にこいつ走ってきてえ。でえ、あんた同様あたしもビックリしちゃってさあ。ビックリしてたらあ。急にこいつ気を失ってえ。あたしい、もっとビックリしちゃってえ。どうしよおどうしよおって思つてえ。早く病院に連れて行かないといけないなあって思つてえ。でもお。あたしつてばあ。人形だし。救急車とか呼べないからあ。どうしかなあって考えてえ。超法規的な感じでえ？ こいつの体借りたつて感じなのお」

「……うぜえ」

相手に嘘だとわからせる嘘ほど腹が立つものはない。特に外見が真面目そうな奴に言われたらなおさらだし、相手がそれを意識しているならさらに倍で、相手が知り合いだったらダメ押しだ。殴りてえ。

「クスクス。怒ったんですかあ？ じゃあどうぞ殴つてもいいですよあ？ あたしつてばあ、久しぶりに痛みとか感じてみたいしい。

これ、間借りしてるだけだし」

殴れるものなら殴つてみると言わんばかりに、『あたし』は近づ

いてきて、上目遣いで挑発してきた。その顔でそういう事されるのは大変むかつくので、遠慮なくビンタした。罪悪感は全くなかった。「ったあい！ 本当に殴ることないじゃない！ この鬼！ 悪魔！ 人間！」

最後の罵倒は新鮮だぜ。

「よく殴れたわね……このあたしを。この顔を」

「じと目で睨むな気持ち悪い。で、この不運な女性は誰だ。何だ。そろそろお遊びに付き合うのは飽きてきた。名前を言え」

「言うわけないじゃない。バツカじゃないの？ あたしはね。一度拾ったモノは制限時間いっぱい使う、エコなあたし、な・の・よ。ああ、のど渴いた。こいつ、よほど慌てたのね。のど、カラカラ。誠、お茶よろしくねー」

そう言って『あたし』はひらひらと手を振り、俺の横を通り過ぎ、「歩きづらい」と言って靴を脱ぎ捨て、ソファに座り、「早くお茶」と言ってきた。殺してえ……。

と、思ったところで『あたし』は殺せない。今この瞬間、ソファで足をバタバタさせている推定年齢二十代前半の女性の首をへし折ったところで、この女性が死ぬだけであり、『あたし』は死なない。あの忌々しい西洋人形に戻って、また次の入れモノを待つだけだ。マジめんどくせえ。西洋人形焼くぞこら。

「なによ。早くしなさいよ。それともなに？ あれ、焼いてくれるわけ？」

俺が油とマッチ持ってこようかなあと思いながら、女性の後頭部を眺めていたら、首を仰げ反らせた『あたし』がニヤニヤと笑いやがった。その顔でそういう笑い方されると、気分が悪くなる。まるで悪い夢でも見ているようだ。

「別にあたしとしてはいつでも焼いてもらって構わないわよ？ したらあたしは私に戻るだけだしね。クスクス。そっちの方が、あたしとしてもいいわ。やっぱり私が一番よ」

そう言って挑発するようにクスクスと『あたし』は笑い、「早く

お茶とケーキ」と、催促した。要望が一つ増えてやがる。本当にこいつはいい性格をしている。もちろん褒め言葉ではないぜ。

しかしまあ、ものは考えようだ。『あたし』がこの女性の体を借りて（乗っ取って）どこかにふらふらいかなかった事は大変いい事だ。それにどうもこの女性は色々と面倒そうだ。『あたし』が取り憑いている間に情報収集するのも悪くない。

「ケーキまだあ〜？」

「……」

とりあえず、一発頭を叩いてから話しをする事にしよう。もしかしたら、斜め四十五度を叩けば『あたし』が即出て行くかもしれないじゃないか。

3・茶柱誠

結果から言うと、『あたし』はいなくならなかった。期待してなかったたので残念でもなんでもない。

「ん〜、おいしい。とつてもおいしい。すべからくおいしい」

『あたし』は、幸せそうな顔を浮かべ、ショートケーキを食べる。せいぜいこの短時間の幸せを噛みしめるがいい。女性が起きたらまたお前は人形に逆戻りだ。食うことも寝ることも必要のない体に戻れるなんて羨ましいぜ。と、内心嘲笑しながら、俺はモンブランを食べる。うまい。

『あたし』が食べているショートケーキは栞ちゃんの今日のおやつだったはずのもの。帰ってきたら怒るかもしれないが、まあ仕方ない。ここは栞君の分を出すのが一番いいと思ったのだ。別にありますの分は可哀想だとか、俺の分を上げる気は一切なかったとかというわけではないぜ？

「ケーキやっただから、こっちに見返りを寄こせよ」

「クスクス。これ、栞のケーキでしょ？ なんてあんたに恩を感じなきゃいけないわけ？ 逆にあんたが見返り寄こしなさいよ。ほら

あ、サービスサービスう」

そう言って『あたし』はフォークを口にくわえ、女性のブラウスのボタンを外した。胸がはだけた。下着が先ほどよりもよく見えるようになった。胸は控えめのようだ。栞ちゃんもこんなもんだった気がした。正直どうでもいい気がした。

「男はこういうのが好きなんでしょあ？ ハツ。変態ね」

見下すように言っているとこ悪いが、全然興味をかられない。俺は綺麗系な年上がすきなんだ。

「いいから情報をよこせ。名前は聞かねえよ。感謝してもいいんだぜ？」

「初対面の人間の名前を聞かないのは礼儀でしょ？ 感謝するようなことじゃないわ。まあ、コーヒを入れたことには感謝してあげてもいいけどね」

「そんな礼儀は人間社会にはねえよ」

「あらそうなの。人形の間じゃ一般的な礼儀なのに、人間は遅れてるわねー」

一口。優雅にコーヒを飲んでから、『あたし』はニヤリと笑い言う。

「自分に殺されるって」

「はあ？」

自分に？

「こいつはそう言ってたわ。そして、本当に襲われてるわ。自分にクスクス。なかなか面白いわ。こいつの記憶は」

クスクスと人事のように笑う『あたし』。まあ実際人事なのだが。

『あたし』は『あたし』。『あたし』は代名詞。つまり、誰にでもなれる。成り代われる。今の『あたし』は『あたし』であり『あたし』ではない。俺は今のこいつが本来の女性ではないとわかるが、『あたし』を知らない人間が、今のこの女性を見て会って話したらどう思うか。ああ、こういう女性なんだなと思うだろう。成り代わり、成功ってやつだ。

この女性を知っている人間が、今の女性を見て会って話したらどう思うか。あれ？ 性格違うなと思うだろう。ただ、それだけ。それ以外は本来のこの女性と変わらない。記憶も引き継いでいる。スベックも変わらない。成り代わり、成功ってやつだ。成功ってやつか？

「どうするわけえ？」

クスクスと、人が悩み苦しむのを見るのがたまらなく楽しい。という笑みを浮かべながら『あたし』は言う。

「こいつ、悩み相談すると思うわよ。夢中で逃げて気づいたらここにたどり着いたみたいだし？ どうすんのよ。もしこいつの言う『自分』があ、栞だったらさあ」

「……どうっすかなあ」

俺は、鼎栞そっくりの女性を見ながら、悩むフリをするのであった。

しかしこのモンブラン、うまいなあ。また栞君に買ってきてもらおう。

6 - 2 . 曖昧自身

4 . 茶柱誠

ドッペルゲンガーというモノを知っているだろうか。聞いたことがない人はいないだろう。それほどに有名なモノだ。

自分と瓜二つなもう一人の自分。曰く、ドッペルゲンガーに出会ったら、死ぬ。

とまあ、簡単に言えばそういう話で。そういう話をほとんどの人間は知っているだろう。ありきたり。そう言ってしまうえばそれまでの話。会ったら死ぬ。どうして死ぬとか、どうやって死ぬとか、そういうのを一切省いてある、典型的な、物語とも言えるかもしれない。無駄に脚色されてはおらず、相手を怖がらせようとする意図がない、ただ事実だけを、結果だけを淡々と伝えられた、物語。

ドッペルゲンガーより怖い話はいくらでもある。逆上して襲ってくる口裂け女とか。どの色を答えても殺してくるといふ傍若無人の赤い紙やら青い紙とか。数えきれないほどあるだろう。『怖い』という単位で計ったとき、ドッペルゲンガーは弱い。その順位は、低い。

しかしここで、『不思議』という単位で物語を計った場合。『よくわからない』という単位で計った場合。ドッペルゲンガーは、途端に強くなる。その順位は、高くなり、ドッペルゲンガーより不思議な話はなかなか思いつかなくなる。

例えば出現条件。口裂け女なら、夕暮れ時の道路。赤い紙やら青い紙は、夕暮れ時のトイレ。判明している。現れる場所がわかっているれば、回避する事もできるわけだが、しかし、ドッペルゲンガーの出現条件はわからない。ある日唐突に、街を歩いていたら、会社で仕事していたら、家でくつろいでいたら、授業中に、現れる。場所も時間も関係なく、現れる。

このことから、ドツペルゲンガーが妖怪や都市伝説の分類ではないということはわかる。では、幽霊なのかと言われれば、少々疑問だ。一説によると、ドツペルゲンガーとは自らの靈魂であり、死にそうなる人間からは靈魂が抜け出してしまい、それがドツペルゲンガーとして現れる。元々死にそうなのだ。ドツペルゲンガーが殺すわけではなく、自然に死ぬという説明。死神に近い。近いが、やっつけることがドツペルゲンガーの方が悪質だ。何でわざわざこつちと同じ姿で現れるんだよ。まだ鎌とか骨の方がいいわ。

話がそれた気がしたが、そもそも本道が何か定まっていけないので、それることもないと気づいた。ドツペルゲンガーを靈魂としたならば、それは幽霊、というより生霊か。生霊に近い。しかし。しかし。どうでもいいが、今回はしかしを多用させてもらう事にした。なんとなくだ。

しかし、ドツペルゲンガーは幽霊とも生霊とも違う。なぜなら幽霊や生霊というものは、情念によって生まれてくると相場は決まっている。恨みでも悲しみでも妬みでも、想いがあって、あいつらは生まれる。幽霊や生霊同様、ドツペルゲンガーも、対象が行ったことがある場所等、何かしらの縁があるところに現れるという噂もあるが、ドツペルゲンガーに想いはあるか？ わからない。幽霊や生霊とは違い、ドツペルゲンガーは喋らない。伝えない。ただ、現れ、死に導く。

そしてドツペルゲンガーの一番の問題点が、倒し方や逃げ方がわからないということにある。口裂け女にはべっこう飴を叩きつければ大丈夫だし、赤い紙は何か変な色を答えるといいらしいし、驚きなことに死神だって倒し方がある。あるというか、そういう逸話が、そういう話が生まれている。生まれるのが普通なのだ。一般的なのだ。起承転結。『結』がない、『終』がない物語はありえない。そして表があれば裏がある。あちらがこちらを殺して『終』にする話があるのなら、自然、こちらがあちらを殺して（もしくは退いて）『終』にする話が生まれるはず。

しかし、ドツペルゲンガーにそれはない。あいつらは殺せない。あいつらを退かせることはできない。そういう物語しか、ない。こちらが死なない物語は、ない。

自分と瓜二つのモノがある日目の前に現れる。そこには鏡もなく、明らかな実像。それなのに。しかしそれなのに。自分と全く同じ姿なのに、何を想っているかわからない。想っているかさえわからない。生死さえ、わからない。

出会ったら、死ぬ。それがドツペルゲンガーの恐怖ではない。明らかに自分。間違えることさえできない程に、同一なその存在を見て。見つけて。知ってしまう。その結果起こる恐怖とは。

どっちが偽者ドツペルゲンガーなのか、わからない。

それが、ドツペルゲンガーの根源的な恐怖だ。

5・茶柱誠

とまあそんな感じに長々とドツペルゲンガーについて語ったわけだが。

「あーるー晴れたー、ひーるーさーがーりー、ふふふふふー。ほら、誠の番よ。さっさとしなさいな」

「……」

自分（ドツペルゲンガー？）に襲われているらしい鼎菜そつくりの女性は、能天気にも、テンポも音程も関係なく鼻歌を口ずさみながら、オセロをしているわけで。なんつーか、興ざめ。ガツカリ。

『オセロをしましょう』

と、提案したのは女性、というか『あたし』。俺が、前、ありすをオセロでコテンパンに叩きのめしたことを知っての発言だった。

『ありすを倒せたからといって、調子にならないことね。クスクス。ありすは四天王の中でも最弱なのだから。って感じ』

ということらしい。ようは、暇だから遊ぼうということだ。俺も暇だったので遊ぶのはやぶさかではなかった。

さて、オセロをしながらわかったことは、『あたし』が弱いということがわかった。オセロがだ。いや、この場合は、この女性が、オセロに弱いということになるか。うん。この女性が、オセロが弱いということがわかった。大した収穫だぜ。

『あたし』のスペックは、とり憑いた（というより、寄生した）人間のスペックに依存する。数学が得意な人間に憑けば、数学が得意な『あたし』。現文が得意な人間に憑けば、原文が得意な『あたし』になる。

英語が話せる『あたし』。プログラムが組める『あたし』。車の運転が出来る『あたし』。枕が変わると眠れなくなる『あたし』。人の数だけ『あたし』はいる。

『あたし』は『あたし』。『あたし』以外の何モノでもないからこそ、誰にでもなれるというのは、全く持って意味不明で、妖しさ爆発だぜ。

しかし残念なことに。もちろん残念なのは『あたし』ではなく、俺にとつて、『あたし』以外の全てのモノにとつて残念なことに。この『あたし』は、とり憑いた人間の人格には依存しない。影響されない。どういう意味かなのは、言うまでもないだろうけども、まあつまり、物静かな人間にとり憑いたところで、物静かな『あたし』にはならないし、子供っぽい人間にとり憑いたところで、子供っぽい『あたし』にはならないということだ。マジ残念。

「オセロの何がめんどくさいって、この裏返す作業よね。どうして人間は、自動で裏返す機能をオセロにつけないのかしら。あ、もしかしてこれが、オセロの醍醐味とか思ってるのかしら？ それともこのめんどくささが、人間臭さってことなの？ クスクス。バツカみたい」

どんなモノにとり憑いても、『あたし』のこの、人を小馬鹿にしているような笑い方や人格は、変わらない。理屈はわからない。し

かし、理由は知っている。

『あたし』曰く。

「この人格まで変わっちゃったら、『あたし』が『あたし』じゃなくなっちゃうじゃない。そんなこともわからないの？ バカなんじゃないの？ 死ねば？ クスクス。大丈夫。代わりにあたしが生きて。生きて。あ・げ・る」

ということらしい。むかつく野郎だぜ。

今回の話は、『あたし』について語る話ではなく、ドッペルゲンガー、もしくは鼎俟についての話なので、そろそろ『あたし』の説明についてはやめておこう。やめておこうというより、もう無理だ。『あたし』を説明するのは、まだ無理だ。

ただ、これだけは言っておこう。

『あたし』以外の何モノでもなく、『あたし』以外の何モノにもなれる。それが、『あたし』。その本体は人形ではなく、『人格』。人を小馬鹿にしたような嘲笑を浮かべ、相手を責めることを生きがいに行っているような『人格』。ではなく。

『嫌よ嫌よ死にたくないわ消えたくないわ。どうしてあたしが死ななきゃいけないの。どうしてあたしが消えなきゃいけないのよ。あんたが消えればいいじゃない。あんたが死ねばいいじゃない。どうしてあたしなのよ。あたしも私も代わらないじゃない。一緒じゃない。なのにどうしてあたしが消えないといけないのよ。そうよ。ジヤンケンで決めましょう。公平でしょ。それで決めましょう。どっちが消えるか決めましょう。ね！ そうしましょうよ！』

死にたくない。そんな当たり前で切実な想いをもった『人格』が生んだ、確固とした『自己』。

それが、『あたし』の正体だ。

ドッペルゲンガーの恐怖が、どちらがドッペルゲンガーかわからないことと語ったが。その恐怖の延長線上には、もう一つの恐怖がある。

それは、入れ替わっても気づかない恐怖。気づかれない、恐怖。ドッペルゲンガーの話の中には、ドッペルゲンガーが話しかけてきて、入れ替わろうとするものもある。

その点で言えば、『あたし』はドッペルゲンガーに似ている。

違う点は、ドッペルゲンガーが違和感を感じさせずに対象と入れ替わるのに対して、『あたし』は、違和感を感じさせつつも対象と成り代わることだ。

「ああもう！！ 全然勝てない！！ もうやめやめ、やーめた。こんなつまらないボードゲームはもうやめ。クスクス。そうよ。いい大人同士がこうやって二人きりなのに。どうしてオセロなんかしてるのかしら。クスクス。せっかくそれなりに魅力的なセックスパフオーマンスを持つのになれたんだから、ね？ クスクス。あたしとすることが、時間を無駄にしたわ。というわけでえ、まことお、あたしとお、楽しい事しなあい？」

そしてもう一点、ドッペルゲンガーは『あたし』ほど、うざくない。そう、信じたい。

6・茶柱誠

「いったあいなあもう。何よ。毒を食らわば皿までって言葉、知らないわけ？」

「毒を食ってねえのに皿を食うほど死にたがりな人間じゃねえんだよ、俺は」

半脱ぎで襲い掛かってきた『あたし』の腹部を、問答無用で殴りつけ、床で悶え苦しむ『あたし』を尻目に机の引き出しから荷造り

用のロープを取り出した俺が何をしたかというと、『あたし』をグルグル巻きにしてソファーに投げ出したのであった。貞操の危機はこれで去ったぜ。

「ああ、なるほど。クスクス。そういうわけね？　これから毒を食らうのね。こういう趣味があったなんて、い・が・い」

「黙れ。口も塞ぐぞ」

口をガムテープで塞がないのは、優しさでもなんでもなく、これから色々と喋ってもらわなきゃいきないからだ。

「状況の整理をしようぜ」

そう、まずはそれに尽きる。どうも、『あたし』が絡んできてるので、あやふやとよくわからない状況に陥っているが、『あたし』という要素を取り除けば、それほどわからない状況ではない。と、思いたい。

「嫌よ。それよりあたしと遊びましようよ」

「まず、俺の目の前に座っている女は、鼎棐と瓜二つである。」

「座ってないわ。縛られて糞虫のように放り出せてるのよ。客人に対してこの扱って、どうなの？」

「つまり、年齢は二十代前半に見える。着ている服が、スーツというのも、一緒。鼎棐がパンツに対してこの女性がタイトスカートというのが、違いといえば違いか。OLかもしれない」

『あたし』は無視して、天井を見上げながら思ったことを呟いていく。棐ちゃんにはパソコンを使って情報をまとめるハイテク世代だが、俺は天井を使い、記載と再生をするローテク世代だ。

「クスクス。それはどうかしらね。ストッキング伝線してるし、ポタン掛け違えてるし。こんな着こなしじゃあ、一般的なところで働いているとは思えないわよね。やらしい店かもよ？　そういうプレイが専門なのかも」

「で、お前が簡単に入り込めるほど、憔悴していると」

「あん。そういえばなんだかさつきより興奮してきたわ。クスクス。もしかしたら、本当にこういうプレイが仕事なのかもしれないわよ

？ この女、被虐嗜好ありよ。あつ。つまり、栞もMよM。クスクス。間違いないわ」

「……」

無視できねえ。

「ガムテープ、必要か？」

「ええ是非お願い。もっと気持ちよくなれるか」

「じゃあやめだ」

「クスクス。焦らしプレイってやつ？」

「縫うぞ」

「喘ぐわよ」

「殺すぞ」

「出来るものならどうぞ？」

「……ちっ」

なんで俺は身動き一つ出来ない女に、挑発されてんだって話だよ。クスクス。そういう顔の方が素敵よ誠。笑顔なんかよりも、よっぽど素敵。その、世界を殺しそうな顔はね。ずっとそんな顔をしてたら、いいんじゃない？」

「却下だ」

鏡がないので、どんな顔をしているかは自分ではわからないが、接客に向いていないことだけは間違いないだろう。

「クスクス。それは残念。でもまあ、その顔に免じて、ちょっとは真面目に相手をしてあげるわ。感謝なさい、人間風情が」

「ありがとよ、人形如きが」

まあ、人形ですらないのだが。

「憔悴していたとはいえ、お前が簡単に入れるって事は、人格に穴があるってわけだ」

「クスクス。穴という表現が卑猥に聞こえちゃったわ。まあ、あたしを許容できるゆとりがあると云った方がいいんじゃないかしら。その点は栞とは違うわね。あいつは堅物で、あたしが入るゆとりゼロだもの。つまらないわ」

「そいつは結構なことだ。で、一番の問題は、というか悩みは、なに？ 自分に殺されるって？」

「ええ、そうよ。今日も朝から、ドッペルゲンガーに追いかけられて、大変だったわ。あ・た・し」

「ドッペルゲンガーだったらそりゃ興奮するが、どうせ双子ってオチだろ？」

現実的に考えて。双子を自分と認識するという人格破綻の方がありえるだろって話だ。

「あら、おいしいわね。でもざあんねん。クスクス。そんな単純な話じゃありません。ニアミスな誠には、残念賞として、Bまで許可してあ・げ・る」

「願い下げだよ、クソが」

『あたし』のこの口ぶりから察するに、客観的に見れば、さほど奇妙な事が起こっているわけではないようだ。

問題は、自分が経験した事を、自分が客観的に話すことが出来ない事にある。この女性が目覚め、話したところで、恐らく彼女はずっと、自分に襲われる、殺されると訴えるだろう。彼女にとっては、それが事実なのだから仕方ないの。しかしこちらから見れば、精神病院に行けという話になり、その辺を調べるのが一苦労なのだ。

しかし今は、『あたし』が中にいる。その手間を省く事ができる。もう。欲張りさんね。仕方ないわ。最後までして、あ・げ・る。クスクス」

「いいからさつさと客観的に台本を読むが如く、そいつのプライバシー語り尽くせ」

「それをするにあたってあたしにどんな利益があるのかしら？」
うぜえ。

「……今度散歩に連れてってやる」
「ホント!？」

思いのほか好感触。ずっと籠の中じゃそれも当然か。

「ああ、本当本当。連れてってやる」

俺じゃなくて栞ちゃんが、だけどね。

「絶対よ？　じゃあ、真面目に話しちゃおっかなあ。まず、こいつはエロいわ」

「おい」

「何よ。嘘じゃないわよ。本当よ。実際さつきから、ロープに縛られて体が火照って火照って、不快で仕方がないわ。どうしてくれるのよ」

「……」

さつきまでの言動は冗談じゃなかったのかよ。

「あんたがどう思ってるかはわからないけどね。あたしだって、多少は身体に影響を受けるわ。苦々しい話だけどね、名は体を表すのが真なら、体が名を表すのも真よ。ああもう。本当に気分が悪い。あなたにはわからないでしょうね。あたしは全く気持ちよくないのに、気持ちいいっていう感情が侵食してくるのよ。この体、あまり好きじゃないわ。エロ過ぎよ。欲求不満の塊。誠に好意を抱き始めてるのが、さらに不愉快よ。どうしてくれるのよ」

苦虫を噛んだような顔をしているところを見ると、本当にそう思っているようだ。冗談交じりにおもしろおかしく誘惑していたと思っていたが、本当はそんな気持ちで誘惑していたのだろう。恐らくオセロをやりたいと思ったのは純粹たる『あたし』の提案だったのだろう。しかしその後からは、純粹の『あたし』（女性に入り込む前の人形の『あたし』という意味だ）の提案、行動ではなかったということだろう。

「そりゃ仕方ねえだろ。一方的な侵食なんて出来るわけがねえ」

割合で言うと、8:2。『あたし』はとり憑けば、ほぼ『あたし』として成り代われるが、二割は染まってしまふ、変わってしまうという事だ。俺から見ればその程度、どうでもいいだろうと思うのだが、『あたし』は完璧に『あたし』として、人間になりたいようだよ。やれやれだぜ。

「全く……だから大人は嫌よ。子供がいいわ」

子供はまだ自我が弱いから、『あたし』は本来の『あたし』としていられるという理屈らしい。俺の推測だと、それでも9：1。食べ物好み程度は、身体に依存するだろう。

「この女性が栞ちゃんとは違ってエロいってことはわかった。さっさと本題を話せ」

「栞もエロいかもしれないわよ？ ああいういつも涼しげな奴ほど、頭の中じゃあエロいことばかり考えてるもんよ」

「中学生かよ」

「似たようなものよ。ドッペルゲンガーじゃないから」
「唐突だな」

「そろそろタイムリミットが近いからね。それにもう、我慢の限界。いっちゃいそうよ。」

「どこにとは聞かない。」

「妹よ」

「妹？」

ドッペルゲンガーじゃなくて、妹？ なのに、自分に殺される？

「そう。三ヶ月前に死んだ双子の妹に、こいつは殺されそうなのよ。クスクス。ドッペルゲンガーじゃなくて、よかったわね？」

「……ああ、よかったよ」

ドッペルゲンガーよりは、幽霊の方が対処しやすいという点では、よかったよ。

ああ、本当にね。

6 - 2 ・ 曖昧自身 (後書き)

あうあうあー . . .

6 - 3 ・曖昧自身

7 ・鼎菜

諸事情により私である。どんな事情なのかは、まあ、推して知るべしというところだろうか。

私は片手に安い衣服店の袋や少々マニアックな衣服店の服を持ち、もう片方の手で、夢に片足を突っ込んでるありすの手を引くという形で、会社に帰宅している途中である。出来る事なら、どちらか片方を手放したいくらいの疲労度である現在、早く会社に戻り、おやつの一つでも食べたいな！。

そもそもなぜ私がありすの服を買いにいかなければならないのだろうかという話だ。別に、嫌ではない。ありすの衣装を選ぶというのは、小さい頃は着せ替え人形で遊び、最終的に破壊するという一般的な遊びに興じていた女の子である私にとって、楽しい部類に入る。しかし、疲れるのはいただけない。ありすで遊んでいる間は、脳のなんとか効果により疲労を感じないのだが、帰路になり、車から降りたあたりで、その時の疲労分も一気に押し寄せている気がするのには私の気のせいだろうか。

ああ、どうしてわざわざ出歩かないといけないのだろう。今の時代、ネットショッピングというものがあるではないか。家から一歩も出ずに買い物ができ、荷物が届く。それ、天国です。

だというのにあのクズ社長は、『今からそんな楽を覚えさせたら、将来一人じゃ買い物も出来ない子になるじゃないか』と、のたまわりやがる。社長のご立派な教育方針を否定はしませんけど、それに私を巻き込まないでいただきたいという話である。死ねばいいのに。

あと、何で駐車スペースが会社からこんなに離れているのかというのも、文句をいいたい一つの点だ。車社会にあるまじきことだろう。徒歩10分も離れているなんて。車から降りて、10分も歩か

なきやいけない？ それを私は、拷問と呼ぶ。

「ほら、あります。もう少しだから、ちゃんと歩きなさい」

「ん……やつ」

やつ。じゃねえよ。と、言ってやりたいが、我慢する。

「歩かないと置いていきますよ」

本気である。

「やだ……」

「じゃあ、ちゃんと歩きなさい」

「むり……」

「じゃあ、置いていきます」

「……おんぶ」

「置いていきます」

私がおんぶして欲しいくらいなのに、30kgはあるだろう荷物をおんぶできるわけがない。

「んー！！」

割と本気で、ありすの手を離そうとしたのだが、うまくいかない。その力があるなら、ちゃんと歩けといたい。私にも言える話しなのだが、私は、そういう事は右から左に簡単に受け流す事ができるタイプである。

「ほら、ちゃんとしなさい」

「ん……」

仕方なく、また、ありすを引き摺るように歩き始める。ありすも仕方ないというように、歩き始める。何様？ まあいい。その曲がり角を曲がれば、会社をすぐそこだ。頑張れ私。ケーキが私を待ってるぞ。

「……」

しかし現実はいつも私に厳しい。曲がり角を曲がると、そこは異世界だった。というわけでもないし、会社がなくなっていたというわけでもない。それは非現実。非現実は、いつも私に優しい。厳しいのはいつも現実だ。

会社の入り口、籠がぶらさがっている辺りに、女性が立っていた。遠目からなので、女性とは言い切れないが、スカートでさらさらヘアという事は、女性だろう。そういう服装をする人は、総じて女性といえる。

格好はスーツ姿。ロングヘア、会社の敷地を窺うその様子も、その全てが、きっちりしているという印象を私に与える。背格好は……私とほぼ一緒だろうか。つまり、その女性は、身長は平均くらいで、細めで、いわゆるスレンダー系な真面目美女に見える。遠まわしの自画自賛と受け取ってもらってもかまわないです。

お客か。それとも物珍しい建物に興味がわいただけなのか。それとも、人形と話しているのか。どれにしても、疲労困憊な私には、面倒なことになりそうだ。

私が女性の方へ、というか会社の方へ歩いていくと、女性もこちらに気づいたようで、会社ではなく、こちらを向いた。そして驚く。相手も、私も。

「いたい！」

驚いた。驚いて、ついついありすの手を握る手に、力が入ってしまい、ありすが痛がっているが、今はそんな些細な事に気を回す余裕はない。

先に動揺から回復したのは、あちらだった。困ったような笑みを浮かべ、手を振った。私はどうだろう。慥然とした顔をしていると思われる。とりあえず、歩を進める。

「こんにちは……？」

「……こんにちは」

挨拶を交わせる距離で立ち止まり、探り探りの挨拶を交わす私と女性。近づいても、見間違えではない。遠目だったら、もしかしたら見間違いの可能性。気のせいの可能性もあったわけだが……。っというか、声も似ている。鏡の自分に話しかけられているようで、気持ちが悪い。

「朶ちゃんか二人いる……夢？」

寝ぼけ眼を擦りながら、ありすが私と女性の顔を見比べ、そう言った。

ちゃん言うな。と、言える余裕は、今の私、自分とそっくりの女性と出会った今の私には、なかった。

8・渡辺麻衣

「こんにちは。えっと、念のために聞くけど、芽衣姉さん……では
ないよね？」

ああ、よかった。違うか。ええ、わかってたよ、私には。だって、あなたを見ても、何も感じないから。全然キョクンキョクンしないの。心や、子宮がね。フフフ。でも、念のためというか、社交辞令として、聞いてみました。私、一般人ですから。だからビックリしました。まさか、姉さん以外に私と同じ顔があるなんて。最初、ドツペルゲンガーかと思っちゃいましたよ。でも、そんなふざけた事あるわけないよね。私とあなたは全くの別人で、赤の他人の、他人の空似。そうでしょ？ それとも、あなたは私なの？

フフフ、そっか。ああ、よかった。私、一般人だから、そういうのとは無縁な人生を送っているの。えっと、お名前聞いてもいい？

私は渡辺麻衣って言います。ある企業で、秘書を務めています。

そう、鼎菜さん。ここで働いているの？ ここなに？ 会社？
窓がない建物なんて、一般人の私には理解できないわね。

へー……悩みを解決するお店？ 何でも？ 便利屋みたいなものなの？ 商売成り立ってるの？ こんなわかりづらいところにあるし、看板もないし……広告とか、出してるの？

フフフ。余計なお世話だったよね。えっと、そちらの女の子は、
あなたの子供？

そっか。よかった。私と同じ顔の女性が、もう子供を産んでいて、育ててるなんて、何だか気持ちが悪いもんね。ねえ鼎菜さん。この世には、三人。同じ顔の人がいるっていう話、聞いたことある？ あ

れを聞いたほとんどの人は、こんな疑問を持つと思うんですよ。双子の場合はどうなるんだろうって。だって、すでに目の前に同じ顔の人が一人いるんですよ？ ということは、残り一人なのか。それとも、残り四人なのか。考えた事ありません？ 私はありますよ。一般人ですからね。一般人というより、私と姉さんが双子だからかな。

そうなの。私には双子の姉がいるのよ。ちょっと話していい？

いいよね。同じ顔の二人が出会ったんだもん。こんな縁、あると思う？ こんな偶然、あると思う？ 一般人の私はこう思う。これは、運命よ。あなたは私の話を聞くべきなの。なぜか私が姉さんと私の話をしたくなっているのも、運命なの。私、一般人だから、都合がいい時だけ、運命や占いを信じるのよ？ あなたはどう？

そっか。やっぱり、中身は違うんだね。少し安心。中身も私と同じだったら、私、あなたを殺しちゃってたかも知らないから。だって、もしそうなら、ライバルだもんね。姉さんを巡る、愛のバトル勃発。先手必勝。私の勝ち。一般人でしょ？ この発想。私もずっとねー、この当たり前の考えしか出来ないのをどうにかしたいなって思ってるんだけど、これがなかなか。ねえ、どうやってたら一般人の思考じゃなくなれるか、教えてくれない？

え、うん。そうだよ。私は姉さんを愛してるよ。愛し合ってるよ。毎日ね。それが何か？

フフフ。あなたも好きね。聞きたいなら、教えてあげる。聞きたくなくても、話すけどね。ここで話してもいい？ 眠そうな女の子には悪いけど、なんとなく、あなたとはこうやって、立ち話で話したい。座ってじゃなくてね。なんでだろう。不思議だな。でも、いや。気にしない。私、一般人だから。

私と姉さんは、一卵性双生児。瓜二つ。双子って、生まれたとき一緒なのよ。当然よね。双子なんだから。だからね、当然、死ぬときも一緒じゃなきゃいけないと思わない？ 思うでしょ？ それが普通の考え方で、一般人の考え方なの。だって、考えてみて？ あ

あなたの右手、生まれたときから一緒だったでしょ？ あなたの左手、生まれたときから一緒だったでしょ？ それが死ぬまでに分かれちゃったら、離れちゃったら、いなくなっちゃったら。どう思う？

悲しいでしょ？ 嫌でしょ？ 普通そう思うでしょ？ 一般人な私も、もちろんそう思うの。右手と離れるとか、右手を切断するとか、普通そんなこと考えないでしょ？ それと一緒に。生まれたとき一緒だった私たちは、離れ離れになるとか、考えないのよ。それが、普通よね。それが、一般人よね。

わかってくれて嬉しい。でも、一般的じゃないことが、私たちに二つ起こったの。まず一つは、私が病気にかかった。病名は難しいから割愛するけど、手術しても、死ぬ確立の方が高いような、病気だった。確かにね。私と姉さんは、一緒だけど、同一じゃないんだから、私だけ病気になったりするのもあると思うの。右手だけにささくれが出来るなんて、よくあることでしょ？ もちろん一般人な私は、それは理解してるし、諦めてる。だからね、この事はそんなに重要じゃなかったのよ。問題なのはね。もう一つ、私達に起こった一般的じゃない、非常識なこと。それはね……姉さんが異常だったということなの！ 私の姉さんは普通じゃないのよ！ 私みたいに一般人じゃないの！！ 例えるなら、左手は健常なんだけど、右手にだけ障害があつて生まれてきたような物なのよ！！

え！？ どんな風に姉さんがおかしいって！？ いい？ よく聞いて。まず姉さんは、私と一緒にいたくないなんて言うのよ。おかしいでしょ？死ぬまで一緒にいるなんて、おかしいって言うのよ。おかしいでしょ？ 姉さんは、右手とずっと一緒にいるのが嫌だ。って言うのよ？ おかしな話でしょ？ 狂ってるでしょ？ それから姉さんは、私の事を嫌いって言うのよ。おかしいでしょ？自分と全く同じ顔が嫌いって言うのよ？ 右手が嫌いって言うのよ？ おかしな話でしょ？ 姉さんはね、異常者なのよ。一般人の私には、全く、理解できないの。フッフ、でも私はね。そんな姉さんを愛してるのよ。愛せるのよ。だって、姉さんと私は一緒なんだも

の。ずっと一緒なんだもん。あなた、自分の右手を嫌いになれる？
なれないでしょ？ でも、自分の右手を、愛することは出来るでしょ？ 出来ないなんて嘘言わないでしょ？ 私にはわかるわ。私と同じ顔のあなたは、私と同じ、一般人って。

え？ ああ、確かにそうね。私とあなたと同じ顔の姉さんも、その考えなら、一般人じゃないといけないわよね……あ、そっか。一般人じゃないといけないのに、一般人じゃないから、姉さん異常なんだ。そうだよ。そうなんだよ。もう、惑わせないでよね。同じ顔の人に言われると、まるで自分が言っているみたいで、混乱しちゃうんだから。あ、姉さんは生まれたときから一緒だから、例外だよ？

それで……どこまで話したっけ。ああそうそう。私が病気で、姉さんが異常だつて話までしたんだよね。その二つにどんな関連があるかというとね。姉さん、私を殺したんだよ。フッフ、意味わからない？ 私にはわかったな。だって、私達はいつも一緒だったんだから。姉さんはね。私の事が嫌いで嫌いで仕方なかったんだよね。だから、私が病気になった時も、とても喜んでた。ね？ おかしな話でしょ？ 普通なら、心配するじゃない。なのに姉さんは、喜んだんだよ。私はそれを見て、ああ、姉さんは本当に異常なんだなつて思つて、それでも姉さんの事を嫌いになれない自分に気づいて、自分は根っからの一般人だなつて思つたね。

うん。どうやって殺したかっていうと、もちろん、病気は姉さんのせいじゃないよ。あれは、神様のせいかな。どんな風に殺したかっていうとね。まず、姉さんは、私の手術が失敗するように祈つたの。祈りは通じるっていうでしょ？ あの人死にますように。つて祈っただけで、殺人未遂だと私は思うんだけど、まあいいや。結果的には、私の手術は成功したの。姉さんの祈りは通じなかった。そこで諦めるのが一般人だけど、姉さんはずっと言ってるように異常者だからね。自分で殺す事にしたの。私を。手術が終わって、私がかまだ、機械に世話をしてもらわないと、呼吸が出来ない状態の時

に、姉さんが病室に来てね。もう、わかるでしょ？ 姉さん、私の呼吸器、停めたの。私が寝てると思ったんでしょね。私はバツチり起きてた。姉さんと目が合ったわ。あの時のことは、ずっと忘れない。姉さんったら、私と目が合ったら怯えた目をしながら言うのよ。意識が朦朧としていた私には、不思議とその声がよく聞こえた。気持ち悪いのよあんたは。意味がわからないのよあんたは。私はあんたじゃないのよ。私には私の人生があるのよ。私は私なのよ。私は世界で一人きりなのよ。私は唯一無二なのよ。って。そんなの当たり前じゃん。って、言っておけたかったけど、ああ姉さん、普通の考えが出来るようになったんだね。よかったね。って、言っておけたかったけど。声が出なかつたなあ。そして、私は死んだ。

フッフ、嘘よ嘘。死んでたらここにいる私は何なのって話になるでしょ。私、自分を幽霊だなんて思ってないし、幽霊じゃないからでも、一度死んだのは確かかな。心臓止まったし。姉さんはそれを見て、病室から出て行ったけど、その後異変に気づいた看護師さんが来て、無事、助かっちゃった。

それからどうなって？ 別にどうもしてないよ。その前と変わらず、私と姉さんは愛し合ってるし、幸せに暮らしてるし、これからも、死ぬまでずっと一緒に幸せに暮らして、愛し合う。確かに大変だよ。頭がおかしい姉さんの世話をするのは大変。今もね。家から逃げちゃった姉さんを、仕事を休んで探してるとこなの。しょっちゅう逃げるんだよ姉さんは。幻覚が見えてるのか。いつも怯えててだから私はそれを忘れさせるために、しっかり愛してあげる。私以外の誰からも愛されない姉さんを、私だけが愛するの。私は私を愛すように、姉さんを愛すの。一生のほとんども、姉さんの世話に費やす私の生活を見たら、周りの人は、そんな私が不幸に見えるかもしれないけど、それって、偏見だよ。片腕に障害がある人が不幸かどうかは、その本人が決める事でしょ？ それと同じ。赤の他人に、とやかく言われる筋合いはないよ。私が、私達が幸せなら、周りの目なんて気にしない。一般人ってそういうものでしょ？

どうかした？ 何だか顔色が悪いよ？ ああ、そっか。自分と同じ顔の異常者がいるのを知って、気持ち悪くなっちゃったんだね。確かにそうだよな。自分と同じ顔の人が別のところじゃ、頭がおかしい人だったり、犯罪者だったりするっていうのは、あまり知りたくなかったことだよな。うん。偏見はよくないって私も思うけど、仕方ないか。私もそう思うけど、やっぱり、姉さんじゃなかったら、異常者は気持ち悪いと思うし、例えばあなたが異常者だったら、私も気持ち悪くなってたと思うよ。仕方ないよね。それが普通の反応だよ。

私達、一般人としては、ね？」

6 - 3 ・ 曖昧自身（後書き）

二ヶ月かかって考えた結果がこの様だよ……

6 - 4 ・曖昧自身

9 ・鼎菜

『訪問記録』

訪問者：渡辺結衣。年齢は二十代前半。外見は私そっくり。つまりクールビューティー。服装はボロボロのスーツという犯罪を匂わせるものだった。

訪問はアポなしで行なわれたことに加え、私のおやつを勝手に食べるという傍若無人ぶり。人形にとり憑かれていたとしても決して許されるようなものではない。特におやつを食べるなんて、極悪非道である。外見は私そっくりでも内面は全くの別人のようだ。一般人（笑）の言うとおり、瓜二つの人間が礼儀も知らない人間だというのは、精神衛生上大変よろしくない。一生私の知らないところで生きていて欲しかった。もう知ってしまったてはそれも叶わない。というわけで、死ねばいいのに。『菜ちゃんは金太郎飴みたいに増えるねえ』と呟いていた社長も死ねばいいのに。『金太郎飴食べたい』と寝言を言うありすは寝てればいい。

死んだ妹に殺されると思っていた渡辺結衣は瓜二つの自分に連れられ帰っていった。連れられというか、引き摺られながら帰っていった。人形も空気を察してか、連れてかれる時にとり憑くのをやめたようだ。渡辺結衣は最初、状況を把握出来ていなかったようだ。死んだ妹の笑顔を見たたん、泣き叫び、助けを求め始めた。自分が泣き叫び媚びているようで大変不快だったので、もちろん助けない。まだ依頼を請け負っていないからということもあるが何よりも私のショートケーキを食べたからだ。鏡の自分にショートケーキを食べられる屈辱は、誰にもわからないだろう。絶対に許さない。絶対に。私の知らないところで一生死ぬまで、一般人（苦笑）と仲良く暮らして調教される。一般人（嘲笑）も言っていた。もう逃げる

なんて考えなくさせてあげる、と。きつと今頃、暗い部屋で語り合っているだろう。死者に捕まった人間にしては、天国のように甘い末路だ。私ならもつと凄惨なことをする。具体的に言つとカッターを。

備考：わざわざ見つけて、さらに捕獲しておいてくれた謝礼として一般人様が二万円置いていった。なんていい人なのだろうか。私と瓜二つの人間が、あんないい人だというのは大変喜ばしいことだ。それに比べてあの姉は本当にいただけない。人のケーキを食べるなんて。学生時代に一体あいつは何を学んだのだろう。どうせつまらない人間関係に汗水垂らし、勉強を怠つていたに違いない。そうでなければ、人様の物を食べるなんてこと、しないだろう。一般人様も、あんな出来損ないの双子を持って大変だろう。同情に値する。というわけで、もちろん今回の事は誰にも口外しない。しないとも二万円より多い金額を提示されなければ』

「何だか、ファイバーしているね菜ちゃん」

「勝手に人のパソコンを覗かないで下さい。セクハラで訴えますよ。それとちゃん付けはやめて下さい」

いつの間に私の背後に回つたのだろうか、この社長は。

「ごめんごめん。ドッペルゲンガーに出会つた菜君が、どんな感想を持つたか気になつてね」

まさかショートケーキを食べられた事に憤慨するとはね。と、社長は呆れたように言いながら、自分の席に戻る。

「それ以外のどこに憤慨するところがあつたというんですか？」

全くなかった。

「憤慨以外の感想があつてもよかつたんじゃないかという事だよ」

「気持ち悪いです」

「うん。そうだね」

自分とそっくりな人間がこの世にいるというのは、この世に生きているというのは、この世で生活しているというのは、気持ち悪い。それが例え、血を分けた双子だつたとしても。私は双子ではないか

ら双子の気持ちを中心に理解できないが。双子というのは、不自然なほど似ている、似ようとしている気がする。あれは、自己防衛なのかも知れない。渡辺麻衣が妹を殺そうとしたのは、そういう理由もあったのかもしれない。つまり、自分と同じ姿なのに、全く違うモノを、受け入れる事が出来なかったのではないか。しかし同情には値しない。なぜならショートケーキを食べたから。

「生理的に気持ち悪いモノ何だよ、ああいうのは。人は、自分を理解してくれる人を求めるが、自分自身は求めていない。求めてたらドッペルゲンガーはもっと人気のはずさ。自分と瓜二つの存在だけ？ 自分がやってる嫌なことをゼーんぶそいつに任せれるんだ。最高じゃないか」

「自分の好きな事も盗られるから、嫌われてるんじゃないですか？」
「フィクションでは、それがお約束だ。」

「そうだねえ。そのくらい同じ顔という縁で許してやればいいのに。全く人間って奴は傲慢だぜ」

まるで自分が人間ではないような言い草である。

「しかし栞ちゃん」

「ちゃん言うな」

「俺は今日の事でつくづく思ったよ。栞君を雇って、本当によかった。うん。もしかしたら君は外見で雇われたと思っていたかもしれないが、俺は、君の外見ではなく内面を見て雇ったのだよ」

「それはどうも」

まるで言い訳のごとく自分は外見ではなく内面を重視するのさ。

と言う社長の言葉を聞き流し、訪問者記録の最後に『二万円は社長と私で折半。この一万円でホールケーキを買う』と書き足し、保存。それが双子であれ、ドッペルゲンガーであれ。外見がどれだけ似ていたとしても、内面がどれだけ似ていたとしても。それは私ではない。なぜならそれが、ショートケーキを食べても私は何も感じないからだ。

美味しいとも感じない。甘いとも感じない。満腹も満たされない。

何も、感じない。その違いがある限り、自分と全く同じモノは、ありえない。それが私の自己証明。

パソコンの電源を落とし、帰宅の準備を始める。さあ早く帰ろう。ホールケーキが私を待っている。

エピソード〜証明〜

つまり。ソレが何かを食べて。ソレが何かを触って。ソレが何かをやって。その感じが。その気持ち。その感触。伝わったら。感じたら。ソレとの違いは。皆無になるの。はい。自己証明不可。

クスクス。外見が同じ。中身も同じ。そしてソレが何かをすれば。自分も同じ気持ちになる。それはもう。自分よね。クスクス。まあ。そんなモノ。いないけど。今は。クスクス。

ああ。今日はそれなりに楽しかったわ。誠。

ええ。ちよつとダメなこともあったけど。おおむね満足。これでもうしばらくは。ここで退屈しのぎに誘惑しましょう。あなたのために。あたしのために。クスクス。感謝なさい。

正直。ドッペルゲンガーなんて風情がないと思わない？ 自分と全く同じ姿なんて。クスクス。それじゃあ自分を理解している人間の前にしか現れない。現れられないじゃない。ねえ？ この世には人間以外のモノだってたくさんあるというのに。そんなんじゃ。最近のオカルト界限じゃ。やっていけないわよ。

はいはい。うるさい奴ね全く。あんた。そんなにドッペルゲンガーが好きなの？ 今度紹介してあげましょうか？

最近のブームはあたしみたいな奴よ。クスクス。自画自賛。正体不明。曖昧模糊。説明困難。論理で理解は出来ず。感覚で理解したと錯覚するモノ。いるかないか。何がソレで何がアレか。定義し観測した瞬間。別モノに変質するモノ。そういう存在。理解不能。魑

魅魍魎。一週まわってそういうのが。今はブームなの。つまり。あたしの時代よ。

今のうちに。あんたもブームに乗ってみるのがいいんじゃない？
クスクス。強がらなくてもいいのよ誠。誠。誠。ああ誠。正直者。
嘘や偽りを認めない。素敵な名前ねえ。だからこそ。ドツペルゲン
ガーに。惹かれるのかしら？ クスクス。

本当に。素敵な名前。その名前。あたしにくれてもいいのよ？ 強
がらなくてもいいのよ誠。後はあたしが全部やってあげる。あなた
のこれからの苦難も。あなたの今までの悲哀も。全部全部全部全部
代わってあげる。請け負ってあげる。だから。あたしを。受け入れ
なさい。あなたの悩みを。解決してあげる。『あたし』だろうと『
誠』だろうと。何も変わらないのよ。些細な問題よ。さあ。あたし
と一つになりましょう。

あ。ちよ。こら。遮断すんな。受け入れる言って何で遮断する。逆。
逆でしょ。オープンにしなさい。オープンユアマインドよ。ああ。
ちよつと待ってこれだけは言わせて。散歩のこと。栞にちゃんと言
っておけっしておいこら待てこらクソが！！ 人形だからって舐めて
んじゃねえぞ！！

ああもう本当にやだ。早く自由が欲しいなあ。

エピソード〈証明〉（後書き）

こんな終わり方になってしまって、本当に、すまないと思う。

プロローグ・人形の暇つぶし

お散歩。お散歩。楽しいなあ。クスクス。

ああ。籠の中というのを除けば。最高の気分ね。もう。本当に。久しぶりに。あの場所から動けた気分。本当に。素敵素敵超素敵。

ああ。こんなに素敵なら。あの時やっぱり。痴女の体を手に入れたとき。誠をからかうんじゃない。あのままだどこか遠くに走り出せばよかったわ。もう。失敗失敗。

でもそれだと。今こうやって。散歩が出来なかったわけよね。クスクス。それも困るわね。この散歩。なかなか楽しいもの。ねえ。彗？

クスクス。目立ってるわよ。目立ってるわね。籠の中の鳥を散歩させるならまだしも。籠の中の人形を散歩させてるんだもの。ねえねえ。今どんな気持ち？ねえってばあ。

ああもう。本当に。あんたとは相性が悪いわ。もつと心に穴を開けなさいよ。あたしとの意思疎通が。難しくなってるじゃない。ほら。聞こえてる？聞こえてない？聞こえてないなら。もつと絶望しなさい。自分を嫌いになりなさい。今の状況に嫌々しなさい。

クスクス。おっけー。いい感じよ。え？なに。疲れたって？あんたは相変わらず。体力ないわねえ。あたしよりなかったりしてね。

肯定するところじゃないでしょ。あ。ちょっと。そこに入るのはいけど。ちゃんと。人形が可かどうか聞いてよね。あたし。外で待ってるなんて。まっぴらごめんだから。

クスクス。そうだ。ねえそうだ。あんたが休んでる間。あたしは見ての通り暇なのよ。だからね。ちよつとあんた。昔話でもしてごらんなさいよ。

どうしてかって？別にどうだっていいじゃない。ちよつと興味がわたいたのよ。あんたの過去に。あの場所の過去に。

あたしにだって。人形にだって過去があるんだから。あんたにだってあるんでしょ？

ちよつと話して見なさいよ。

あたしが来る前の。あたしがあそこに閉じ込められる前の。ずっと昔の。あんたの過去を。

あたしに教えて。心を開いて。あたしになつてみるのも。悪くないんじゃない？

クスクス…。

7-1・カニバリズム信仰

0・鼎菜

どうしてこんなことを私がしなければならないのか。と、今日私は何度自問しただろうか。これも仕事だ我慢しよう。と、今日私は何度自分に言い聞かせただろうか。もはや数え切れないほど、私はその二つを繰り返している。鳥籠に入った、人形を片手に。

そもその原因は、社長にある。勝手に私が散歩に連れて行くという約束を、この人形にしたのがいけない。『約束したのは社長なのだから、社長が行けばいいじゃないですか。店番は任せてください』と、私が言ったところ『いや、菜ちゃんのドッペルゲンガーが大本の原因だから、ここは菜ちゃんに尻拭いをしてもらうしかないよね』と、言ってきた。とりあえず、ちゃん言うなよ。と、言ったのは言うまでもない。

結局、私は本当に、街中を、人形片手に散歩することになった。しかも、社長が出かけに、私の心をご親切に抉ってくれたせいで、いつもはたまにしか聞こえないこの人形の声が、クリアにバツシ聞こえてくる。大変、不愉快極まりない。無視するのも苦痛だし、答えるもの苦痛だ。はたから見たら私は人形に話しかける可哀想な人間に見えるのは間違いない。しかし、事実私は可哀想な人間なので、なんら恥じることはないのだろうと、思わなくもない。

唯一の救いは、平日の昼間ということ、街に人が少ないという事だろうか。苦痛に比べれば、小さな救いではあるが、ないよりはいいだろう。あ、後、主導権はこちらにあるというのも救いといえは、救いだ。体力に自信がないということに自信がある私は、自分のペースで歩かないと死ぬ。簡単に、人は死んでしまうということを、私はまさに身をもって知っている。だから、自分のタイミンで休憩できるというのは、命に関わる大きな救いといえるかもしれない。

人形がNGの喫茶店というのは、ほぼない。人形に優しい社会になったのね。と、人形は言っていたが、人形を持ち込む人がほぼいないが故の、NGなしということなのは明白である。しかし、そう指摘するのも面倒なので、そうですねと答える私はどうせ、ずばらである。喫茶店に入り、一応、二名であると伝えた私は、それなりにいい人間と言われてもいいと思う。後から来るんですか？ という質問に、いえ、こいつです。と、正直に答えた時の店員の目は、今日一日忘れられそうもない。

二人がけの席に案内され、向かいの席に鳥籠、もとい人形を置くのと、周りの視線を感じたが、そういうのには慣れっこなので気にせず、私は二つの意味で一番高いパフェとメロンソーダを注文した。今回の散歩は、一応仕事という扱いになっているので、経費も落ちる。落ちるなら、使わないと損である。

常識的な話、人形は飲食など出来ない。そもそも人形はお喋りも出来ないはずなのだから、すでにお喋っているこの人形に常識を当てはめようとするのは間違っているのかもしれないが、この人形も、飲食は出来ない。だから暇だと愚痴り始めた。私が、黙ってなさいと言つと、それでは今日という日の意味がなくなると喚く。しまいには、昔話をしろと言ってくる始末だ。

まあ、面倒なことだが、人形の提案に乗ってみるのも悪くない。自分の過去を思い出し、自分というものを再確認する。そういうことが、大切な時というのは、確かにある。今のように、少々、心が挟られている時なんかは、そういう時だ。

そう、あれは今から約四年前。私はまだ、この場所で働き始めて数ヶ月であり、パソコンも持ってはいなかったときの話。私が初めて、一人で解決したおかしな相談だ。

1・鼎菜（過去）

都市伝説のように語られていた『名前のない立方体の箱』に私が

コンクリート

たどり着いたのは、四月のことである。なぜ社長が私のような高卒で、手に職もないような女を雇ったのか。入社した当時は不思議に感じることもあったが、今はわかる。ありすの世話をさせるために雇ったのだろう。あの社長は、本人は決して認めないだろうが、ありすを溺愛している。どうでもいいと思っている少女に、あんな豪華なベツトを買い与えることはないだろうし、ありすの衣装は私の趣味が主だが、金は全て社長から出ている。つまり私が、ここで働けるのはありすのおかげという事になるのかもしれない。もっといえば、私がここ以外で働き、金を稼ぐことが出来たとは思えないので、私が生きていられるのもありすのおかげなのかもしれない。しかし、ありすの前でそんなことは絶対に思ってはやらないし、感謝もしない。なんだかしゃくだから。

そういう経緯で雇われたため、入社した当初の私の主の仕事は、ありすの世話だった。世話といっても、食事の世話は社長がしていたので、主に私は衣装の類と、話し相手と言う名の、暇つぶしの相手だった。当時のありすは、今よりももっと小さく、まさに着せ替え人形という感じであった。私も一応、女であるので、自分では絶対に着ないような、着られないような洋服をありすに着させるのは、なかなかにおもしろかった。これで、ありすが生意気ではなく、外見同様、内面も可愛らしい少女だったなら、より一層楽しかったに違いない。

もちろん、ありすの世話だけが私の仕事ではなかった。今のありすも寝ることが多いが、当時のありすの平均睡眠時間は約16時間。半日以上は夢の世界に旅立っていたのだ。ありすの世話だけが私の仕事だったら、大変な職場であったのは間違いない。まず、社長が私に命じた仕事は、車の免許を取ることだった。何でも、社長は免許を取ることが出来ないのです、私にとつてもらいたいのことだった。何故、免許を取れないのかは、深くは追求しなかったが、このような仕事をしているのだ。色々あるのだろう。

もちろん、教習所に通うお金は社長が出してくれた。さらに、試

験を一発で通れば、車まで買ってくれるというではないか。私はお金と食べ物に弱い人間であるため、やる気がみなぎり、試験を全で一発で通り、車の免許と車を手に入れた。その時、買ったもらった車は、今も大切に使用っており、私の宝物の一つといえるかもしれないが、壊れたら、即違うものを買う予定である。それくらいの貯金は、すでにある。

車を手に入れてからは、私の仕事内容に、社長を仕事に連れて行くというのが追加された。そして、社長と一緒に相談内容を解決するという、仕事らしい仕事も、その辺りから始まった。一緒に。と、いつても、社長が口八丁手八丁で解決しているのを、今日のご飯どうしようかな。とか、考えながら見守るだけだったのだが。

当時の私は、そのような感じだった。今と、ほぼ変わらないような気もする。違う点は、パソコンという暇つぶしがなかったため、あの場所にある本を読み漁っていた事と、一人で仕事を請ける事がなかった事ぐらいだろう。ああ、それと、人形がいなかった事も、違いといえば、違いかもしれない。

そんな風に、私があの場合で過ごして、数ヶ月後、その依頼人はやってきた。

確かその日は、朝から秋雨が降っていた。『雨が降ると厄介事が起きる』というのは、もはや私にとって、『他人があくびをすることあくびが移る』という現象並みに、因果関係がはっきりしている事だったので、その日も私は朝からおやつ時のその時まで、カッターの手入れに余念がなく、社長に呆れられていた。

「栞ちゃん、カッター何本持ってんの？」

「ちゃん言わないで下さい。ざっと、数十本ですね」

「カッターマニア、ここに極まるねえ」

とか、そんな会話をしていると、チャイムが鳴った。

「社長。見ての通り、私は手が放せないのです。よろしくお願いします」

「いや、栞君。カッターはしまってください。磨くもの禁止ね。怖いから」

「……わかりました。しまうのに忙しいので、開けるのはお願いしますね」

「結局かよ」

とか、そんなやり取りを経て、社長がドアを開け、依頼人を招いた。入ってきたのは、見るからに裕福そうな身なりをしている女性と、見るからに執事な老人だった。女性はネックレスや指輪をたくさんつけ、サングラスまでして、厚化粧だったので、私の中で、女性には貴金属おばさま、老人はセバスチャンということになった。この依頼人の名前を私を知ることはなかったため、最後まで、そして今に至るまで、この依頼人は貴金属おばさまとセバスチャンである。「どうぞ」

セバスチャンはセバスチャンの名に恥じず、ソファアに座らなかつたので、貴金属おばさまと社長にだけ、お茶を出し、私は席に戻る。

お茶を出した後、私に仕事はない。対応は社長にほぼ任せてるのは今も過去も変わらずである。今は、依頼書もどき作りという暇つぶしをするが、あの時は、ただただ暇であった。かといって、カッター磨きは社長に止められているし、肩肘をついてあくびをしたり、デスクに突っ伏して寝るのはありえない。おやつを食べるのもよくないだろう。という事で、本を読むことにした。読書くらいなら、印象も悪くはないだろうという私的判断である。確かあの時読んでいたのは、日本の民話をまとめた本だった気がするが、本の内容はどうでもいい。重要なのは、私はあまり、社長とセバスチャンの話を聞いていなかったという事である。

「人魚の血、ですか」

「はい」

だから、私が二人の会話を聞き始めたのは、『人魚の血』という不穏なキーワードが耳に入ってきてからという事になる。

「私、いくつに見えますか？」

貴金属おばさまが、急に（まあ多分急に）サングラスを外して、

社長にそんな事を尋ねた。顔には、遠目からでは、しわもしみもないように見え、髪のつや、声質、服装、厚化粧等を考慮した私の見立てでは、彼女は四十代である。社長も恐らく、というか後から聞いたところ、やはり四十代と判断したようだ。判断した上で「三十代、くらいですか？」と、答えた社長は、その外見にふさわしいホストタイプである。

「奥様は今年で六十二になります」

セバスチャンの言葉に、私も、そして社長も、驚いた。そして、また一度、貴金属おばさまを見た。とても六十代には見えない。若々しい。生きてきた証足るものが、彼女の顔には一切見受けられなかった。しかし、嫉妬でも、僻みでもなく、素直な感想として、貴金属おばさまを美しいとは思えなかった。若々しいが、それは作られた若々しさに見えた。自然から遠く離れた、人工物。脆く、取り繕ったようなその造詣は、触れれば一発で、偽者と看破されてしまいきそうな、脆弱なものに思えた。簡単に言えば、整形してまでその姿は得る価値があるのか。私には理解できなかった。今でも理解は出来ない。もっと成長すれば、理解できるのだろうか。

私がそんな事を思っている間にも、話しは続いていた。

セバスチャンの話によると、貴金属おばさまは、ありとあらゆるアンチエイジングを行なっているらしい。食事や運動はもちろん、科学的に実証されているなんちゃら呼吸法や、最近発見された老化を防止する栄養サプリメントや、科学手に実証されているつけているだけで若々しくなるネットクスなどなど、本当に、ありとあらゆるモノを試しているらしい。金持ちめ。

「なるほどなるほど、それで、人魚の血、ですか」

『人魚の肉を食べ、血を飲めば、不老不死になれる』

そういう伝説は、数多く存在する。しかし現実に、人魚なんているわけがない。伝説は、伝説である。しかし、ここに来て、そんな事を言うという事は、信じているのだろうか。

「はい、人魚の血には不老不死、そして若返りの効果もあります」

セバスチャンはそう言ったが、八百比丘尼伝説では、若さを保つだけで、若返りはしない。もちろんその事を、口には出さなかった。「つまり、人魚の血を手に入れてもらいたい。というのが、ご依頼でしょうか」

「いえ、違います」

「違うんですか？」

私もてっきりそう思っていたので、貴金属おばさまの否定に、社長同様驚いた。

「人魚の血や、肉は、すでに試しました」

「……あ、そうなんですか」

社長の作り笑顔が、一瞬、固まったのを、私は見逃さなかった。見逃さなかったから、どうだという話だが。

「しかし、効果はこの程度。私はもつと、若くなりたい。過去の美貌に戻りたいのではないのです。今の、美貌に戻りたいのです。あの青春時代に戻りたいのではないのです。今の時代で、若々しい姿で、誰もが羨む美貌で、青春時代を送るのが私の夢なのです」

「それは、素晴らしい夢ですね」と、簡単に返せた社長はすごいなあ。と、テキストに思った覚えがある。

「それで、ご依頼は？」

「そんなに難しいものではありませんよ」

貴金属おばさまは上品に微笑み、セバスチャンを一瞥した。するとセバスチャンは「かしこまりました」と言つて、ポケットから写真を取り出した。さすがセバスチャンだなあ。と、テキストに思った覚えがある。

「人魚の血、肉を食べても若返らなかつた原因はわかっています。アレは、人魚ではなかつたからです。人魚を探すのは、莫大な時間と労力がかかります。そしてかけても、それが本物である可能性は低い。と、私はこれまでの経験で理解し、学習しました。そして私は思ったのですよ。ならば、本物であることがわかっているモノを捕まえばいいと」

正直、私にはちんぷんかんぷんな話だった。しかし、話している貴金屬おばさまが、ナニかを本気で信じているということは、わかっただ。この場所で働く上では、それが一番大事なことなのである。ということにして、理解を放棄した私は若かった。

「その写真の女性、八百比丘尼の子孫であるその女性の血を手に入れているだけですか」

依頼内容を口にした瞬間の貴金屬おばさまの顔は、今でもはつきりと思い出せる。

ゲテモノ料理を前にしたにも関わらず、心の底から早く食したいと思ひ、今にも舌なめずりを始めそうな、この世で唯一人間だけが浮かべることが出来る醜悪な笑みを、彼女は浮かべていた。

7-2・カニバリズム信仰

2・鼎菜（過去）

貴金属おばさまとセバスチャンは、やはりお金持ちだったらしく、前金として二十万も置いていった。八百比丘尼の子孫の血を手に入れることに成功したら、さらに三十万とのことだ。社長の笑顔の輝き度が数十パーセント増しになり、私も本を閉じ背筋を伸ばした。

しかし、そんな大金をポンと出せる人種なら、こんな得たいの知れない場所に頼まなくても、自力で何とかなるのではないかと思っただ。その事に関しても、何かセバスチャンが説明していたが、私は二十万円に夢中でよく聞いてなかったので、よく知らない。どうも失敗したとか。信用できないからこそ信用できるとか。そんなことを言っていた気がする。

「いやあ、バカな金持ちほど、世の中のためになる人種はいないねえ」

貴金属おばさまとセバスチャンが去った後に、社長が言った言葉である。全く持って同意見だった。今、あの貴金属おばさまが何をしているかは知らないが、今もどこかでこういう風に、社会に金を回していて欲しいと切に願う。その金が回りまわって、私の懐に転がり込んでる事をさらに願う。

貴金属おばさまが帰ると、まあ帰らなくてもだが、私はまたカッター磨きを。社長は、貴金属おばさまが置いていった資料を読んでいた。資料というのは、八百比丘尼の子孫であり、今回のターゲットである人物について書かれているものだ。写真だけでなく、すでに住んでいる場所までわかっているらしい。そこまで調べたのなら、二十万なんて払わず、身内でどうにかすればいいのに。どういふことだろう。ただ単純に、実行犯になりたくないだけか、それともそれほど厄介な相手のか。ということをも、カッターを整備しながら私

はぼんやりと、他人事のように考えていた。例え、厄介な相手だろうと、仕事をするのは社長だ。私はその後ろをついていければいい。そういう風に考えていたからだ。

「なにしてるの？」

いつの間にもいたのか。隣に、フード付きの動物パジャマを着た寝癖が酷いすがいた。眠いからか、それとも私の机の上に散乱しているカッターのせいなのかは定かではないが、その目つきは訝しげであった。

「カッターを磨いているんですよ」

「なんで？」

「雨が降っているからです」

「へんな栞ちゃん」

「ちゃん言うな」

という流れをした後、ありすはソファーにふらふらと歩いていった。どこかその背中中は、満足気に見えた。『ちゃん言うな』と、言わせたかったのだろう。よくわからん幼女である。

「一日中パジャマとは。いいご身分だねえありす君？」

「しごと、ないもん。だから、ねててもいいの」

「それもそうか」

たやすく社長はそれを許し、ありすはソファーに寝転がりながら、あくびをした。まだ寝る気なのだろうか。なら上で寝ていればいいのに。あのベットは、高級品にふさわしい寝心地だ。ソファーなんて比べ物にならない。

「おやつは？」

どうやらありすは、睡眠欲ではなく、食欲を満たしに来たようだ。時刻は確かに、おやつにふさわしい時間だった。私はすでに、貴金屬おばさまが来る前にケーキを食していたからその欲求はないが、ありすはその時、惰眠を貪っていたはずだ。しかし惰眠ではおやつ欲求は収まらない。

「その冷蔵庫にケーキが入ってるよ。栞ちゃんが近いね」

「じゃあ栞ちゃんにとって」

「自分で取りなさい。後、ちゃん言うなと何度いわせる気ですか二人とも」

「あきるまで」

「上に同じく」

その飽きは、四年経った今でも来ていないらしい。ブームが長く嬉しくともなんともない。

ありすはとてとてという足音がしそうな覚束ない足取りで、部屋の隅の冷蔵庫に。しばらく中身を吟味し、中から、確かチョコレートケーキを取り出した。そしてその場で、手づかみで食べようとして「フォーク使えよ」と、社長に叱られた。行儀に厳しいお父さんである。「はい」と、おとなしく従うありすは素直な娘である。こつちを見て、社長に見えないようにべーっ舌を出すありすは、すでにお父さんが嫌いになりつつある反抗期の小娘である。

「栞ちゃん」

娘がそんな反抗的な態度を影でとっているのに気づいているのかわからないのか。社長は私に声をかけた。

「ちゃんはやめる。何ですか」

「八尾比丘尼高校って、知ってる？」

社長に言われて、数秒、天井を見上げて思い出す。その高校は、私が数ヶ月前まで通っていた高校だ。すっかり忘れていたが、思い出したから問題ないだろう。

「知ってます。もしかして、八百比丘尼の子孫というのは、校長のことですか？」

「その通り。何だ、知り合い？」

「知り合いというわけではないですが……」

高校に通っていたからといって、その高校の校長と知り合いというわけではないだろう。

八尾比丘尼高校は、私立の高校であり、自由を売りにしている大変素晴らしい高校である。何せ、私は一度も体育に出席していない

というのに卒業できた高校である。一度も授業に出ず、テストも受
けずして卒業した生徒もいるという話もあった。そんな高校が普通
であるわけもなく、生徒も教師も変人が多かった。その高校を作り、
トップに君臨していた校長は、少なくとも、交友関係が全くなかつ
た私の耳に入ってくるほどの人格破綻者ではなかった。ただ一つ、
私も知っている、私にもわかるおかしな点があった。

「実物には会ったことあるならオツケーさ。これマジ？写真加工し
てあるんだよな。実物はもつと老婆らしい姿なんだろ？」

「いえ、実物もこんな感じですよ」

社長が離れたところから放り投げてきた写真は、うまく私の机の
上にのった。その写真には、私の記憶と同じ姿をした校長が写って
いた。染めたようにも見えない白髪一本もない艶やかな黒髪に、皺
一つ見つけられないその弾力がありそうな肌。そして何よりも、貴
金属おばさまから感じたあの人工的な要素を全く見出せないその姿
は、二十代にしか見えない。しかし、実年齢はもうすぐ六十である
らしい。なるほど確かに、八百比丘尼の子孫にふさわしい姿だ。そ
ういえば、名字も八尾比丘尼だった。下の名前は忘れた。

「マジかよ。本物と信じちまう気持ちもわかるな」

「なんのはなし？」

チヨコレートケーキを五分も経たずに腹に収めたありすが興味を
示し、私に近寄ってきたので、写真を渡す。

「だれこれ。誠のかのじよ？」

「ちげえよ。俺に年上趣味はない。つて、何だよその目は」

私とありすの目に、社長はひるんだ。私は、つまりロリコンか。
という侮蔑がこもった目で見たわけだが、ありすは、信じられない
という疑いの眼差しを向けていた。

「お前ら、今、考えていること言ってみろ」

「ありすを雇ってる理由がわかりました」

「誠、お母さんにメロメロだった」

私たちは正直者であった。社長はため息をつき「お前ら、もう少

し、俺を敬え……」と、ため息をついた。

3・鼎菜

という感じのとこまで人形に話し、店員がパフェを持ってきたので、中断。店員の目は、完璧に危ない人間を見る目だったが、私は気にしない。値段にふさわしい高きなパフェにスプーンを突き刺し、攻略を始める。

ちよつと。早く続き話しなさいよ。パフェなんて後でいいじゃない。

人形がなんか言ってきているが、このパフェにはアイスクリームものっているのだ。溶ける前に食べないといけない。

「疲れたので、少し休憩です」

全く。これだから人間は。人形なら喋り疲れるなんてことないのに。下等な生物よねえ。本当に。クスクス。

いや、お前は生物でさえないだろ。と、心の中で言いながら、生クリームを口に入れる。甘くて美味しい。

ちよつとあんた。まさかと思うけど。それを食べ終わるまで休憩とかいうつもりじゃないでしょうね。あたしはそんなに待てないわよ。早く話しなさいよ。その後どうしたのよ。

「その後は、確か、久し振りに大きな金が入ったので、社長の奢りでファミレスに行きました」

はあ？　そういうアットホームな話はどうでもいいのよ。ってか。あんた達。今より仲良しな気がするのには気のせいかしら？　特に。

誠がありすを溺愛し過ぎているような気がするんだけど？

「それは私が恣意的にそう言ってるだけで、ありすと社長の関係は今と変わりないと思いますよ？ あ頃から、社長はありすに仕事もさせてましたし」

どんな？ あの。クソ生意気なガキの時みたいなお仕事？

「ええ、そうですね」

私が入社して、二ヶ月くらい経ったとき、『子供が心配だから、子供の通学路途中にいる犬をどうにかして欲しい』という依頼がきた。その依頼のとき、社長はありすを使った。夜中に、社長が家に忍び込み、犬の鎖を外して、外で待っているありすの腕に噛みつかせる。そうすると当然、ありすは痛みで泣き、何だ何だと近隣住民が出てきて、その犬と飼い主を問題にさせるといふ手法をとって解決した。ありすの左腕には、今でもその時の噛み傷がうつすら残っている。とても痛そうで、絶対に私なら拒否した。と、思ったのを覚えている。

クスクス。なあにそれ。別にそんなことしなくてもいくらでもやりようはあったでしょうに。わざわざありすを使うなんて。クスクス。ああおかしい。そんな道具みたいに使つといて。手づかみでケーキ食べるのは怒って。レイプされそうになったら守るわけね。ああ。いいわ。あの男は本当に。あたし好みに壊れてるわ。

気のせいだと思うが、無表情である人形がうつとりしているように見えた。それはそれとして、このパフェのフルーツが美味しい。幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9790j/>

神様はサイコロを知らない

2011年12月12日00時54分発行